

ヒマラヤ、そして仲間達へ!!

HAJ登山学校1980年の記録

ガンゴトリ山群 ケダルナート峰(6940m)



日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

ヒマラヤ、そして仲間達へ!!

HAJ登山学校1980年の記録

ガンゴトリ山群 ケダルナート峰(6940m)

1980年 日本ヒマラヤ協会 インドヒマラヤ登山隊

HAJ Gangotri Himalaya Expedition 1980

— 登 頂 —



1980年10月2日午前10時第2次隊登頂。
この16名がケダルナート・ドーム（6,831m）の頂に立った。

—アプローチ マーチ—



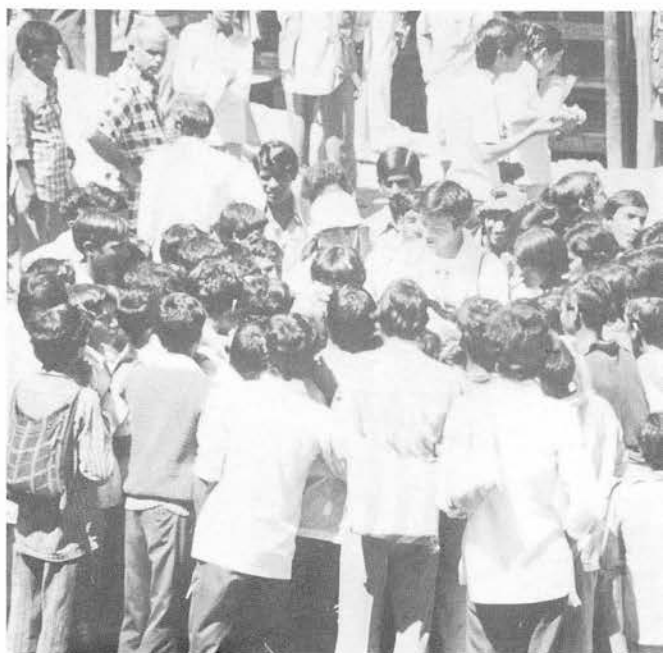
△ダブラニの子供



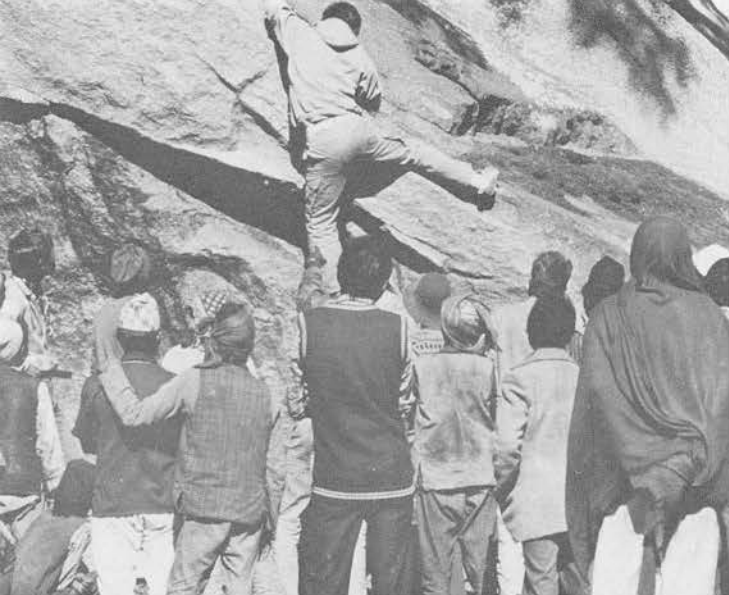
△キャラバン開始／（ガンガニ）



△山羊の親子



△“えへとナマステ。それから ……。”（ウッタルカシ）



△「こりゃ、5.11かな!?!」(ランカ)



△ポーター



△バギラティを背景に(ボジュバス)



▷
ガンゴトリ寺院

登攀活動



△ケダルナート・ドーム（6,831 m，左）ケダルナート（6,940 m，右）



△B・Cでの食事



△荷上げのひと時（背後はシブリン）

▷
アドバンス・ベース・キャンプ



第1キャンプ

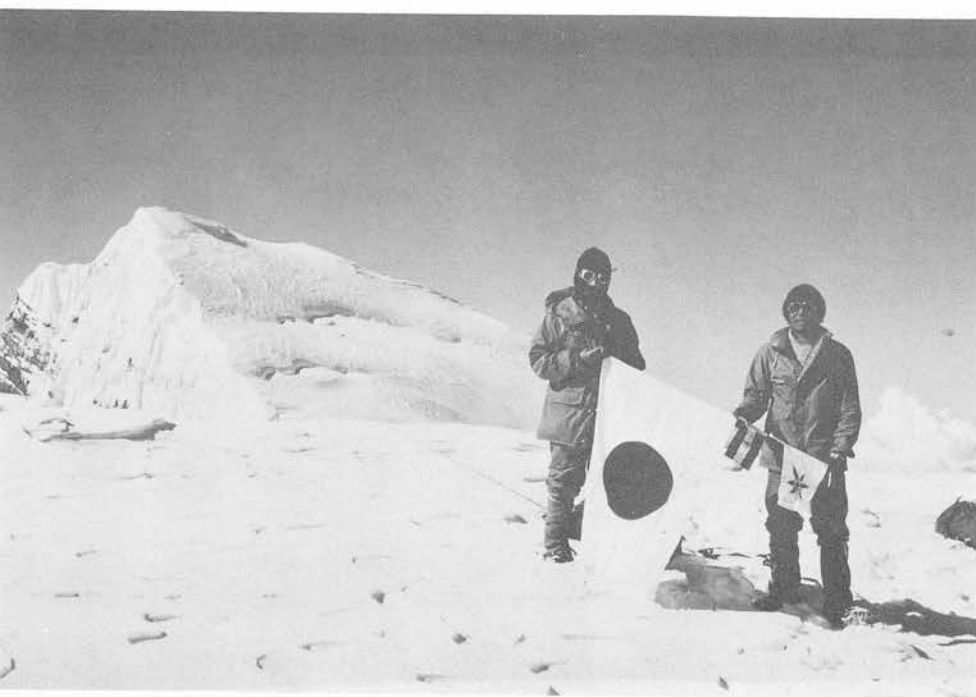
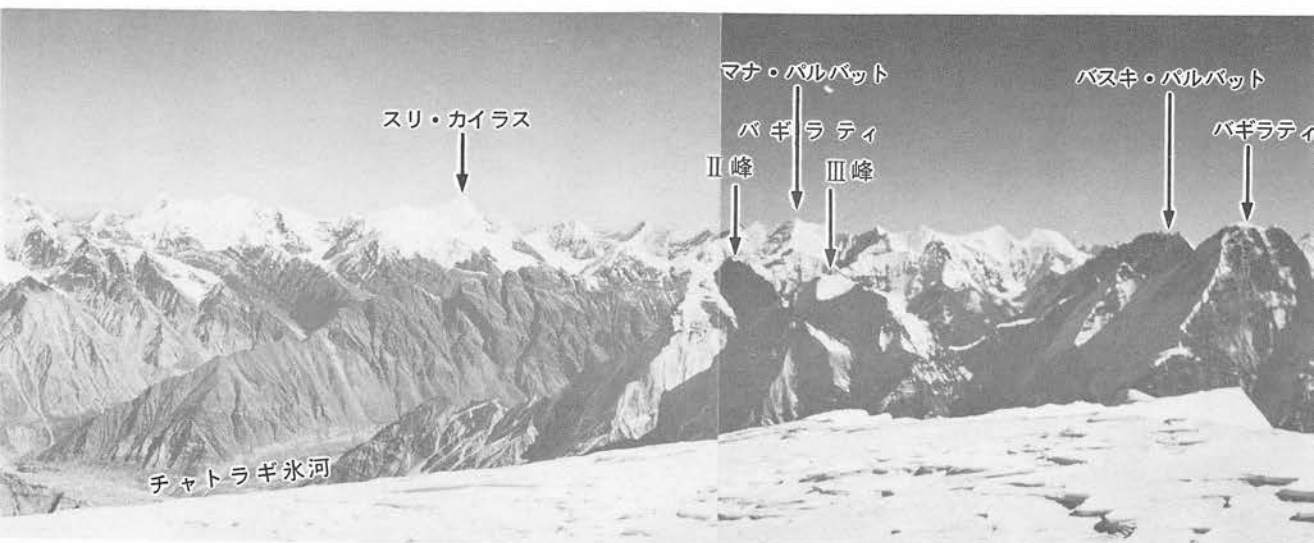


△オランダ隊

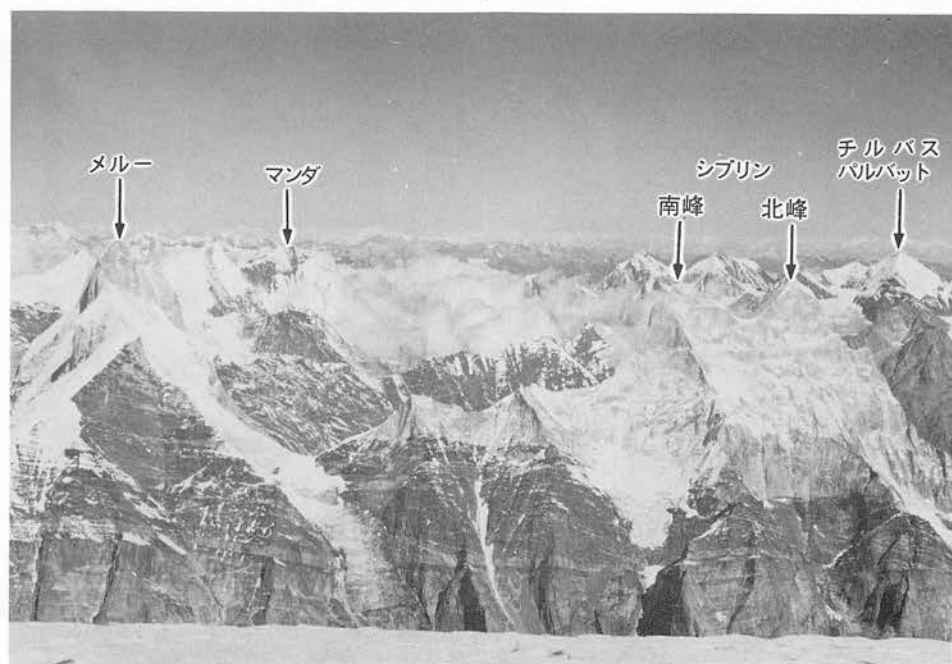
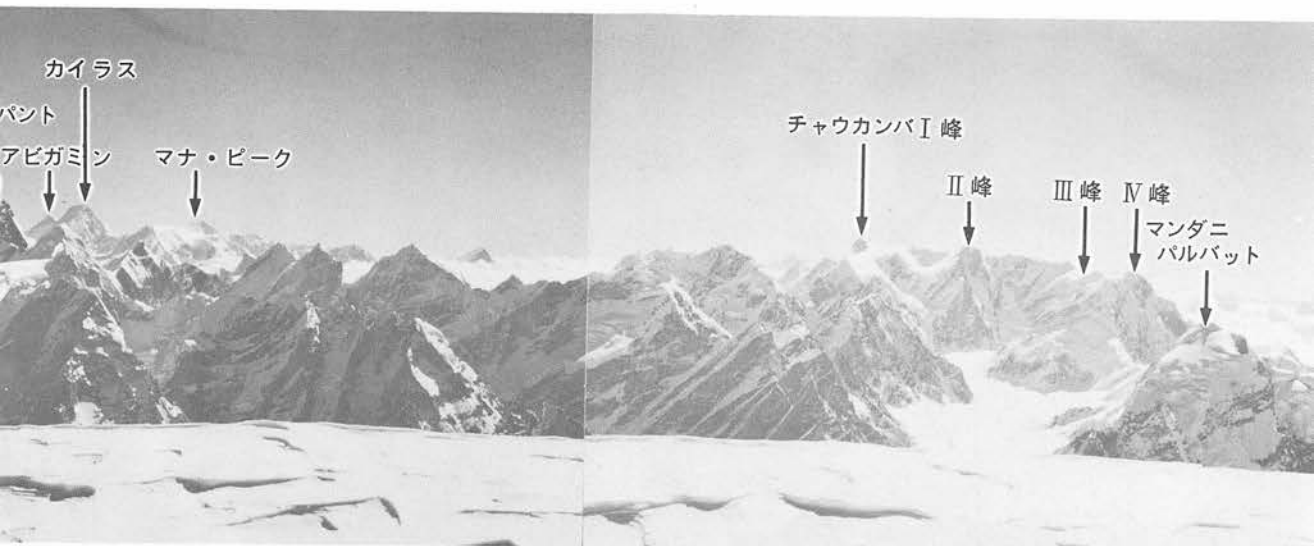
▷
C・2への登高



頂上からのパノラマ



△ドーム頂上からのケダルナート本峰 (6,940 m) (第一次アタック隊)



— 仲間達 —



斯くて、聖なる地の山の闘いは終り、再び元気な仲間達の顔が
ここベースキャンプに集まった。



目 次

序 文	日本ヒマラヤ専務理事 稲 田 定 重	1
は じ め に	1980年HAJ インドヒマラヤ登山隊隊長 尾 形 好 雄	2

計 画 と 準 備

1980 年HAJ ヒマラヤ登山学校計画	5
計画, 隊の構成, 出発まで	尾 形 好 雄 9
ケグルナートの仲間たち紹介	11

行 動 の 記 録

ガンゴトリへのアプローチ	25
概 念 図	26
登 頂 記	菊 池 春 枝 27
先発隊の記録	関 久 雄 28
本隊キャラバン	斉 藤 光 明 32
登 山 の 概 要	尾 形 好 雄 33
帰路キャラバン	遠 藤 喜重郎 36
行 動 表	38
食 糧	42
装 備	56
英 文 報 告 書	木 村 陽 子 67

遠征を振り返って

仲間たちへ	角田不二	73
なんとなくうすい酸素の体験	宇佐美博康	74
私のケダルナート遠征	遠藤喜重郎	75
ヒマラヤ登山の思い出	大野廣美	76
母子草	菊地春枝	77
80'HAJ ケダルナート・エクスペディションに参加して	北出昭彦	79
無限の可能性を求めて	木村陽子	80
熊さんの感想文	熊谷洋	80
ピーク 6,831メートル	斉藤光明	81
感想	新郷信廣	82
インドの放浪芸	関久雄	83
ヒマラヤへの長い道	高瀬敏久	84
感想	藤岡明生	85
10月2日 登山,そして	丸誠一郎	85
感想	山形正己	86
お世話になった方々		87
編集後記		87

序 文

日本ヒマラヤ協会専務理事

稲 田 定 重

ヒマラヤ遠征のトレーニングシステムとしての、登山学校創設を考えたのは1976年であった。

省りみるに当時のHAJの実力からすると、かなり荷の重いものであったといえよう。以来8,000 m峰1回、7,000 m峰4回、6,000 m峰2回の経験が蓄積され、1980年、ケダルナートを迎えた。

当初目的としたケダルナート登頂はならなかったが、ドームの頂上に19名も立つことができ、喜びを共にできたことは、登山学校として成功した遠征といえるだろう。

78年のトリスル遠征のレポートにも記したが、我々の登山学校システムには、チーム成立の動機を主因とする実に大きな困難を背負っている。また、登り方そのものにも一般の遠征にはみられない命題が存在している。

組織運営にあたる者としては帰国するまでおちつかない日々を送ることになる。

81年、ナンダ・カートにおける悲劇は我々にたとえようのない衝撃を与えた。運命の日から半年余、7人の人間の死という重みは日を経るごとに増している。

この悲しみの中にあって我々は登山学校というものの実体を問い続け、強化すべき幾つかの点を見出し、なお継続の意志を固めたのである。日本ヒマラヤ協会の方向を考えると、登山学校は大きな困難を背負っても、また、財政的に損失であっても永続的に実施して行くつもりである。

登山学校はトレーニングシステムとはいえ、目的とする究極は人づくりにある。ヒマラヤ遠征の機会に恵まれない人たちに、遠征の場を与えてやるのがこの学校の遠征であると思われがちだが、決してそうではない。この学校を終えた者が、より充実した自らの遠征に飛躍するための跳躍台が、HAJの登山学校なのである。

幸いにして我々の意図するところは、着実に萌芽しつつある。3名の8,000 m峰遠征に、リーダーあるいはメンバーとして数名の者が中核となって活躍しており、その他の者もそれぞれの夢をふくらましながら精進している。

これまでの各年度の卒業生は、いわば同期生として、帰国後も山の名を冠した〇〇会というものをづくり、互いにコミュニケーションを密にしている。ケダルナート隊もこの点はうらやましいほどのチームワークを保っているようである。楽しい遠征であったことをしのばせる証明である。

人と人とのつながりは、我々貧しい山屋にとってはかけがえのない宝であり、いつまでも大切にしていきたいと思う。

このレポートは、ケダルナート・ドームの頂をめざした20人の仲間のメモリアルである。そして、永続する友情を更に強く支えるきずなともなるものであり、願わくばHAJの明日を担う大きなエネルギーともなってもらいたいと思う。

1982年3月23日

はじめに

1980 年 HAJ インドヒマラヤ登山隊

隊長 尾形 好雄

成田から成田まで28日間という電撃的な作戦で、インド、ガールワール・ヒマラヤは聖なるガンガの源流に聳えるケダルナートへと向かった。我々 HAJ ヒマラヤ登山学校隊の20名は、9月のはじめに悠久なる大地、インドへ降り立った。

時間とサービスをお金で買おうということから、現地の渉外業務は殆んどインドのエージェントにお願いしたので、あの灼熱地獄のような世界でのアルバイトもそれほどなく、本隊はニューデリーに着いた日に早くも涼しさを求めてウッタルカシへと向かった。

ネパールなどに比べて山岳道路の発達しているインドでは、かなり奥地まで交通機関を利用できるため、山へのアプローチは短い。成田を飛び発ってから僅か1週間で、インド最長の氷河といわれるガンゴトリ氷河の舌端が現れるガウムクへと辿り着くことができた。

怪峰シブソンの裾野に展開する聖なる地・タポバンのB・C入りも、懸念したほど高度障害を訴える者も出ず、まずまずのB・C入りであった。

B・Cを建設してからB・Cを撤収するまで13日間。この短期間で登頂しようという効率の良い速攻登山のタクティックスの元に、登山活動は開始された。

結果的には、10月1日、2日の両日にわたってアタック隊を送り出したものの、フィナーレに於けるアタック・ルートの攻めにくさ（ドームと本峰間の高差150mのギャップなど）等が影響して、いずれも本峰へ到達することはできず、6,831mのケダルナート・ドームの頂きで甘んじなければならなかった。

ドームへ19名のメンバーが登頂したために、一部では大量登頂ということで恰も成功したかのような報道もあったが、当事者としては、事前研究のまずさに依る失敗であったことを、謙虚に受けとめねばならないだろう。

北は北海道から南は九州にわたる広域より老若男女が20名参画して目指したケダルナートは、将にヒンズーの神、「シバ神」の山という謂のとおり、重厚な山であった。この聖なる地の頂きで我がカメラード達は何を想いながら頂を踏み、何に想いを馳せたであろうか。次なる夢の大きな膨みを期待したいものである。

こうして1980年のガンゴトリの28日間は、ガンガの源流にカメラードとの楽しい思い出を残して終わった。

ここにささやかながら自分達の足跡を印した報告書を上梓することにしました。

ご批判戴ければ幸いです。

計画と準備



ガンゴトリの秀峰・ケダルナート（6,940 m）へ

1980 年 H A J ヒマラヤ登山学校計画

9. 13 ～ 10. 11 （29日間）

登山学校の趣旨

H A J は創立以来、ヒマラヤ諸国との友好親善・相互理解をモットーに、登山・学術・その他幅広い分野にわたって各種の文化活動を展開しております。1977 年から 1981 年の 5 年間にわたって実施する、「ヒマラヤ学校」もその一環であります。

ご承知のように、ヒマラヤは地球上で最も高い山岳地域であり、そこでの登山活動は高所という低酸素条件下で行われるため、複雑でしかも困難な要素を含んでおります。また、登山許可の取得や、通関を始めとする種々の手続き、渉外など登山以前に処理しなければならない多くの仕事があります。

しかし、ヒマラヤの素晴らしさにふれ、その国と人々を理解することは意義あることであり、1 人でも多くの人間にヒマラヤ登山を体験させようというのが H A J のめざすところでもあります。

この「ヒマラヤ登山学校」は、確かな技術と経験を有する指導者（インストラクター）の統括のもとに、安全かつ確実に第一義として必要とされる諸準備をすすめ、国内での学習を行い、ヒマラヤの高所を経験し、ヒマラヤ登山の基礎と実際を経験しようとするヒマラヤ登山のガイド・システムであります。そして、さらに大きなヒマラヤ計画を進めていける人を育てることも目的としております。

諸外国には、国家の援助のもとに活動しているこの種の学校がありますが、我が国では極めてユニークなものであります。

第 1 回は、1977 年秋ガルワール、タルコット峰（6,099 m）で日本山岳会に協賛して行い、第 2 回は 1978 年夏、カシミール、ヌン峰（7,135 m）、第 3 回は 1978 年秋、キャシードラル峰（6,400 m）と続いており、いずれも成果をあげてきて

おります。

実行・推進の体制

日本ヒマラヤ協会登山学校委員会

会 長 柴田金之助 委員長 山倉洋一
委 員 佐々木正 内田嘉弘 南 勲
尾形好雄

日本ヒマラヤ協会ヒマラヤ登山学校事務局

〒160 東京都新宿区高田馬場 3-23-1
淀橋食糧ビル 506 号
電（03）367-8521

登山隊の名称・構成

1. 名 称

1980 年日本ヒマラヤ協会インドヒマラヤ登山隊 H A J GANGOTRI HIMALAYA EXPEDITION 1980
（略称 HGE 80）

2. メンバー

隊 長	尾 形 好 雄（32. 東京）
副 隊 長	山 田 昇（30. 群馬）
インストラクター	角 田 不 二（27. 埼玉）
隊 員	遠 藤 喜重郎（33. 東京）
”	木 村 陽 子（25. 鳥取）
”	藤 岡 明 生（23. 神奈川）
”	宇佐美 博 康（30. 岐阜）
”	大 野 廣 美（37. 東京）
”	村 上 豊 子（23. 北海道）
”	高 瀬 敏 久（29. 東京）
”	斎 藤 光 明（23. 東京）
”	熊 谷 洋（24. 宮城）
”	野 畑 浩 之（27. 東京）
”	新 郷 信 廣（36. 佐賀）
”	北 出 昭 彦（22. 大阪）
”	関 久 雄（29. 神奈川）

隊 員	菊 池 春 枝 (29. 茨城)
"	山 形 正 己 (25. 栃木)
"	丸 誠一郎 (25. 東京)
"	飯 田 徳 治 (34. 東京)

登山計画概要

1. 目標の地域・山

インド・ヒマラヤ、ガンゴトリ氷河
ケダルナート (6,940 m)

2. 目 的

- (1) 6,000 m 峰の短期間の登頂。
- (2) ヒマラヤ登山実践の基本を習得する。
- (3) 高地住民の民俗学、環境学に関する学術調査。

3. 時 期

1980 年 9 月～10 月

4. 日 程

- 9 月 4 日 先発隊 2 名、日本出発。
- 9 月 13 日 本隊 日本出発、ニューデリー着。
- 9 月 14 日 デリー発→15 日 ウッタルカシ。
- 9 月 18 日 ガンゴトリ氷河、タポバン附近の BC へむかう。
- 9 月 20 日 BC 着) 登山期間約 14 日間。
- 10 月 4 日 BC 発
- 10 月 8 日 デリー帰着。
- 10 月 10 日 本隊ニューデリー発、日本帰着 10 月 11 日午後。

◎現地連絡先

c/o COX & KINGS (Agents) Ltd.
Post Box 134 Indra Palace, Connaught
Circus.
New, Delhi 110001
Tel : (New Delhi) 321428 Cable
COXSHIP

5. 総経費

1,300 万円

6. ケダルナート(Kedarnath 6,940m)について

ガルワールの中心地、ウッタルカシから車でバギラティ河に沿って北上すると 2 日のドライブでヒンズー教の聖地、ガンゴトリに着く。ここからさらに 1 日程さかのぼるとガンガ(ガンジス河)の源流であるガンゴトリ氷河の舌端が現れる。

このガンゴドリ氷河は、海拔 4,000 m 付近を

末端高度として、その幅 6～8 km、長さ約 25 km の長大な氷河を形成している。周辺には盟主チャウカンバやサトパントなどの 7,000 m 峰をはじめ、200 座近くの 6,000 m 峰が峻立し、まさにヒマラヤの末登峰の宝庫をなしている。

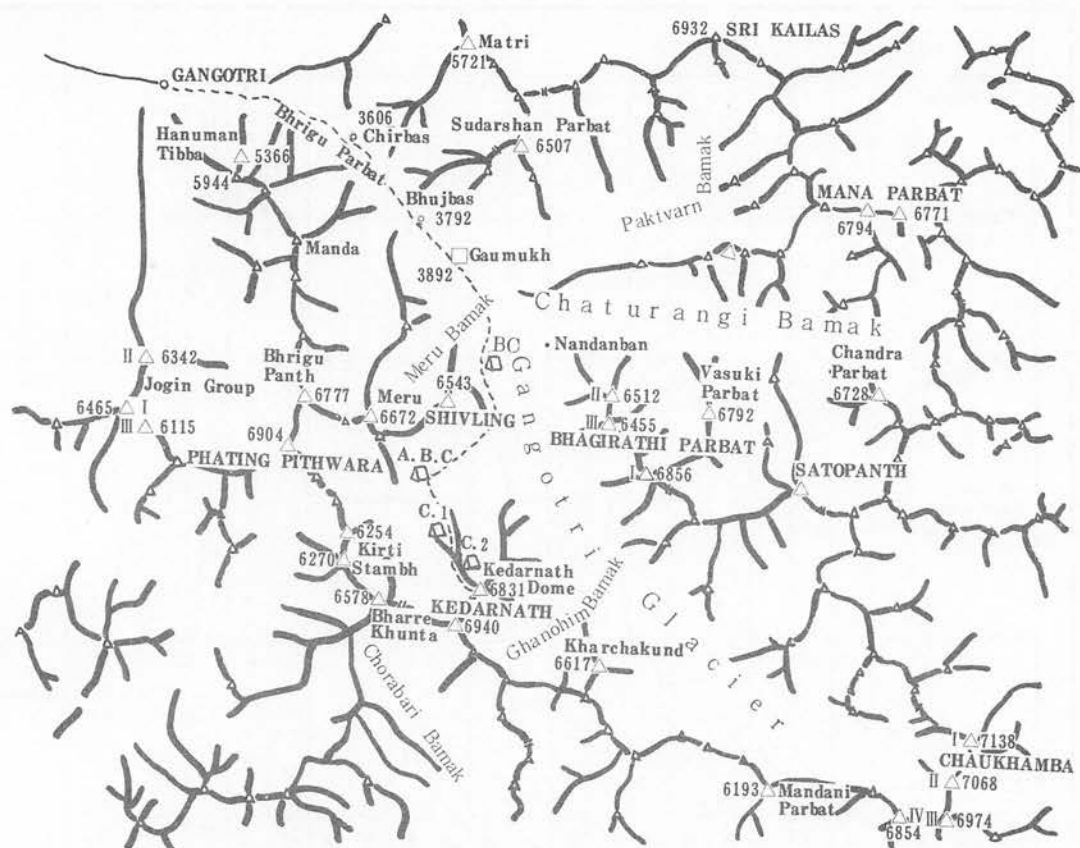
ケダルナートはガンゴトリ氷河(約 32 km)の入口の支氷河 Kirti Bamak に入った所にあり、古くから知られた名山である。ケダルナートには 2 つのピークがあり、ケダルナート本峰と北東にあるケダルナート・ドーム(Kedamat Dome 6,831 m)から成り立っている。

初登頂は 1947 年、スイス隊(アンドレ・ロック隊長)による。彼らは 6 月 25 日にケダルナート・ドームに初登頂、続いて本峰をねらったが、ナイフリッジを通過中に、隊員とシェルパの 2 名が滑落し負傷したために、登頂はあきらめて BC に戻った。体制を整え 7 月 10 日にドーム頂上を越えてロック隊長ら 3 名とシェルパのテンジン・ノルゲイがケダルナートに初登頂した。テンジンにとっては、カプルーに次いで 2 つ目の登頂となった。

その後、ガンゴドリ地域は第 2 次世界大戦のために、インド隊が独占することとなった。

- ・ 1967 年にはインド隊がドーム第 2 登。
 - ・ 同年、ITBP 隊がドーム第 3 登。
 - ・ 1974 年には ITBP 隊が北の氷河よりケダルナート第 2 登。
 - ・ 同年秋にカルカッタ女性教師隊が本峰第 3 登。
 - ・ 1975 年秋、Indian Ladies がドーム第 4 登。
 - ・ 1978 年 IAF がドーム第 5 登。
 - ・ 同年、ITBP 隊がドーム第 6 登と本峰第 4 登そして今年はずでに日本山岳会女性隊がドーム(5 月 31 日)にドーム第 7 登を成しとげた。
- 今回の登山学校では、北西稜からドーム経由でケダルナートをねらうもので、初登頂と同じコースを行くことになる。

ヒマラヤ経験の少ない隊員が多いが、前 2 回の登山学校の経験を踏まえ、ドーム頂上へは全員登頂、元気な者はケダルナート本峰へと計画しており、5 月の連休は富士山合宿、6 月 28 日は立川自衛隊の航空医学実験室にて 6,000 m までの低圧実験も経験し、全員ケダルナートに向かった。



基本戦略

1. 目 標

- (1) ケダルナート (6,940 m) に可能な限り多くのメンバーを登頂させる。
- (2) ケダルナート・ドーム (6,831 m) の全員登頂を目指す。
- (3) ガンゴトリ氷河周辺の踏査。

2. 登 山 行 動

- (1) 上記目標に対して登山期間を四期に分けて登山活動を行う。

第 1 期

- ◇ 先発隊によるBC建設と下部キャンプの選定及びルート工作。

A, BC建設と本隊受入れ準備。

この第1期は、ガンゴトリ氷河、タポバン付近 (4,320 m) にBCを建設。隊員の

高度順化 (4,300 m位までの) を行いながら隊荷の集荷および偵察活動を行う。

この第1期登山活動における隊員の高度順化問題が短期速攻形式に依るポーラ・メソッドを展開しようとする本登山計画の遂行上、重要なポイントと予想される。

第 2 期

- ◇ 6,300 m付近までの高度順化とアタック・キャンプ (C₂) の建設。

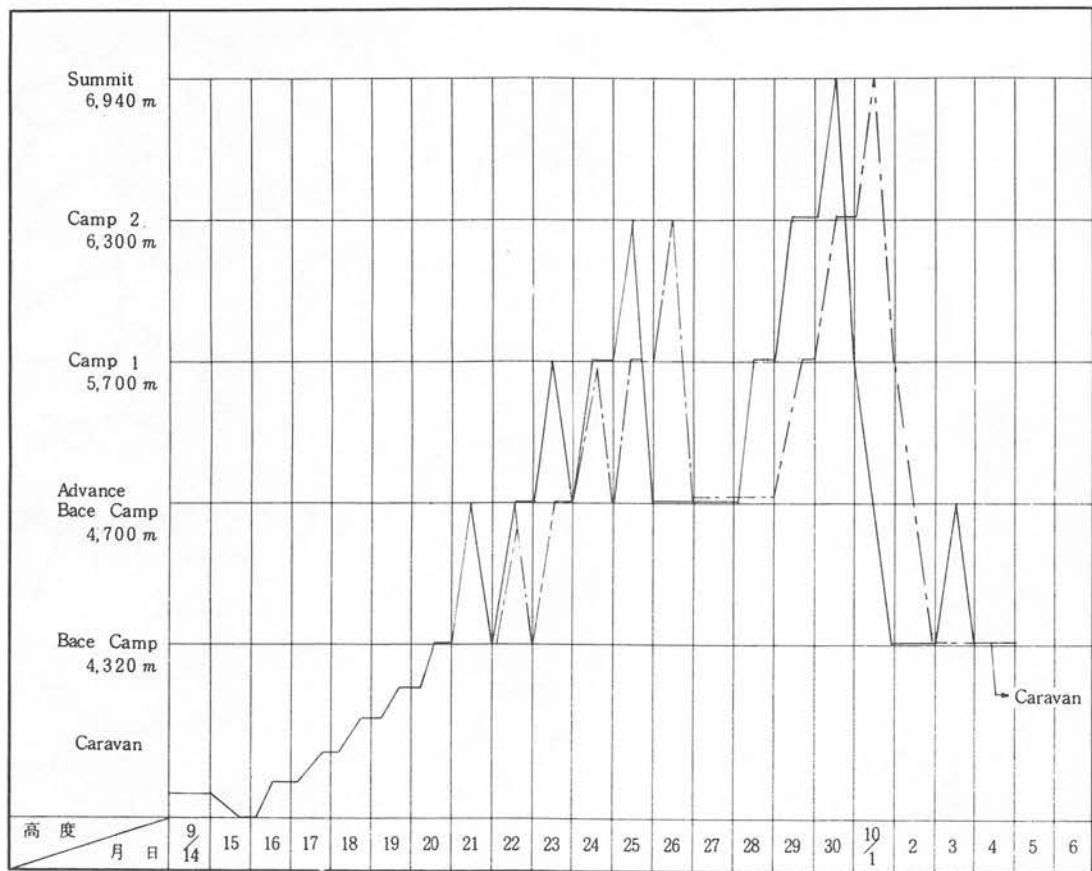
この第2期は、第1期の進行、偵察活動により順次ハイ・キャンプの建設を行い、頂上アタックの登頂態勢を整える。

第 3 期

- ◇ ケダルナートおよびケダルナート・ドームの登頂。

対象は、ケダルナート (6,940 m) と順化不調者に依るケダルナート・ドーム (6,831 m)。

< 隊員行動表 >



第 4 期

◇ 撤収，下山。往路をガンゴトリへ下る。

タクテックス

◇ ヒマラヤで比較的天候の安定する9月下旬から10月上旬までのポスト・モンスーン期に登山活動を行い，わずか13日間という短期間で登頂を果たす。そのためには，第1期，第2期における各隊員の高度順化が大きなファクターとなるであろう。(先発隊の任務はかなり重要になる。)

- (1) 隊を3パーティに分け，各パーティにパーティ・リーダーを置き登攀行動の核とする。各パーティをローテーション1単位とする。
- (2) 第3期のアタックに当たっては，第2期までの順化程度を観察して，パーティの再編成を行ってアタックを実施する。
- (3) 各パーティは，日差行動を原則とする。
- (4) 高所ポーター2名を積極的に使用することに依り，隊員の負荷を軽減し，初期順化のスムーズ化を計る。

3. ポーラ・メソッド

(1) 前進キャンプは，ケダルナート・ドームから派生する北西稜上にCamp 2まで予定している。

(2) 各キャンプの位置

Camp 名	高 度	位 置	Camp 高度差
B・C	4,320 m	ガンゴトリ氷河，タポバン付近	—
A B・C	4,700 m	Kirti Bamak Glacier 上	380 m
C・1	5,700 m	ケダルナート・ドーム北西稜上	1,000 m
C・2	6,300 m	ケダルナート・ドーム直下	600 m

計画、隊の構成、出発まで

尾形好雄

全長28kmにも及ぶといわれるインド最大の氷河、ガンゴトリ氷河が横たわるガンゴトリ・エリアは、ガールワール・ヒマラヤの中央部に位置し、これまで外国人による登山活動が許されないうまま長い間不遇を困っていた山域である。

ガンガ（ガンジス河）の源頭に位置するこの未踏峰の宝庫も、1979年には漸く外国人にオープンとなり、この秋、インド政府観光局、その他の招待に依り、当協会の稲田専務理事も招待客の1人としてこのトレッキングに参加し、新解禁となったこの聖なる地・ガンゴトリに入域した。氏らのトレッキングは、ヒンズー教の3大聖地の1つガンゴトリから、更にガンゴトリ氷河の舌端の現れるガウムクからタポバンへと足を踏み入れ、周辺峰をつぶさに観察され、貴重な資料を持ち帰られた。

この秋のオープンは新聞の連載や山岳雑誌の紹介に依って日本の登山界にガンゴトリ・ブームをつくり出し、禁断の聖なる地へのプロポーズが殺到することとなった。

HAJとしても早速、この新解禁エリアに登山隊を送るべく、取り敢えず1980年の登山学校の目標山としてケダルナートへのアプリケーションを提出した。

ケダルナートは、ヒンズー教の「シバ神の山」という意味を持ち、まさにその名にふさわしい堂々とした秀麗な山容で、ガンゴトリ氷河とキルティ氷河の合流点に聳える山である。山の標高、山容（ルート）、アプローチ……等々から検討して、登山学校に適した山であろうということで、ケダルナートが選ばれた。しかし実際はこの山を知れば知るほど、登山学校のように短期速攻登山を实践する山としては非常にやりづらい不向きな山であることが判明し、今後の登山学校の山の選定に反省を促した。

ケダルナートの許可取得はスピーディに進み、アプリケーションを出してもまもなく許可が交付された。

1979年の暮も押し迫った12月22日に、HAJ

登山学校委員会が開かれ、1979年登山学校（キャシー・ドラール隊）の山倉隊長より引き継ぎを行う。1980年登山学校の執行体制は内田嘉弘隊長、南勲副隊長それにHAJの特別事業となっていたカンチェンジュンガ・プロジェクトに参画していた小生、尾形がインストラクターとして加わることになってスタートした。

年が明けて、1980年の1月26日～27日に、（社）日本山岳協会の海外登山技術研究会（第18回）が八王子大学セミナー・ハウスで行われた機会を利用して、ケダルナートの基本計画について話し合いがもたれた。

2月に入ると、カンチェンジュンが偵察隊の出発準備も大詰を迎え、HAJチームは連日慌ただしい準備活動が行われるようになったが、そんな中でケダルナートの登山計画書も出来上り、全国に散らばる隊員に配布された。

カンチ偵察隊の本隊を成田に見送った翌日（3月2日）、京都の内田宅で基本タクティックスについてのミーティングが行われ、B・C以上13日間の登山活動日数という短期速攻戦術が討議された。

3月15日～16日の第1回目の隊員打合せは、折から来日されていたインド登山財団（IMF）幹事のジョギンダール・シン（中佐）氏を迎えてのインド・ヒマラヤ会議と併せて行われ、20名の隊員がこの日初めて顔を合わせた。この日の打合わせで出発迄のスケジュールが発表され、残された半年の準備活動は始まった。

5月2日から5日にかけてのゴールデン・ウィークに富士山での合宿を持った。5月2日の朝、三々五々、富士吉田駅前に集合した隊員は、スバルライン経由で5合目に至り、佐藤小舎へと向かったが、我々が佐藤小舎に着くや否や雪崩遭難事故の救助依頼があり、直ちに救助隊を編成して事故現場に向かった。内臓破裂の重傷者をスノー・ボードで搬出し、5合目から救急車で病院に運び、なんとか一命はとりとめた。初日から搬出活動という事で初山行とは思えぬ良いチーム・ワークで事に当たるのを見て、大世帯というチーム・ワークに対する一抹の不安は消し飛んだ。

翌日は、5合目の佐藤小舎から頂上までをピストンした。寒風に蒼氷と、まさに真冬並みのコンディションの中、慎重にケダルナート・ドー

ムに想いを寄せながら登高し、頂上に立った。北海道からはるばるやって来た村上、物井の両嬢は、本邦最高峰の登頂でえらく感激していたようであった。

翌4日は、山中湖湖畔の保養所でミーティングを行い、3日間にわたる合宿は散会した。

この5月合宿から帰ってまもなく、エントリー・ビザ取得のためのメンバー・リストやウォーキー・トーカーの使用許可申請、パッキングリスト等をコックス社（エージェント）を通してIMFへ送った。

今回の登山学校の隊員20名は、前述したように、北は北海道から南は九州・佐賀県に至る広域に散らばり、なかなか隊員が一同に会することは難しく、出発迄に顔を合わせる機会はほんの2〜3回であった。そこで、こうした事情に鑑み、出発迄に隊員同志少しでもお互いを知りあおうと“カンチ・ノート”をまねてケダルノート・ノート”なる雑記帳を作って北廻り、南廻りの2冊を回覧した。人数が多いため、回って来る迄日数はかかるが、それだけに回って来たときに読むボリュームも多く楽しみであった。もっとも北廻りの方はどこで途中下車してしまったのか、出発迄にとうとう目にする事ができなかった。

6月の中旬になって、悲しい知らせが飛び込んで来た。北海道の物井さんがトレーニング山行中に事故を起こしケガをして入院したというのである。出発前の不運なアクシデントに依り、結局、彼女は参加断念を余儀なくされ、伴に悲しい思いをした。

6月28日〜29日の第3回ミーティングでは、立川航空医学実験隊のお取り計らいに依り、低圧チャンバーで6,000 m迄の高度経験を踏むことができた。この低圧実験に参加した隊員達は、各々初めて垣間見る6,000 mの世界で現れる唇・爪のチャノーゼ、心拍数の増加、頭痛、思考力の低下などの諸症状に依って、高所登山に対する心構えを新たにしていたようであった。

7月に入ると各担当者は8月中旬の隊荷梱包に向けて集荷態勢に入り、担当ごとに準備の方は着々と進んでいった。

ところが出発1カ月前の8月に入っている間に問題が続出し、重大な局面を迎えることとなった。8月に入って直ぐ、僅か1週間の間に隊

長、副隊長、ドクターの3名が急に参加できなくなったのである。出発を1カ月後に控えての事態で途方に暮れてしまった。

時間が無いだけに一刻の猶予も許されず、結局尾形が隊長となって、インストラクターにカンチ偵察隊から戻ったばかりの山田、角田の両氏を補充することでこの局面を乗り越えることに決った。

しかし、ドクターの方は八方手を尽してみたが、なにせ時間が無さ過ぎ、見つけることはできなかった。そこで不本意ながらドクター・レスで出発せざるを得なくなってしまった。一応、何かの場合には同じ時期にメルーに入る飛騨山岳会隊の山元ドクターにお世話して頂くという厚かましいお願いを致しての見切り発車であった。隊長、副隊長が旧知であったこともあってこの厚かましいお願いも心よくお引き受け頂いたものの、当隊の陣容に就いては大いに反省させられた。

こうしたゴタゴタの中で8月16日〜17日の両日、隊荷の梱包が行われ、26日にはカートン24個、総重量432 kgの隊荷が日通航空に引き渡された。

隊荷も送り出し、あとはいよいよ出発という段階で最後の難題がまたまた持ち上がったのである。我々のエントリー・ビザ発給について、インド大使館よりクレームがついたのである。インド大使館のバルマ担当官の言い分は、ドクターが行かない登山隊というのはおかしいというのである。これもまたおかしな話だが、担当官が「発給できない」というのだから困ってしまった。やむなく大阪の好井ドクターからパスポートを取り寄せ、エージェントでわざわざ航空券を切って貰い、それらを提示して一緒に行くことを証明して、なんとかビザを発給して貰うことができた。この一件以来インド・アレルギーとなり、インド大使館には近付き難くなったほどの冷汗もので、今思い返してもゾーッとする。

こうして最後の最後迄、いろんな問題が沸き起こり、前途多難な事が思われたが、どうにかこうにか出発の運びへとこぎ着けることができ、9月4日、先発隊として尾形、北出の2名が成田を出発してデリーへと向かった。

ケダルナートの

仲間たち紹介

＜紹介すること＞……

住 所

所属山岳団体

HGE80での担当職務



◇ 隊 長

尾 形 好 雄

OGATA YOSHIO

1948. 7 生

- ① 東京都中野区
- ② 雪と岩の会
- ③ 会計・タクティクス・渉外

＜プロフィール＞

隊の人員も集まり、春の合宿が終わって具体的な準備段階に移る頃、隊長、副隊長が急に参加できなくなり、替って隊長となり、その準備の指導を一手に引受けられ、またこれをこなしながら、次の年のカンチェンジュンガ遠征のための準備も同時に進めた、その体力と精力は、さすがにサイボーグと異名されるだけあると感服し、また、現地においての外交の際、言葉よりも、その大きな体と大きな声で圧倒する迫力はまことに心強い。

そのような隊長は、女性隊員の憧れの的であり、また、女性に対するときはとてもやさしい。

本隊がボジュバスに入った時、先発隊に入りB、C設営、ルート調査をしていた隊長が倒れるとの報が入り、一同まさかと驚いたがその日のうちに合流し、すぐに快復する。その後は的難な判断で19名をケダルナートドームに登頂させ全員無事に下山させた。

気はやさしく力持ちの通りで、まことに心強い隊長であった。



◇副隊長

山田 昇
YAMADA NOBORU
1950. 2 生

- ① 群馬県沼田市
- ② 沼田山岳会
- ③ タクティクス

<プロフィール>

75年のラトック以降ヒマラヤに狂いだし、6年間に1度もまともな就職をせずに過ごしてしまったという。今はカンチェンジュンガに行っているが、その後も三つ計画があって狂いっぱなしに狂っている。途方もない遊び人だが、情熱は誰にもひけをとらない。陽気な性格で、山の話でも女の話でも常に大声でしゃべっているが、ひとたび話がゼニのこととなると途端に落ち込んでしまう。が、「どうして今日まで生きてこれたのかなあ」などと言っており、適当なものである。酒は好きだが、ちょっと飲むとすぐに酔ってしまい、真赤な顔をして高斟をかいて寝てしまう。今回は鬼の副隊長として常に先頭に立ち、隊の牽引力となるとともに、ドーム頂上で冷静な判断のもとに本峰断念を決定した。



◇インストラクター

角田 不二
TSUNODA FUJI
1952. 9 生

- ① 埼玉県浦和市
- ② 明大駿台山岳部OB会
- ③ 渉外

<プロフィール>

一見クリスタル人間、実は仲々の情熱家。本隊のインストラクターとして活躍。顔に以合わず(?), ヘソ下のお話はメシより大好き、月刊「ヒマラヤ」が将来ビニ本になるのでは、というまわりの期待をよそに、編集長はカンチ縦走へ出発。ディスカッションではなかなか負けない。コックスのグブタも舌をまいてた。



◇隊員

飯田 徳治

IIDA TOKUJI

1945. 9生

- ① 東京都豊島区
- ② 新宿勤労者山岳会
- ③ 装備

<プロフィール>

職場を退職しての参加。空手の有段者であり、いかつい風貌の中に常に優しさをかねそなえているファイトマンである。しかし高山病で登頂できなかったのは非常に残念であった。聞くとところによると、今回の遠征費は新婚旅行用の費用として奥様と貯えたもので山わけして別々に使うことに話がついたとか、無理やりつけたとか。



◇隊員

宇佐美 博 康

USAMI HIROYASU

1950. 1生

- ① 愛知県大垣市
- ② 大垣山岳協会
- ③ 装備

<プロフィール>

装備の担当として、特に気付きにくい小物等をこまめに指導し、誰もが忘れ物をしないようにと心くばりをしていた。また、リエゾンの支給品等も気を配って、綿密さが表われている。

帰路のキャラバン中、なぜか魔法使いとあだ名された。前にいると思えば、急に後から出てきたり、また、へんてこな帽子をかぶりごみ拾いをしているさまに、ほうきを持たせればやはり魔法使いを思わせる。

ニューデリーで解散後、単独でパキスタンに入り悠然と旅された。



◇隊員

遠藤 喜重郎

ENDO KIJURO

1946. 5生

① 東京都町田市

② 東京白稜会

③ 記録・梱包

<プロフィール>

職業カメラマンのはしくれを自称するだけあって、入山中カメラを持たない姿を見たことがない。ときどきフラフラとどこかへ消えてしまい、バスの発車時刻に遅れる常連。が「いやあ、すみませんねえ」などと言ってニコニコしており、笑顔が憎めない。6人兄妹の末っ子で、ちょっと甘い、天性の楽道家。どういうわけかいつも金まわりがよく、ニューデリーでゴッソリ宝石を買いこむ。で、帰国するなり「100万ぐらいならいつでも出せるんだけどさあ、どこか行くところないかなあ」……と、この一言でスカンピンどもをすっかり落ち込ませてしまうが、本人はどこ吹く風。「8,000メートルへ行きたい」と夢は大きい……?!



◇隊員

大野 廣美

ŌNO HIROMI

1942. 6生

① 東京都東村山市

② 東京スキー山岳会

③ 学術・報告書編集長

<プロフィール>

“今できる事をやりたくて”とヒマラヤ登山を目差し、2人の可愛い子供と愛妻を日本に残して参加した。ベース・キャンプで体調を崩しながらも年長者としてのねばりを見せ、登頂の夢を果たす。期間中、女性隊員から「大野のお父さん」と呼ばれ、隊のお父さん役を務める。本報告書の編集に積極的に当たった。(これからも年齢に関係なく頑張りたい。)



◇隊員

菊池 春枝

KIKUCHI HARUE

1949. 11 生

- ① 茨城県水戸市
- ② 茨城県庁山岳部
- ③ 食糧

<プロフィール>

職業柄大変な世話女房型。人の気付かないところによく気を配ってくれる。行動食の吉原殿中とABCで食べた水戸名産醬油餅の美味、皆、また食べたがっていると思う。「アタシインナイ!」なんて言わない。

※ ともかく、準備段階でのその熱心さに関しては皆頭が下がる。夜勤仕事を終え、水戸から常盤線に乗り、車中にて食糧計画の構想をねる。弦巻小学校を借りての食糧スタッフの会議に出席するためにハードな生活が続いていた。夜11時の水戸行最終行に乗り遅れることしばしば、そのたびに上野のマイアミで1人で夜を明かしてたとか……。そんな彼女のひた向きな姿に感動する人も多い。出発の日には地元の県人会の人達が横断幕をもつての激励。彼女のその人徳に隊員の皆も再認識させられた。



◇隊員

北出 昭彦

KITADE AKIHIKO

1958. 2 生

- ① 大阪府大阪市
- ③ 勝山山岳会
- ④ タクティクス

<プロフィール>

典型的な大阪人気質である。隊の中では最も年少で現役の学生である。先発隊として隊務に専念し、前半の疲労がたたりもう一步調子がでなかったようである。まだまだ前途洋々、これからである。ユーモアのある関西弁で今後山にも一笑を!／＼



◇ 隊 員

木 村 陽 子

KIMURA YŌKO

1954. 9 生

① 鳥取県八頭郡

② フリー

③ 食糧

<プロフィール>

アメリカン・イングリッシュ訛のあの声で「ネェン、ザック持ってェ……」なんて言われると、こっちも「オー、貸せよ」なんてつい答えてしまう。本隊のインタープリターとして活躍、登攀中も男性顔負けの馬力を発揮。高度障害知らずのスーパーレディ。愛称「ヒメ」

※ その語学力は、本隊一であった。コックスのキッチンボーイも彼女の言うことは、“All right.” “OK, Baby”何でもきく。下山後もインドに残り、見聞を広めてきた。帰国後もマスコミの攻勢がすさまじかったようだ。「山溪」に名前が出たり、NHKラジオの談話室に出演したり多忙な日々が続いた。最近東京にまた復帰、“春”を探しながら今日も表参道のオフィスで忙しく働いている。



◇ 隊 員

熊 谷 洋

KUMAGAI HIROSHI

1955. 3 生

①宮城県仙台市

③ DACOB会

④ 梱包

<プロフィール>

飄ひょうとしていて、ヒマラヤに何しに來たのか隊員に疑問をもたれていた。3,000 mまでは元気が良く、ガンジス河の源流で釣をしたり、ポーターからハシシをうばい吸ったりしていた。しかしその後体調を崩したが持前の生命力とスルメの力をかり、登頂を果たした。食べ物にはめっぽう執着心が強く、いつも2, 3人分の行動食を持ち歩いていた。仙台のスルメと呼ばれ、噛めばかむほど味のでる男である。



◇ 隊 員

斉 藤 光 明

SAITO MITSUAKI

1956. 6 生

- ① 東京都国分寺市
- ② 八王子山の会
- ③ 食糧・登山史

<プロフィール>

岩登りの腕前はさすが。キャラバン中適当な岩を見つけては、ボルダーリングに励んでいた。ベース・キャンプではランニングをする元気を見せていたのですが、風邪をひき、体調を崩し心配された。しかしアタックの時は、持ち前の若さとファイトで第2次隊の最前線に立ち、今までの遅れを取り返そうとラッセルに頑張り登頂する。ハーモニカを高度4,400mで吹いた歌の好きな陽気な若者。今後の成長がとても楽しみ。



◇ 隊 員

新 郷 信 廣

SHINGO NOBUHIRO

1943. 3 生

- ① 佐賀県佐賀市
- ② 佐賀R. C. C.
- ③ 食糧

<プロフィール>

年長者として常に最前線に立ち、荷上げルート開拓に頑張る。アタックの時は、かぜをひき、熱を出しながらも第1次隊として登頂する。山頂まで重い8ミリのビデオ機械を持ち上げたファイトはさすが九州男児。その後の映画の編集はプロも顔負けの腕前でした。3月の集会、5月の富士山合宿の時からいつも話題の中心人物。得意な九州弁で隊員の中にいつも笑いをもたらすとても優しい素敵な「お父さん」。



◇ 隊 員

関 久 雄

SEKI HISAO

1951. 2 生

- ① 神奈川県横浜市
- ② のらくら山の会
- ③ 食糧

<プロフィール>

母校の遠征終了後、先発隊として現地で参加し、活躍する。いつも隊の最前線に立ち、ルート開拓などに積極的に努めた。登頂後、ドーム頂上からC₁までスキーで滑り下りた勇氣、度胸はさすが東北男。リエゾンを始め、土地のスタッフと英語＋身振り、手振りで交流し、すっかり人気者となる。インドの各地をまわり、向こうの生活様式に慣れたためか、帰国後、しばらく労働意欲を失い社会復帰に時間がかかった。



◇ 隊 員

高 瀬 敏 久

TAKASE TOSHIHISA

1950. 8 生

- ① 東京都杉並区
- ② 東京岳友クラブ
- ③ 装備・梱包・輸送

<プロフィール>

装備、梱包、輸送、タクティクス等々、隊長と共に、精力的に準備に当たった。その準備段階では中心的役割を果たし、隊員の中にあっては最も多忙な1人であった。

登山行動においては、先発アタックメンバーに入り、ルート工作から荷上げと働き、C₂よりのアタックの日、調子を崩したが、次の日の後発アタックに加わり、ケダルナートドームに登頂した。静かな面持ちだが、その内に秘めたる情熱は、人一倍であり、ニューデリーで解散後、同じ隊員の仲間とネパールに入りチュルーを無事に登って来た。



◇隊 員

野 畑 浩 之

NOBATA HIROYUKI

1952. 7 生

- ① 東京都世田谷区
- ② フリー
- ③ 食糧

＜プロフィール＞

ノバタヒロユキ・28歳・小学校の警備員をしながら登山を楽しんでいる。体格のよい男である。今回の海外登山のほかにも、ペルー・アンデス・ワスカランという登山歴をもっている。また岩登りも大変好きらしい。食糧計画にも日和田山のゲレンデで怪我をしたといって、よく片足をかばっていた。食糧計画のミーティングには、よく野畑さんの勤めている小学校を使わせてもらいました。ガンゴトリに入ってから高度順化もマイペースで行い、黙々と歩いていた。しかし、今回の隊の中ではひとときわヘビー・スモーカーで、ABCでも煙草を喫い、苦しいと言いながらも登頂に成功した1人である。



◇隊 員

藤 岡 明 生

FUJIOKA AKIO

1956. 3. 生

- ① 神奈川県川崎市
- ② フリー
- ③ 記録・梱包・輸送

＜プロフィール＞

甘いマスクに、あのベースのきいた声で囁かれるとサリー・ギャルもコロッといきそう。欲を言えば、もう少し額が狭ければ……。本隊行動中、常に先発メンバーに加わり、「男は黙って…」、黙々と隊を引っぱっていった。そんな彼にもドラマがある。1次アタックに失敗した彼が、2度目のアタックでドームを踏んだ時見せた男の涙、皆も忘れないと思う。



◇隊員

丸 誠一郎
MARU SEIICHIRO
1954. 10 生

- ① 東京都杉並区
- ② 登高会（慶応義塾体育会山岳部OB会）
- ③ 食糧

<プロフィール>

慶応といえば京大と並ぶ東の名門。が今は見るべき記録もなく、凋落の一途。「何としてもこの辺で慶応の遠征をきめなければ！」と、熱い志を胸にHAJの門を叩いた。「ヒマラヤは高所順応が第一」とばかりに、遠征前に斉藤隊員と2人で富士山に5回も足を運んだという。パイロンガティアーを過ぎてヒマラヤが見え出すと、もう大ハッキリ。タポバンの草原では、斉藤、村上らとともに、マラソン競争などやり出す始末。が、無理がたたってかBC入りと同時にダウン。以後かなり高度障害に苦しんだが、名門の旗を背負った執念で挽回し、頂上を踏んだ。食糧担当だったが、準備段階から遠征中を通して最もよく隊務に励んだ。次の計画が持たれる男である。



◇隊員

村 上 豊 子
MURAKAMI TOYOKO
1956. 3 生

- ① 北海道旭川市
- ② 旭川志岳会
- ③ 医療

<プロフィール>

164cmと女性としては長身で、スラリとした身体つき。歩くと減法早く、たいがいの男性隊員は置いてかれてしまう。「ドームではなく、絶対に本峰に立つのだ」とはりきっていただけに、本峰断念と決定した時は誰よりも悔しがった。旭川赤十字病院の看護婦で、医者はいない隊にあって医療担当として活躍した。職業柄言葉使いが荒っぽく、底抜けに陽気な性格とも相俟って常に笑い声の中心にいたが、胸がペチャンコ(?)で、女の子らしからぬ言動のため、遠征中誰からも女性扱いされなかった。が、帰国後の報告会ではケーキを作ってきたり、インストラクターに毛糸の帽子を編んできたりして乙女らしいところを見せていた。本人の名誉のために、これが本当の姿であることを付け加えておかねばなるまい。早くも81年にブリグパント（6,777m）に2度目の遠征を行う。



◇隊員

山形正己

YAMAGATA MASAMI

1954. 3 生

① 栃木県河内郡

③ 宇都宮白峰会

④ 装備

<プロフィール>

渋い顔が、髭を伸ばすと逆に愛嬌たっぷりになる。装備担当として活躍。グリーンのスカーフを頭に巻き、常に笑顔のナイスガイ。途中、体調を崩し、少々心配されたが、アタック時、最前線でラッセルで頑張り、見事登頂。無口ながら自然と優しさを感じられる不思議な人。



◇リエゾン・オフィサー

ラジブ・ラジ

RAJIV RAJI

(27才)

- ① H 4/205, P - G - P - HOSTEL
INDIAN INSTITUTE OF MANAGEMENT,
JOKA, D. H. RORD, CALCUTTA - 70027,
INDIA.

<プロフィール>

パटना出身で民間会計士のリエゾン・オフィサー。小柄ながらハンサム・マンで笑顔が素適な好人物。我らがB・Cには、この他にもパイポーターのラジとエージェントのラジが居て、名前を呼ぶのに混乱した。

登山の方は、ネルー登山学校のベーシック・コースとダージリン登山学校のアドバンス・コースを終了している登山家。

遠征期間中は良く登山隊の面倒をみてくれたが、隣のメル隊の悪玉リエゾン・オフィサーにそそのかされて2人で勝手にケダルナート・ドームへアタックしようとして隊長のお目玉を喰う一幕もあった。

◇高所ポーター

カルプ・シェルパ

KARPU SHERPA

(ネパリー, ダブレゴン出身, 30歳)

タアシラム

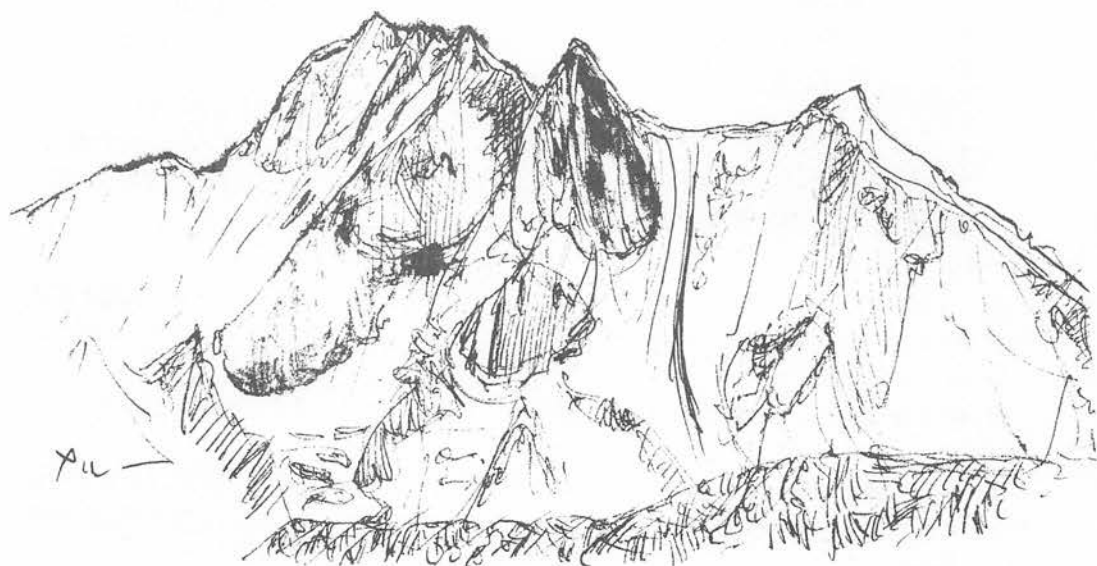
THASHI RUM

(ネパリー, ジュムラ出身, 35歳)

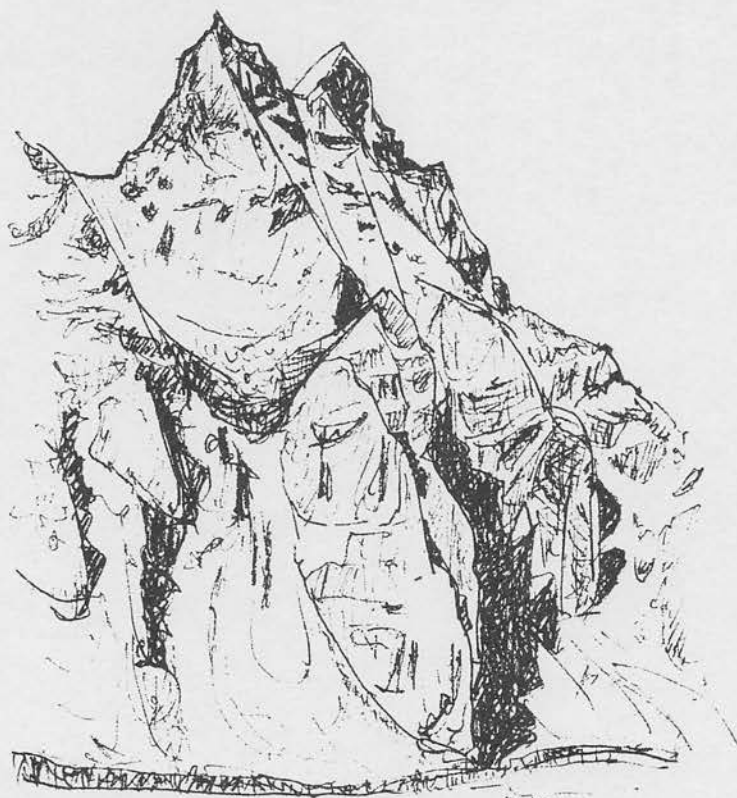
ラジュ

RAJU

(ガルワリー, バルサーリ出身, 23歳)

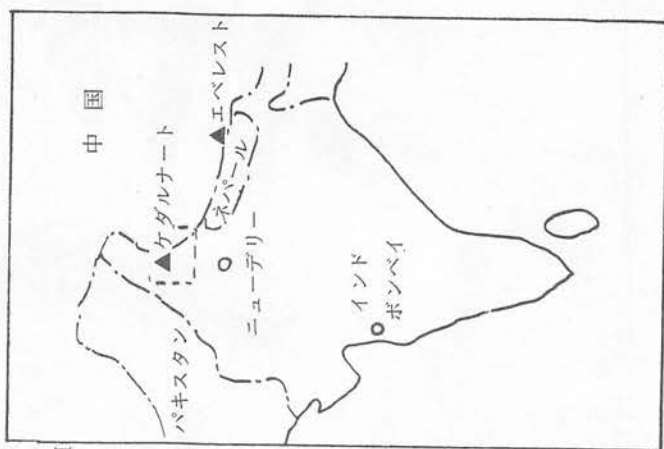
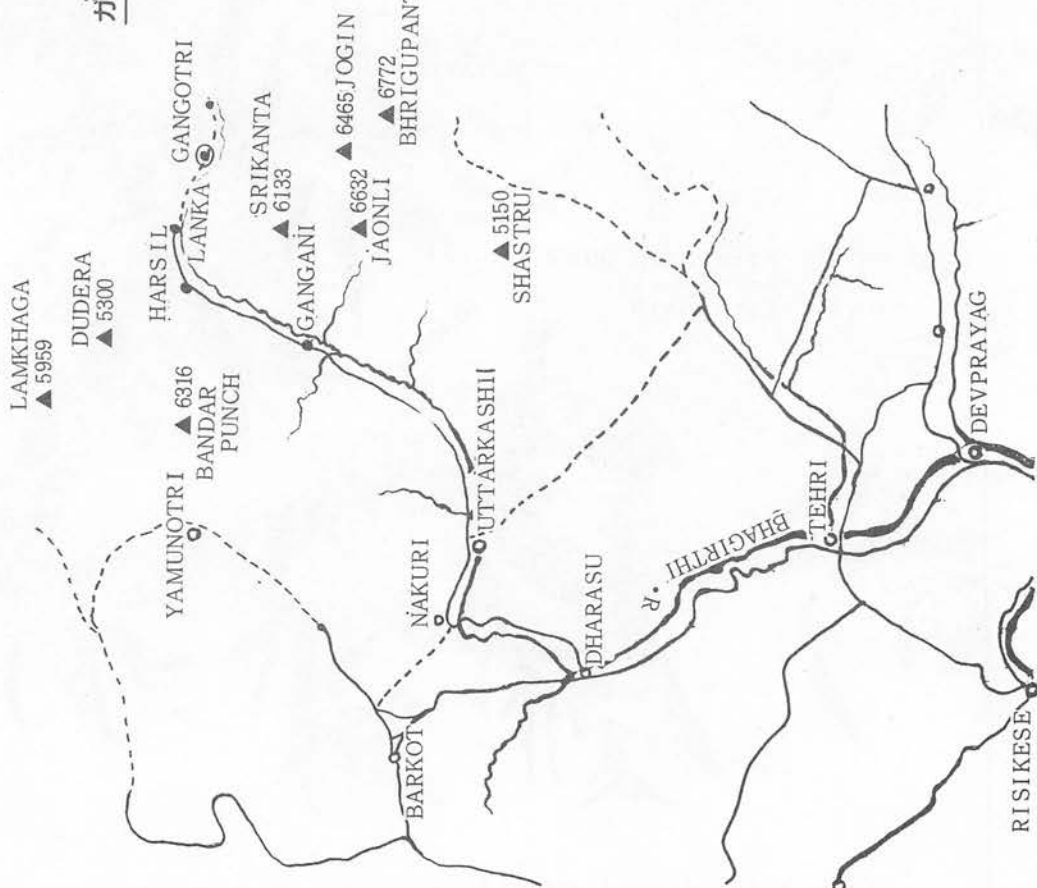


行動の記録



Shiwuling 南面. 0124

ガンゴトリへのアプローチ



登頂の記

菊池 春枝

眠れぬまま登頂の朝がきた。相変わらず食欲はまるでない。無理にとも思うがちょっとの間しか胃に停まってくれないことを思うと無駄な気もする。水分だけは摂った。

オーバーシューズがダブル靴の上になかなかはけず準備にもたつく。昨日はちゃんとほけたのに鈍い頭で思いながら。

出発してすぐ、あまりに寒いのでオーバー手袋を出す。シルクの日出帽を毛糸の帽子の下につけて防護する。そうこうしているうちに取り残されてしまう。じっとしていると寒くてふるえてくる。皆のペースになんとか追いつく。黙々と歩を進めている。咳がしきりと出、飴を頬張りごまかすもすぐ始まる。その都度、呼吸が乱れ足元がおぼつかない。歩を休めると寒さがおしよせる。こんなに登ってきてしまっただけで降りられるかしらとボンヤリ考えたりした。早くお日様のあたる所へ出たいと思う。

からっぽの胃と咳に苦しみながらひたすら上を目指した。足先がとても痛い。

ドームに立った時、もう先へは進まなくていいのだという安堵感と虚脱感が一気にやってきた。日の丸とインドの国旗を手に写真を撮ってもらう。周囲の景色はあまり覚えていない。

登頂に総てのエネルギーを出し切ってしまった私は、下降がいかに苦しいかを味わった。B・Cまでの2日間は長い長い道程であった。

C・2への下降中スリップした。すぐピッケルで止めたもののいかに気がゆるんでいるかを知らされた。C・2で荷をまとめC・1へ向かうも、疲労のため雪に足をとられ何度も転んだ。歩いているよりも雪の上に腰を下ろしていることの方が多かった。時折り小雪が舞った。やっとC・1へ辿りつく。ザックに腰下ろしたまましばらく動けないでいた。思考と動作が伴わず、寒くなってきてやっとテントに入る気になった。不食不眠の一夜を明かす。



天気は良かった。今日は大丈夫だろうと歩き出すが相変わらず歩みが遅い。隊長や仲間に申し訳ないと思うも足が言うことを聞いてくれない。

A・B・C近くの岩場、私はここがとても嫌だった。1週間前荷上げでC・1に向かうとき、バランスを崩してもろに両膝を岩にぶっつけた。このことが終始脳裏を離れず、後々まで尾を引いていた。

A・B・Cに着いたのも束の間、B・Cへの途方もなく長い道が待っていた。食欲はまるでないのに水だけは無償に欲しかった。途中、岩場にへばりついている氷をはがしては渴きをいやした。日は暮れ、心もとないランプの明りを頼りに、叱咤激励されても私には別世界を歩いているようだった。途中仲間が心配して出迎えてくれる。がんばらねばと思うが遠い。もう無理かなと思った。永遠に続くかと思われる闇の中にひとときわ明るい輝きが不思議な温かさを放って浮かんでいた。夢かな？いやちがう。段々近付いてくる。B・Cへ還れたのだ。登山期間中私にとって1番苦しく長い1日だった。

ボジュバサでの2日間、不調を取り返し、遅ればせながらも皆の後を追った。高度が増すにつれ順化が充分でないことを知りつつもドーム目ざした。幸運にもドームに立てたが、疲労の極に達していた。荷上げも充分にできずいつも遅れをとっていた。反省すべきことばかりである。

登頂の喜びが実感となったのは日本に還ってからだった。

お世話になった隊長、副隊長、インストラクター、そして仲間の方々、いつもファイトに充ちていた豊ちゃん、マイペースであれよあれよと思うまに登ってしまった陽子ちゃん、この機会をおかりして御礼を言わせていただきます。本当にありがとうございました。

(昭和56年2月22日記)

先発隊の記録

関 久 雄

はじめに

現地参加の僕は、ケダルナートの前に、神奈川大学のカシミール登山の後、しばらくラージャスターン地方へ旅行し、8月31日デリーに戻ってきた。

9月2日、ヨークホテルに泊っているところへ、群馬女子バギラッティ隊の浅野さんが、尾形さんの手紙を持って訪ねて来られた。手紙を読んで驚いた。隊長、副隊長、それにドクターの不参加と、それに伴うスタッフの変更。9月5日到着の尾形氏と北出君、それに僕の3名で山ほどある先発隊の仕事を済ませ、9月9日には出発し、B・Cを設け、A・B・C、を決め可能な限り荷上げを行わなくてはならないとある。「できるだけ仕事を先行してください。」と書かれた手紙を読み終え、これは大変なことになったと思った。だが、僕の後輩である神奈川大学の渡辺が帰国まで数日いるので、これ幸いと手伝ってもらうことにした。

〔9月3日〕Cox社へ

朝食後、早速Cox社へ行く。Cox社はコンノートのスカラ座という映画館の横を入った所にある。担当のグプタという男に会い、デポ装備の引き出しについて聞くと、倉庫番がいないので今日は出せないという。彼は最初、僕をH・A・Jの先発とは思わず、ヒッピー風の旅行客かと思ったらしい。仕方ないので明日来ることにし、現地購入品の調査に行く。場所は同じコンノートにある、スーパーバザールとジャンカーマケットに行った。ここは日本で言えばデパートか総合ショッピングセンターと言ったところか。品物は定価販売で値引きはしないが確かな物を売っているという。ほぼ必要な物は手に入りそうだった。

〔9月4日〕デポ装備引き出し

朝10時にCox社に行く。インドの会社はたいいてい9時半始まりで、昼は1時から2時のようである。倉庫番はまだ来ていない。

先客がいて、グプタからドームに登るオランダ隊だと紹介される。ケダルナート本峰の日本隊だと自己紹介すると、「ああ、23名のチームですね」と言う。あなたがリーダーかと聞くと「私達は5名全員がリーダーで隊員です。」と面白いことをいう。やがてグプタが来て装備引き出しは午後にしてくれと言うので、彼と「タボバンで会いましょう。」と握手をしてCox社を出た。

午後2時、タクシーでデポ置場に向かう。倉庫は長距離バス発着場のカシミリーゲート近くにあった。尾形氏から送られたリストをもとに、点検と引き出しを始めた。倉庫は暑く、ホコリと汗で真黒になってしまった。プラスチックカートンがネズミに少々かじられたほかは問題なし。午後4時タクシーに装備を積みホテルに戻った。

夜中に、空港へ尾形・北出氏を迎えに行く。グプタと群馬の浅野さんが同行した。機は予定通りに到着。大分待たされて久しぶりに再会。「ずい分やせましたね。」「インドに2カ月もいるとそうなりますか」と北出君が心配している。あれやこれやの話をしながらホテルに向かい、これからの予定を話して部屋に帰ったらもう朝の4時だった。

〔9月5日〕IMF訪問

朝8時半に起こされ、ホテルの前のチャイハナに朝食に行く。どうも眠い。

9時半にCox社に行き、これからの予定について打合せを行い、次にIMFに行った。

IMFの新事務所はまだ建設中で、丁度事務局のムンシ・ラム氏が外で何やら作業の指示をしていた。「ナマステ!」と、挨拶を交わり、内部を案内してもらった。なかなかモダンな建物で、前の「倉庫のような」と評された事務所とはえらい違いである。遠征の打合せに入り、9日の出発に間に合うようリエゾンオフィサーの紹介をよろしく頼んだ。リエゾンは8日にパトナから来るという事である。IMFを出てコンノートに戻り、昼食後Cox社でアレンジ料金について交渉を始めたが、苦手の英語ではやた

ら「ノー、ノー！」を連発するばかりで思うように進展しなかった。

夕方、飛驒メルー隊の瀬木、岩島氏が訪ねて来られ一諸に食事をする。夜、雨。

〔9月6日〕

8時半きっかりに「おはようございます」と尾形・北出氏が僕の部屋をノックする。「今日も忙しいけれど、完璧にいきましょう」と尾形氏が言う。彼の口グセは「完璧！」で、僕は彼を「ミスターカンベキ」と呼ぶことにした。今日の作業は尾形氏は通関、僕と北出君は両替とデポ品の残りの引き出し、IMFへの再訪と別行動となる。渡辺には群馬隊と合同で、Cox社のラニプリの手伝いで食料の買い出しをやってもらうことにした。

再びカシミリーゲートの倉庫にタクシーを走らせ、デポ品を一切車に積み込んだ。

ホテルに戻る途中、僕は別れてIMFへ行き、1981年登山学校の登山料金を支払ったり、残務を済ませた。リエゾンの事については8日にこちらに来るということだけで要領を得ない。ヨークホテルに戻ると、通関を済ませた隊荷を積んだトラックが到着していて、早速部屋に運び始めた。ところが、通関時にトラブルがあったようで、同行したCox社の男が100ルビー払えとか、ラジオカセットをくれとかうるさかったようで、尾形氏はカンカンである。その男、顔に傷のあるひとくせありそうな男は、僕にも同じことを言ってきた。「グブタに言え！」と文句を言ったが、Cox社もとんでもない人間を使っているものと頭にきてしまった。

〔9月7日〕再 梱 包

今日は日曜だが、休む暇なく再梱包である。とてもインドにはふさわしくないなと思いがちだが、リスト作成、先発用食料梱包と、追いつかれる。午後、雨で一休み。雨が止むと尾形さんは短パンツに縄とびを持ってトレーニングに出ていった。僕と北出君は顔を見合わせてただ感心するばかり。さすが「サイボーグ」の異名を取る人である。

夜の8時半、再梱包終了。よくやりました。

〔9月8日〕

今日は挨拶回りと不足品の購入を終わらせなくてはならない。朝一番に、エアーインディアの事務所にJ・シン氏を訪ねた。心よく迎えてくれた氏と挨拶を交わし、問題となっていたリエゾンの同行の件について相談した。そこで先発はHAJ隊のリエゾンが同行し、本隊は群馬隊のリエゾンが2隊に同行することでIMFへ電話して承認をとってもらった。お礼を述べて事務所を後にした。尾形氏はこれから日本大使館におもむき、北出君は装備の買いたし、僕は酸素器具の購入に行った。午後、酸素のレンタルを済ませて帰るとリエゾンが来ていて紹介される。彼の名はラージブ・ラージ。年令は25歳位でパटना出身の民間人である。登山経験はネルー登山学校の基礎をやっただけだという。尾形氏が「もし、上に登るならクランボンやアイスアックスもあるが…」と言ったら、上には行かないと言ったそう、尾形氏は喜んでた。リエゾンと入れ替わりに北出君が、「ありましたよ」と両手にポリタンクをぶらさげて帰ってきたので、石油を買いに行くが、検査日とかで買えず明朝来ることにした。また、砂糖も手に入らず、ウツタルカシで購入することにした。ともかく、出発にこぎつけたので、その夜はビールで乾杯した。

〔9月9日〕ウツタルカシへ

朝、5時半に起床。荷物をバスに積み込み、いよいよ出発である。我々3名とL・O、グブタ、それに群馬隊の浅野さんと船水さんが同乗している。途中でケロシンを購入し、バスはヤムナ川にかかる鉄橋を渡ると、一路ウツタルカシ目指して走った。ウツタルカシまで通常2日



だが、先発隊は約半分の行程でB・Cに入り、本隊合流までA・B・Cを建設、荷上げとルート工作を先行するというのだから泣けてくる。退屈なバス旅行の主役はテレコで、尾形氏は水前寺清子の「365歩のマーチ」を鳴らして悦に入っているが、僕は歌詞の「……休まないで歩けえ」というフレーズが気に入らない。「やはりビートルズですよ」とは北出君。午後3時リシケン着。バスに乗り疲れてウッタルカシについたのは夜の10時を回っていた。隊荷を部屋に運び込み、それから遅い食事に行く。疲れた1日だった。

〔9月10日〕土砂崩れで足止め

ウッタルカシでは食料の購入を済ませ、80数名のポーター達と出発の予定だった。ところが、8日のガンガニーダブラニ間での雨のため地すべりが起き、通行不能になっているという。そこで、ポーターの手配と宿泊を依頼している、Garhwal Mandal Vikas Nigam's 社の事務所へ行き、そこのマネージャーと相談した。道は幅200mにわたって崩れ、20人死んだとか。復旧には4日から10日位かかるだろうとか言う。ともかく明日は現場を見に行くとし、今日は停滞、買い出しと休養ということになった。「参りましたね」とか言いながらも内心ではこれで少しはのんびりできると喜こんだ。

夜、食事の帰りにバザールでGMVNのボスという若い男と会った。ガルワール一帯のレストハウスやポーターの手配をやっている男で、かなりのやり手と見た。白人の美人を連れていたが、なんとワイフなのだそう。我々は羨望とも嫉妬ともつかない視線を彼に送り、ロッヂに帰った。

〔9月11日〕ウッタルカシ

6時半に起こされ慌ててバス停に向かうが、バスは既に満杯だった。なんとか入り込み7時に出発する。バスは灰色に逆まき流れるバギラッティ川を足下に、「崩壊常習地帯」をガタガタ走った。9時半、ブキに着くと丁度目黒労山隊とネルー登山学校のパーティが出発するところだった。これを見たGMVNのマネージャーが「今日これだけの人間が通れば明日は大丈夫だ」と言うので同じバスでウッタルカシに戻っ



た。

午後、買い出しを済ませる。ところが砂糖がどこにもない。ヤミで10キロようやく手に入れたが、なんと1キロ9ルピーも取られた。

〔9月12日〕ウッタルカシーランカ

五時半起床。ポーターはもう集まっていて、バスに荷物の積み込みを始めていた。6時50分、我々と80数名のポーターを乗せた2台のバスはウッタルカシを後にした。ブキで下山中の東大と国学院の隊に会った。シヴリンは成功、バギラッティIは失敗したようだ。僕らはどうなるのだろうか。

キャラバンに入ると少しはのんびりした気分になれる。小1時間でガンガニを通過し、やがてバギラッティ川をせき止めたという大崩壊地の見える所に来た。すごいものである。崩れた谷間から何やら煙のようなものが見えた。しばらく崩壊の原因について議論する。先日雨で崩れた道は幅20m程で、さほど大きなものではなかった。ダブラニからは再びバスに乗り込みランカに向かう。あたりは峡谷となって黒部の廊下を思い起こさせた。ランカ着 5:25。

〔9月13日〕ランカーチルバス

ランカとバイロンガティは指呼の距離だが、左手よりジャルガンガが入り込み峡谷となって寸断されている。いったんかなり下降し、登り返したところがバイロンガッティでここからまたバスに乗る。30分程でようやく聖地ガンゴトリに着く。それにしても昔からヒンドゥ教徒はバギラッティ川のような大変なところを聖なるガンガの源を求めて巡礼してきたのだろうか、信仰とはすごいものだと思う。

さて、休む間もなく歩き出し、途中ボルダリ

ングで遊びながら行くと、チルバスで尾形さんが休んでいる。ポーターが動かないというので今日はチルバス泊りとなった。夕方尾形氏発熱、喉が炎症を起こしているので抗生物質を出す。北出君も下痢と不調が続いている。群馬の船水さんはカゼで声がつぶれてしまった。

〔9月14日〕チルバスーゴウムク

朝焼けのマンドピークは素晴しかった。歩く度にバギリッティやシブリンが近付いてくる。ガンゴトリに来たぞ！という気分が高まってきた。ガウムクではネルー登山学校のパオのようなテントに泊まる。夜、満天の星空。

〔9月15日〕タポバンB・C建設

今日で群馬隊の2人ともお別れである。「お元気で!」、「成功を祈っています」。お互いの健闘を願いながら、彼女らはチャットラギ氷河へ、僕らはタポバンへと向かっていった。

シブリンの据野に広がる、広大なタポバンの東大のキャンプ跡に、早々とポーター集まっている。彼らも今日で終わりだ。B・Cはもっと上に設けようと考えていたが、ナイケ、グブタの指示が悪く、統制がとれないまま荷物を降ろされてしまった。ポーター達は「サブナマステ」と挨拶をして帰っていく。残ったのは我々とL・Oとグブタ、コックのネギとキッチンボーイのパハドールの7名である。急に静かになった。夜、東洋大の大滝さんらメルー隊が遊びに来た。オランダ隊と隣合わせだそう。ルートのことや、L・Oの事についていろいろ話を聞き、「プレイボーイ」と「写楽」とを交換した。お互い貴重な雑誌である。夜、尾形氏発熱。北出君、夜半咳込む。



〔9月16日〕A・BC荷上げ

今日よりA・BCに荷上げに入る。尾形氏はまだ熱があるが3人で行くことになった。途中、東洋大とオランダのテントに寄っていく。両隊とも今日A・BC入りするとか。我々は大滝さんと一緒に、あれこれ教えてもらいながら氷河に入る。シブリンの据野をまいて、チルティバマクに入るまでが常習落石地帯で、本当に嫌な所である。A・BCは東洋大と同じ場所としたが、そこまで実に長かった。テントを張り終える頃には雨から雪になった。途中でオランダ隊とすれ違った。その下でバテている北出君と会った。彼は無理して動いたため高度障害がひどく、B・Cに帰ったのは7時半だった。心配してネギとパハドールが迎えてくれた。「グブタは?」と聞くと、「多分サブ達の帰りが遅いので迎えに行ったと思う」と言う。"うーん、あいつらしい所あるな"と思っていたら、東洋大の歯っかけリエゾンと3人で帰って来た。なんのことはない、遊びに行ってたんだ。

〔9月17日〕B・C移動

2人共、熱が下がらず、行動は見合わせ、B・Cを移動することにした。このB・Cより1時間程上に、JACケダルナート隊のB・Cがあるが、そこにB・Cを移すことにした。そこで、グブタとL・Oに事情を話し、手伝ってもらうことになった。メンバーはグブタにL・O、パハドールと僕、おまけにオランダ隊のL・Oも手伝ってくれた。午前1回、午後は1時半からもう1回やるという、グブタは4時から始めて6時に帰ればよいと言う。この辺が理解できない所だ。結局2回目は2時からなまけ者グブタを残して出発。ラージブ・ラージに荷上げの礼を言うと、「アイム オールソー マウンテンヤー」という答が返ってきた。ちょっぴり感激した。夜、尾形氏は小康状態になる。

〔9月18日〕尾形氏ボジュバスへ

明方尾形氏のうなり声を聞く。熱が下がらず、39℃台である。尾形氏はここにいても熱は下がらないからボジュバスまで下がると言う。また、コックのネギが胸の痛みを訴え、下りたいというので、HAJへと飛騨メルー隊へ、尾形氏の状態を書いた手紙を持たせ下らせることにした。

尾形氏が下山の準備をしていると、メル隊の山本ドクターと岩島が来てくれて、診てもらうことになった。12時半頃から吹雪となり、2時半頃かが止んだので尾形氏は下り始めた。北出君が同行する。尾形氏はとても熱がある人とは思えない足取りで下りていったが心配である。1人残った僕は背負子の修理と荷の整理を行った。夜雨になった。

〔9月19日〕本隊と合流

新B・Cへ荷上げをすませ、交信に行くとポーターが続々と登ってきた。久しぶりに見る隊員の顔も見える。野畑さんがトップで登ってき

たが、最初僕を見てハイポーターかと思ったらしい。再会を喜ぶ間もなく、ポーターをだましだまし新B・Cまで上げさせる。後で数人のポーターが盛んに抗議していたが、僕はとぼけて知らん顔していた。次々となつかしい顔と対面する。順応活動をすませた彼らは、またボジュバスへ下っていった。今夜は北出君と2人である。夕方から雪になり、バハドールが「大変だ。キッチンテントが壊れる」と言ってきた。降りしきる雪にはかなわず、キッチンテントをつぶし、荷物にシートをかぶせたままにしておいた。ともかく、これで本隊と合流でき、一安心した夜だった。

本隊キャラバン

斎藤光明

〔昭和55年9月13日〕—

成田発16:05。AI-315

30分遅れて出発、空港はやや曇っていたが、離陸すると雲海の夕焼けと富士山がとてもきれいだった。

〔9月14日〕

デリー着。その夜はインペリアルホテルに向かう。リシケシへの出発は10:45分、ツーリストのバスが迎えにくる。

デリー バス リシケシのツーリストバンガロー

10:45出発 18:30着

7時間の道のりをバスにゆられてリシケシに着く。ツーリストバンガローは、なかなかきれいな宿である。ただ気になるのは、天井にヤモリが数匹くっついていることだ。ツインベットに寝ていてもあまり気持のよいものではない。

〔9月15日〕

リシケシ バス ウッタルカシ

9:00出発 16:40着

リシケシからバスで40分位走ったあたりから山岳地帯に入る。ちょうど日本でいえば奥秩父



に似ている。山の中腹にだんだん畑、小さな農家が点々としている。途中小さな村で休憩。バスを降ると子供たちがめずらしそうな目で我々の一行を見る。ここよりまた山道を蛇々と走ると、急に大きな町に入る。映画館まである。ここからウッタルカシである。私たちはこのピクワンホテルに泊る。

〔9月16日〕

ウッタルカシ バス ガンガニ 歩、ダブラニ

8:30出発 10:30着 15:30着

ウッタルカシより1時間半くらい走ったあたりで、雪を付けた山が見えてくる。ガンガニでバスはストップ。ここから先は歩きである。みんなバスに乗り疲れた足を動かせると言っている。道にはひつじと軍人がたくさんいる。

〔9月17日〕

ダブラニ バス ランカ 歩、パイログティー

9:00出発 10:40 11:20

バス ガンゴトリ

14:00

まわりを見ると、大峡谷で大きな岩壁が目につく、道がとぎれとぎれなので、バスに乗ったり歩いたり、なかなか楽しいキャラバンである。ガンゴトリの町には大きな寺院があり、その回りには、たくさんの宿がある。宗教の町という感じである。その夜ポーターたちと寺院の庭でダンスをしていると、寺の中で急にお経が聞こえて、踊っていたみんなは手を合わせて洗礼を受けた。水を頭かけられ、甘いお菓子をもらったが、あまり食べる気がしなかった。

〔9月18日〕

ガンゴトリ 歩、チルバス 歩、ボジュバス

〔9月19日〕

ボジュバス 歩、ガンゴトリ氷河の末端 歩、仮B・C
9:30出発 11:20 13:30

歩、ボジュバス

17:00着

ボジュバスを出て2時間の所で氷河の末端に出る。初めて見る氷河はとても興味深い。あの青い氷からなぜ濁った水が流れて来るのか不思議である。仮B・Cの草原帯の真ん中にあるシプリンの姿がとても美しい。

〔9月20日〕

ボジュバス 歩、仮B・C 歩、B・C

この日は最終キャラバンだというのに、自分は調子が悪い。高度障害が我れ先にと出たらしい。

昨日調子良く歩いた道がとても苦しい。

みんなは雪の積った草原をB・Cまで快調に足を進めるが、自分と数人の調子の悪い者は、仮B・Cまで歩くのがやっとだった。

今日はシプリンもガスがかかって見えない。

登山の概要

尾形好雄

「聖なる地」の意を持つタポバンは、インド最大の氷河、ガンゴトリ氷河の左岸に位置し、怪峰シプリンの裾野に展開する広大な曠野である。

この「聖なる地」に我々先発隊がB・Cを設けたのは9月15日であった。

B・Cの高度は、4,350mと少し高く、ウツタルカシのポーター達の何人かは高度障害のため、B・C直下のモレーン帯の登りでダウンしてしまい、強靱なポーターがダブルボッカをしてのB・C入りであった。そんな有様で広大なタポバンの曠野を突っ切った先へB・Cを設けることは難しく、結局、東京大学のシプリン隊のB・C跡に構えることにし、先発隊はひとまずここに隊荷をキープした。

B・C建設の翌9月16日からは、早速、A・B・Cへのルート偵察と荷上げが開始された。

甲子園球場が2～3面もとれそうなタポバンには、すでにメルーの東洋大学隊、ケダルナート・ドームのオランダ隊の2隊がB・Cを設けており、それぞれ登山活動を開始していた。タポバンの曠野を横切り、シプリンの裾をからむようにガンゴトリ氷河左岸のサイドモレーンを進むと、シプリンのガネッシュ稜の末端付近でガンゴトリ氷河へ下降するようになるが、ここは絶えずサイドモレーンの崩壊があり、落石の脅威にさらされながらのいやらしいトラバースで、肝を冷やされる所であった。この落石帯を過ぎると、堆石氷河はモレーン稜状を呈し、左岸から合流してくるキルティ氷河に沿ってゆるやかにカーブするようになる。シプリンもこのキルティ氷河側にまわりこむと、あの天空に突き刺すようなシバ・リング（シバ神の巨根の意）の山容と異なり、双耳峰となった時特異な姿を現すようになる。そのシプリンの圧倒的な側壁に囲まれたキルティ氷河左岸のアブレーションバレー（4,760m）にA・B・Cを建設する。

この日のA・B・C迄のルート偵察と荷上げ行に依り、我々が隊荷をキープしたB・Cより更に40分程進んだところにB・Cに格好な場所がある事が判明したので、B・Cを移すことにし、早速、翌9月17日から本隊の到着迄、先発隊は

B・Cの移動にかかる。

一方、9月13日に日本を出発した山田副隊長以下16名の本隊は、アプローチも順調に進んで、18日に全員元気にボジュバサに到着した。成田を飛び立ってからわずか5日目という短期間で、ガルワールの山懷深くヒマラヤの眺められる所へやって来れるのであるから、インド・ヒマラヤのアプローチは便利な筈である。

9月19日は、ここ迄一緒にやってきたバギラティⅡ峰に向かう群馬の女子雪氷クラブの本隊とガウムクで別れる。彼女たちはガンゴトリ氷河右岸沿にナンダンバンへと向かい、我々の方はガンゴトリ氷河の舌端付近を横切って発達したサイドモレーンの急登に汗を流してタポバンへ向かった。

本隊のB・C入りに当っては、4,300 mラインの高所順化に留意して一気にB・C入りすることを止め、一旦ボジュバサから空身でタポバンのB・Cを往復してから翌日B・Cへ入ることにし、この日は全員ボジュバサへ戻った。やはり最初の4,000 mラインということで、B・C迄到着できず早々に引き返してきた隊員も見られたが、それほどひどい高度障害を訴える者もなく、翌20日には全員がB・Cへ上がった。但し、大事をとって高度順化が遅れている者は旧B・C泊りとし、翌日新B・Cへ上がらせた。

丁度、本隊がB・Cを訪れた19日から、ガンゴトリ氷河一帯の山々は悪天候に見舞われ、タポバン付近迄一面白銀の世界と化した。その3日間続いた悪天候も過ぎ去り、いよいよポスト・モンスーンの好天が訪れた。

9月22日、A・BCへの荷上げを再開し、先発の尾形、関の2名はA・BCに入る。また、B・C入り後、発熱して順化の遅れている2名は角田インストラクターが随行してボジュバサへ下らせる。医療係の看護婦さん村上は山田副隊長と共にメル氷河の飛驒山岳会メル隊のB・Cを往訪して山元ドクターにいろいろとご教示を仰いでくる。

降雪後のモレーン帯の通過は落石が物凄く、最悪のコンディションであったが、なんとか無事に荷上げも終えA・BC滞在者を出すことができた。

9月23日、前日A・BC入りした尾形、関の2名はC・1のルート工作に向かう。まず、A



・BCからなるべくアルバイトの少ないルートを選びながらいられルティ氷河を横断する。この辺りのキルティ氷河も起伏の激しい荒涼とした堆石氷河をなし、対岸までの横断にはたっぷり1時間以上もかかってしまう。この氷河を横断してモレーン帯に上がり、アブレーションバレーに降り立ってからケダルナート・ドームの北西稜というべきドームから右下に派生している冗長な尾根に取り付く。岩屑混りの雪道には膝位のラッセルを強いられ思いのほか高度が稼げず、この日の最高到達点は5,415 m迄で荷物をデポして下る。この日は新たに10名がA・BCに入り賑やかになる。

9月24日、C・1 (5,550 m) 建設。A・BC入りした隊員のうち不調者1名を除いた11名でC・1建設に向かう。1度トレールが着くと前日の苦労が嘘のようにピッチが上がり、正午過ぎには北稜上のC・1予定地に辿り着き早速設営する。C・1直下は広大な雪壁となり雪崩の爪跡も見られたので、50mのフィックス・ロープを施す。

9月25日、前日のC・1荷上げを見て、体調の良さそうな山田、新郷、関、高瀬、藤岡の5名をこの日C・1泊りとして残りのメンバーはこの日もC・1の高度経験を踏む。また、ボジュバサへ下っていた隊員も体調を取り戻してA・BCへと上がって来て漸く全員が本格的登山活動に出揃う。

9月26日、C・1入りした5名は、この日6時から行動を開始し、C・2へのルート工作に向かう。ドームへと続く尾根はまさにスキー滑降に適した冗長な斜面となっていて、その中を膝迄のラッセルを強いられながら遅々とした歩みで一步一步高度を勝ち取り、正午過ぎにC・2予定地 (6,280 m) に到着する。途

中のクレバス帯と雪壁の所には100mのフィックスロープを施した。

また、この日は新たに10名がC・1に入り計15名がC・1泊りとなり大賑わいとなる。

9月27日、昨日C・2へ到達した5名はこの日A・B・Cに下って休養に入り、早くも登頂態勢に備える。一方、前日C・1入りした10名はC・2の荷上げに向かい、C・2到着後、さらに高度差にして50m～100mを自己体力に応じて登り、各々6,330m～6,380m位迄の高度経験を踏んでC・1へと下降した。さらに順化が遅れて後からA・B・Cに上ってきた5名もこの日はC・1に上がりステイする。

9月28日、昨日、C・2上部迄足をのばした9名は朝から休養にA・B・Cへと下る。一方、前日C・1入りした5名は角田インストラクターが同行して、C・2へと向かいC・2迄の高度経験を踏んでから一気にA・B・C迄下って休養に入る。19時過ぎてから漸く殿が辿り着き、B・C以来2度目の全員集合となり、各テントからは夜遅く迄明かりが洩れ談笑が聞こえていた。

9月29日、B・C入りして9日目、この日からいよいよ頂上攻撃に入る。まず第1次アタック隊として27日から休養に下っていた山田、新郷、関、高瀬、藤岡の5名がA・B・Cを出発してC・1へとキャンプを進める。他の15名は第2次アタックに備えてA・B・Cにて休養。登頂への想いを胸に抱きながら最後のレストを各自のんびりと味わいながら過ごす。

9月30日、C・1の第1次アタック隊5名は雪煙舞い上がる中をC・2へとキャンプを進めてアタック前夜を迎える。

このC・2からケダルナート本峰へのアタックは少々距離が長くなる上、ドームと本峰の間がギャップになっており、アタックルートとしてはやりにくいルートとなっている。長丁場で帰途ドームの登り返しがあることを考えると、かなりシビアなアルバイトが懸念されたが、一応、翌日のアタックは、午後3時にC・2を出発して本峰を狙う事としてトランシーバーで打合わせる。

A・B・Cで休養していた残り15名の隊員は第2次アタック隊としてC・1に入り、全員一丸となって登頂態勢に臨む。

10月1日、アタック当日、C・2入りした5名のうち藤岡は初めてのC・2泊りで不調を訴え、アタックを断念する。副隊長の山田が付添いで一緒に残ることになり、新郷、関、高瀬の3名で第1次アタックをかける。午前3時30分にC・2を出発した3人は小1時間も進まないうちに、余りの寒さに耐えきれず、ツェルトを被って暫くの間休む。この頃より高瀬の調子も悪くなり、高瀬は独りでC・2に引き返すことにし、残り2人でアタックを続行することになった。6時頃高瀬はC・2に戻り、高瀬が引き返してきたので急遽、山田がアタックに向かう。猛烈なスピードで2人の後を追った山田はドームの手前で2人に追いつき其の後、3名で登高を続け、9時10分、3人はドームの頂上に到達した。

ドームから対峙して眺める本峰はやはりルートが長く、出発のつまずきから時間的にも遅くなっており、本峰へのアタックは断念してドームで打ち切ることにする。

下降に際して関隊員は、6,831mのドームの頂きからスキー滑降を行い雄大なシュプールを描きながらC・1へ下る。

第2次アタック隊の15名はこの日C・2へとキャンプを移したが、C・2への途中で飯田は不調を訴え残念ながらアタック前にA・B・Cへ下ることになる。一方、この日体調不調からアタックを断念した高瀬、藤岡の2人はC・2の下で第2次アタックのメンバーと合流、見たところそれほど不調とは思われず、明日ドームへのアタックを再トライすることにし、一緒に再びC・2へと引き返す。

第1次アタックから戻った3名のうち新郷、関の2名はC・1へと下り、山田副隊長には明日のサポートのためにC・2に留って貰う。



A・B・CからこのC・2迄はモレーン氷河と冗長な雪稜をオンリー・ウォークで登るだけの易しいところであったが、C・2からドームへはアイゼンとピオレの領域となるため、アタック前日というのにこの6,300m近い高度でアイゼン・ワークの雪上訓練と相成る。

10月2日、ファイナル・キャンプに17名という今迄のヒマラヤ登山では例を見ないような賑やかなC・2での一夜を過し、第2次アタック隊は全員でドームのアタックへ向かう。サポートとして山田副隊長にはC・2に残って貰い、6時40分、C・2を後にする。ポスト期も10月に入り、高度も6,000mを越すと雪面は締り、アイゼンの領域となる。つい先日迄のラッセルが嘘のように発達したシュカブラにアイゼンを利用して登っていく隊列の風景は、まさに冬富士登山を想わせるような登高で、高度を稼せぐ度に各自の速度は減速され立ち止って喘えぐ回数も多くを重ねるようになる。

C・2を出て凍てつく朝の寒気の中を登ること約3時間半で、広々としたドームの頂に全員辿り着いた(午前10時)。

お決りの頂上での儀式も、1度に16名となるとなかなか大変で6,831mの高度とは思えない頂上での全員集合の記念写真まで撮った。

頂上からの眺望は、生憎と北側が濃霧におおわれ、360度の展望は得られなかったが、それでも充分満足できるような幾重にも連なる重々としたガールワールの山並みを眺めることができた。

頂上からの下降は、旗を振ったという安堵感から足元が定かでない者も何人か現れ、難儀したが、1時間半程の下降でどうにか無事にC・2に帰還した。早速、撤収にかかり、長居は無用と用意の出来たものから下山に着く。各自膨れあがったザックを担いでの撤退は、下るにつれ1人、2人と落伍者が出て、結局疲労の激しい者はC・1泊りとし、7名がC・1に留り、他の者は一気にA・B・Cへと下って我々のアタックは終了した。

10月3日、感激の一夜は明け、この日はC・1、A・B・Cともに撤収して、全員B・Cへ帰還する。

帰路キャラバン

遠 藤 喜重郎

〔1980年10月3日〕

長いようで短かった登山活動も終え、今日はA・B・Cキャンプ撤収日である。まだ山に未練がある者、一刻も早く下山して風呂に入り、冷たいビールを飲みたいと思っている者、各自それぞれいろんな思いを抱きながら荷物等の整理を終り、これよりB・Cキャンプを目差して出発だ。足どりは高度順化に慣れたせいか軽快そのものでA・B・C入りした時の重い足どりが嘘のようだ。回りの風景もA・B・Cキャンプ入りした時は雪が何cmか積っていたが、今は雪も完全に解け、快適そのもの。3時頃B・Cキャンプに着いた。キャンプにはリエゾン・オフィサー、Cox社の人々が居て、「おめでとう」と言いながら握手を求めて来た。夜7時頃になって、ゲタルナート・ドーム登頂後不調のためC・1キャンプに泊まった何名かの者も無事B・Cキャンプに着いた。これで全員が久しぶりにB・Cキャンプ入りした。その夜は何日かぶりで乾杯の酒を飲む。少しの量だが酒を飲むのは久しぶりだったのでとにかくうまかった。食後、外でたき火を囲みながらインドの唄とか、日本の唄とか……で一種の交流会を開いた。寒い夜であったが、空には満天の星がちらばって印象的な夜であった。

〔10月4日〕

寒い目ざめとともに、チャパティー等の朝食をとり、食後、全員雪やけた真黒い顔(中には始めから黒い顔の人もいたが)で、記念写真を撮る。今日はB・C撤収日なので、また撤収作業に移った。荷物等の整理も終わり、あとはポーターが荷物を運ぶのみとなったが、午前中までには来る予定のポーターがなかなか姿を見せない。

結局来たのが午後3時頃であったため、今日中に行く予定だったボジバスは中止になり、ボジ

バスの手前にあるメール登山学校テント基地に変更となる。時間の遅れは最後までひびき、テントを張り終えたのが午後7時過ぎとなり、夕食も午後9時頃になってしまった。何をする事もなく夕食後はテントに入り、寝るのみである。今日の夜は一段と寒い。

〔10月5日〕

今日はガンゴトリまでの長丁場になるため、いつもより早く朝食をとる。朝食は例によってチャパティーである。天気も良好、今日は絶好のキャラバン日和になりそうだ。朝から何名かのポーターが下りてくる。おそらく昨日BCキャンプ付近にでも泊ったのだろうか。

午後10時頃より各自それぞれガンゴトリをめざして出発した。行きのキャラバンと違い、のんびりした足取りである。中には湧水で髭を剃っている者、休憩休みを充分すぎるほどとっている者などさまざまなので、ガンゴトリに着いた時間もまちまち、ガンゴトリに着いた者は決まって油で炒めた菓子とチャイで空腹をいやした。何故かというところまではキャラバン中Cox社が用意した昼食のランチBOXが今回から配給されなかったためです。

夕食には珍らしくオニオンライスが出て食欲をそそった。今までもそうだったが20名の食事時は大変なものだ。本当に要領のいい人は良く食べ、要領の悪い人は最悪である。それにしても食欲旺盛な我々の胃袋を賄うキッチン係も大変だなとつくづく思う。

夜は久しぶりに南京虫とベッドで寝る事になる。南京虫に食われないよう祈って寝ることにしよう。

〔10月6日〕

昨夜は幸にして南京虫に食われず眠る事ができた。今日はダブラニまでの予定で、ガンゴトリとバイロンガティの間はバス使用する。そこからランカまで約30分ほど歩く。ランカでダブラニ行きのバスを待つ。待つといっても2～3時間は待たなければならない。ランカはちょっとした広場で、茶店らしき店が3～4軒あり、その店で例により買食いをする。なかには少しの暇があるとボルダリングに熱中する人がいて、毎回飽きずにと感心する。やがて1台のデラッ

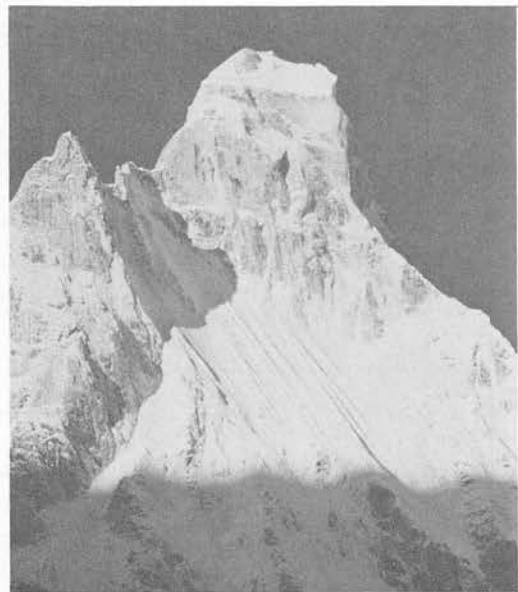
クスバス？が到着。ポーター達と我れ先と乗り込む。途中ハルシルでロキシー（地酒）を買うためにポーター2名が降りる。今晚酒にありつけくと思うと咽がなる。ダブラニには午後5時頃着いたが、特に変化なし、例によりカレーの夕食を食べ横になる。カセットから聞き飽きた日本の歌謡曲が流れ始めた。地酒を期待していたがなかなか戻ってこない。やっと午後10時過ぎになって戻ってきた。聞くところによると、今日のバスはなくハルシルから歩いて来たとかで、本当にご苦労さんでした。地酒は水ぽく正直なところうまい酒ではなかった。

〔10月7日〕

朝食はそろそろ底がついたのか、いつもより少ない感じである。

ダブラニを午後8時に出発する。ダブラニより歩いて1時間位の所に温泉があるとの事であったが、どの辺なのかわからず通過する。後で何名か温泉に入ったとの話、うらやましい限り。見なれた風景に目をやりながらやがてガンガニに着く。ガンガニにはすでにCox社のバスが待っており、リシケシまでバスの旅となる。リシケシのバンガローに着いたのは午後10時頃となった。

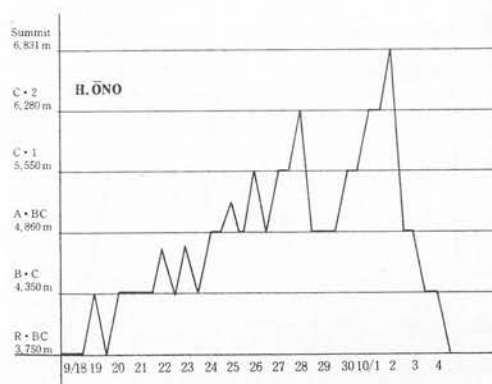
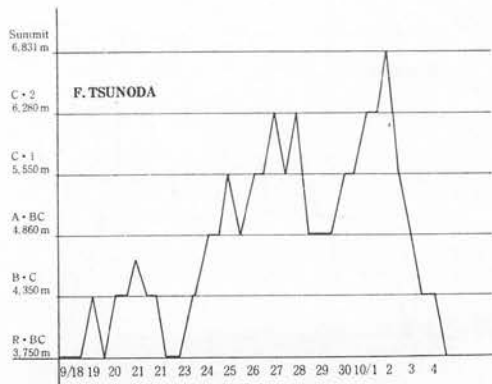
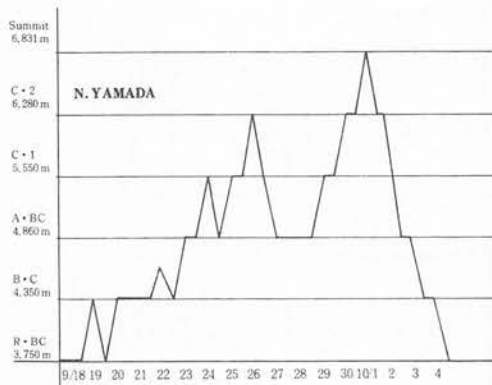
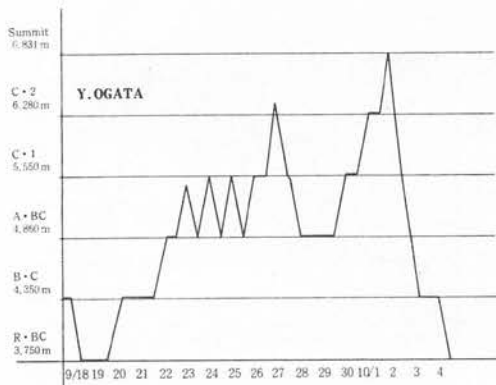
明日はニューデリー入りだ。ホテルに着いたら風呂に入り冷たいビールを飲もう……。そんな事を思いながら床につく。

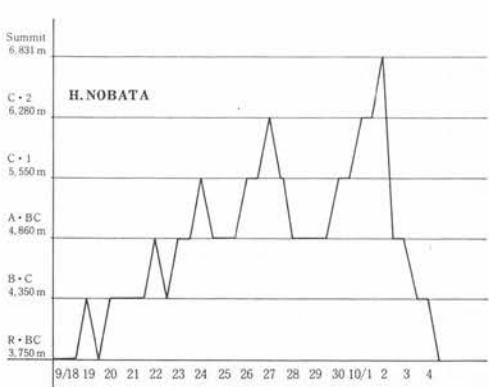
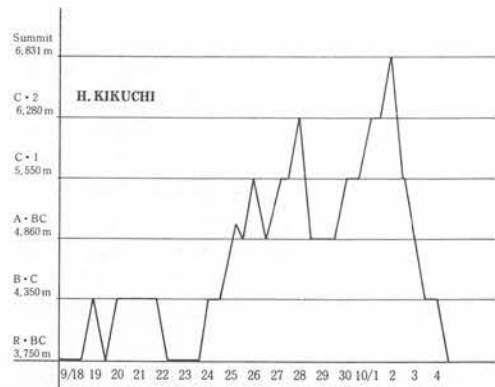
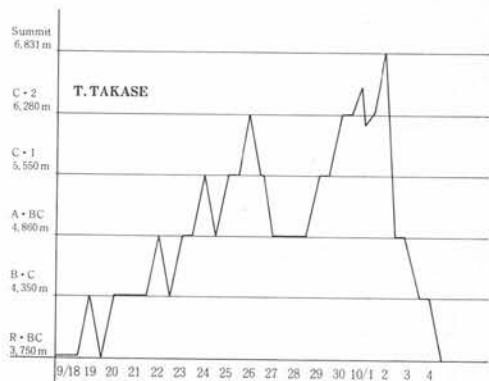
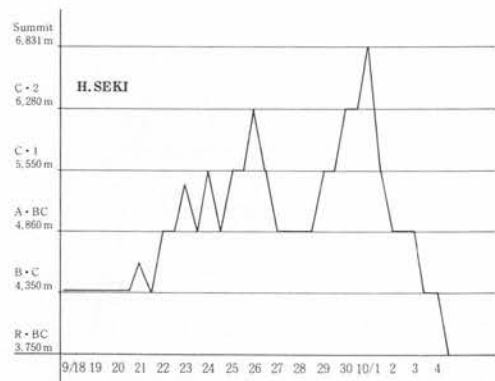
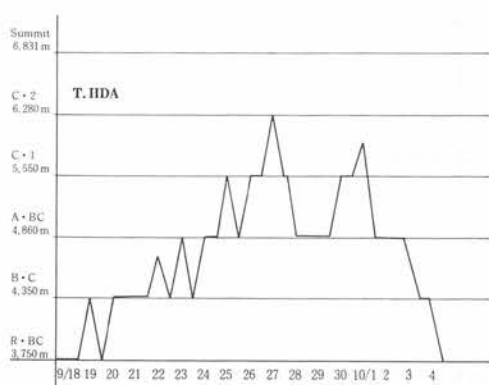
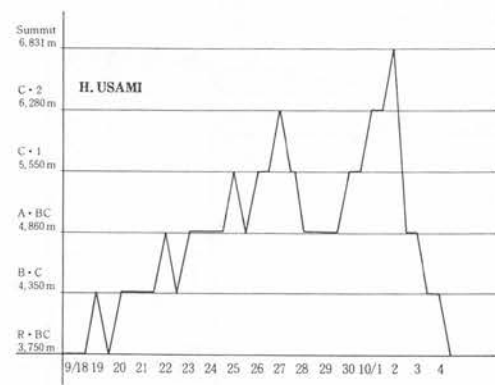
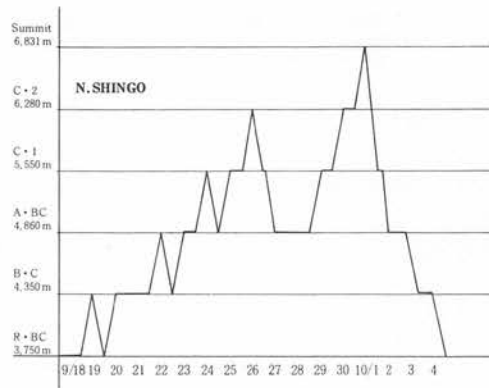
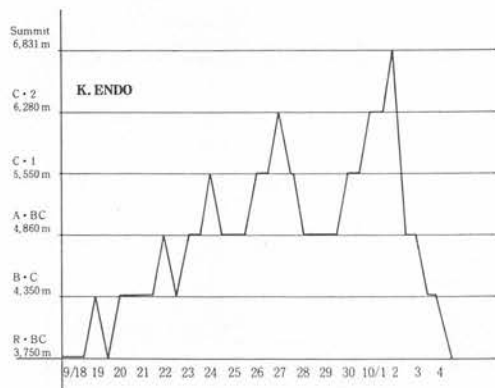


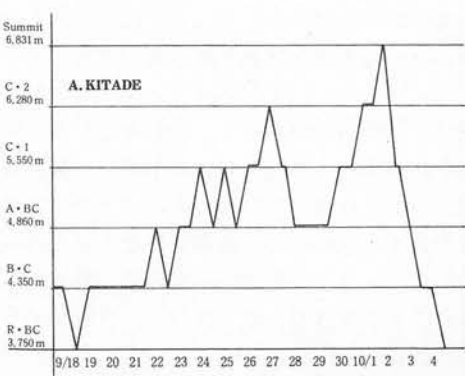
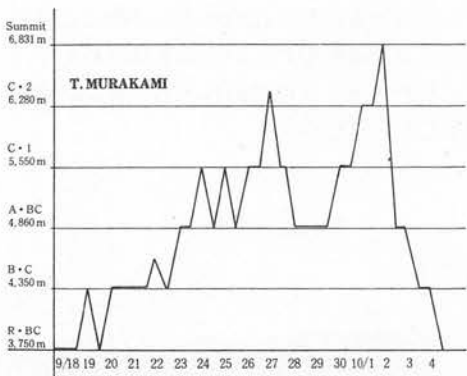
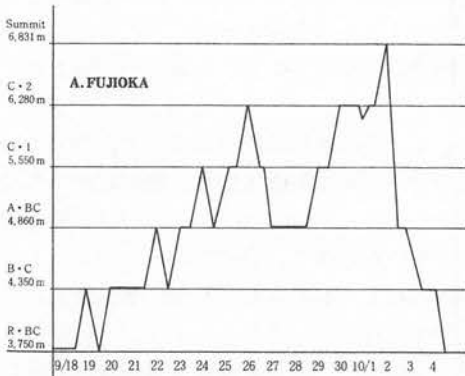
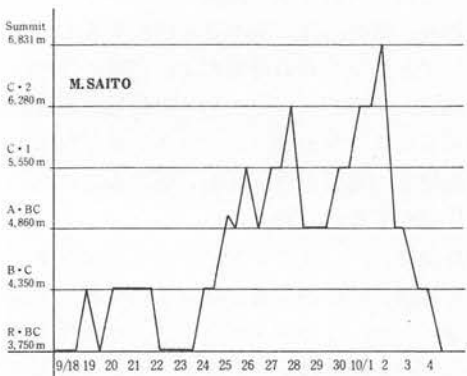
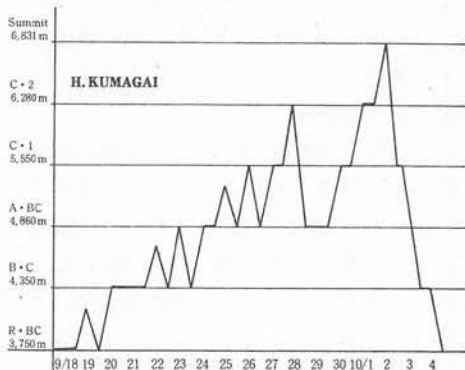
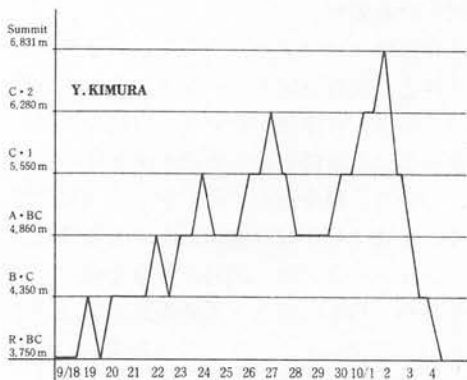
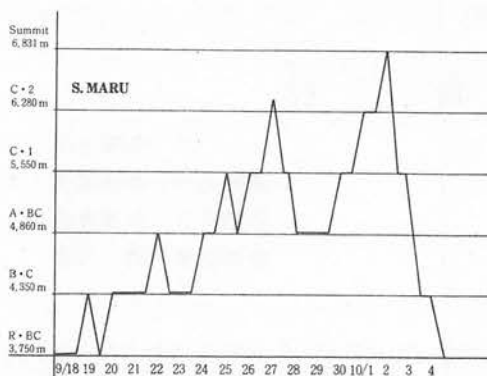
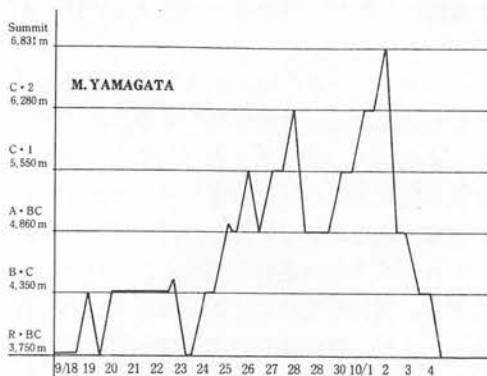
《行 動 表》

	R・BC 3,750 m	B・C 4,350 m	A・BC 4,860 m	C・1 5,550 m	C・2 6,280 m	Summit 6,831 m
9/18	尾, 北					本隊 R・BC 到着
19	北	山, 角, 新, 高 藤, 遠, 丸, 齊 山形, 野, 大, 飯 菊, 木, 村, 飯				
20		尾, 山, 角, 新, 大 高, 藤, 野, 丸, 齊 熊, 宇, 飯, 菊, 木 村, 山形, 遠				
21		角, 関				B・C 入り
22	角, 齊, 菊	尾, 関 新, 高, 藤, 遠, 木 丸, 宇, 野, 北 (大, 飯, 熊)				B・C 移動
23	角	山, 新, 高, 藤, 遠 宇, 村, 木, 木, 野 大, 飯, 熊	尾, 関			
24	齊, 山形, 菊	角, 丸, 飯, 熊, 大	尾, 山, 新, 関, 高 藤, 野, 遠, 北, 木 村			
25		齊, 山形, 菊	山, 新, 関, 高, 藤 尾, 角, 飯, 丸, 宇 村, 北(大, 熊)			第1Camp建設
26			尾, 角, 飯, 丸, 遠 野, 宇, 北, 村, 木 大, 齊, 山形 熊, 菊 大, 齊, 山形 熊, 菊 山, 新, 関, 高, 藤	山, 新, 関, 高, 藤		
27			山, 新, 関, 高, 藤	尾, 角, 丸, 飯, 藤 北, 宇, 村, 木, 野		
28			尾, 丸, 飯, 野, 遠 宇, 村, 木, 北	角, 大, 齊, 山形 熊, 菊		第2Camp建設

	R・BC 3,750 m	B・C 4,350 m	A・BC 4,860 m	C・1 5,550 m	C・2 6,280 m	Summit 6,831 m
9/29			山, 新, 関, 高, 藤			
30			尾, 角, 大, 丸, 齊 山形, 野, 遠, 飯, 熊, 菊, 木, 村, 宇, 北	山, 新, 関, 高, 藤		
10/1			飯	新, 関	高 藤 山	第1次アタック
2			山 新, 関	山形, 齊, 村, 木 菊, 尾, 角, 大, 熊 遠, 宇, 野, 丸, 北	北, 菊, 木	第2次アタック
3			尾, 角, 丸, 熊, 木 菊, 木			
4			山, 新, 関, 高, 藤, 齊, 山形, 大			
	B・C撤収 下山					撤収







食糧

(チーフ) 丸誠一郎
齊藤光明 木村陽子
野畑浩之 菊池春枝
新郷信廣 関 久雄

初めての海外登山の食糧を計画する。これは自分たちにとって大変な役目だった。

日本の冬山合宿の食糧を計画するような簡単にはいかない。一口にヒマラヤで食べる食事を20人・2週間分といわれても、まず何をしようのかまごつく始末であった。

そこでまず当、食糧係の始めた仕事は、隊員全員の嗜好品、好きな食糧、またいつも冬山合宿などで使う献立表などのアンケート調査であった。その結果、日本全国の冬山合宿の献立表が集まって来た。カレーライスに始まり、五目飯、牛丼、チャーシューメンまでたくさんの資料が入ってきた。その中から、ベースキャンプの食糧を選ぶことにする。また、高度食糧としてはドライフーズを使用することにした。この頃出始めの「マウンテンハウス」の使用も考えた。

そして5月の連休に行った富士山合宿でこの献立のサンプルを実際に作り、隊の人たちに試食してもらう。「マウンテンハウス」は、物めずらしいせいとか好評で、特にフルーツがよいとかで、取入れてくれと言われたが、予算が合わず数は少なくなった。またレーション(行動食)もいくつかのサンプルを菊池さんが作って来た。これも「多い」「少い」の声はあったが嗜好品としてはなかなかだった。ここまではよかったのだが、ベースキャンプ食を作ったところ、アルファ米、シチュー、インスタントミソ汁の献立の中に、「納豆汁」があって、これを出したら関西方面から来た人たちから批判が出た。関西では納豆はあまり食べないらしく、「ヒマラヤでこんな物食えんワ」と。食糧係はそこまでは気がつかなかった。この頃から食糧係の動き方も、方針も決まり実質的な献立作りと、食糧集めが行われた。

大きく分けると、食糧は、ベースキャンプ食、

高所食糧、行動食、嗜好品と、四つの分野にまとめていった。

ベースキャンプ食糧は、従来の冬山食糧と同じにした日本食で、食べなれたものにしようということである。またキャラバンでインド料理もあきる頃だからだ。それとベースキャンプ食糧の予算を大幅に安くできたのは、一つに食品会社よりたくさんの寄付を受けられた事がある。頭を下げ、寄付を受ける。遠征ならではの光景である。また、食糧係全員で築地へ買物に行き、値ぎりまくる。安く山へ行くためには、並々ならぬ努力が必要だ。

高所食糧は、マウンテンハウス、ドライフーズを主体とした各食糧をレーション化し、軽量かつコンパクトに重点を置いた。当初の予定では、高所では高度障害のため食が進まないと聞いていたので、量を減したのだが、タフな人間が多く、予定よりかなり食い込んでしまった。

マウンテンハウスは、調理が簡単で軽く、使いやすいが、日本人にとって満腹感がないのはさみしい。しかしドライフーズの野菜は、色どりがあざやかで食欲をそそる。高所の食事は、味よりも目で味わう方が食欲が出る。

行動食、嗜好品は、菊池さんがたくさんのアイデアと並々ならぬ研究により完璧に行われた。品名、単価、一バック当りの数量、製造会社重量もこまごまと調べ、パッキングした。また、築地でお菓子を買う時も、店の人よりもくわしく話をするので驚く。

嗜好品は、ベースキャンプにレーションボックスを置き、そこから各自好きな物をとって食べる事にした。このアイデアは、なかなか好評だったが、中には一人でスルメばかりを食べってしまったと、非難された者もいた。

まあ何はともあれ、自分たちの計画した食糧がヒマラヤで通用したということはいうれしかった。これをステップに次回は、もっといい食糧計画をしたいと思う。

食糧品購入表

品名	単位	1食単位	延食総数	配置数			数量		総量	重量		金額		摘要
				B. C	A. B. C	C ₁	C ₂			単量	総額	単価	総額	
国内購入品														
主食				34,900	40,000	18,500	8,750				102,150		22,960	
まぜ飯の素				990	1,825	1,480	—				4,295		6,644	
インスタント汁				—	1,750	200	—				1,950		720	
乾燥食品				1,160	4,040	2,245	—				7,445		45,100	
漬物・佃煮				1,995	4,180	350	—				6,525		24,530	
調味料				1,454	1,570	—	—				3,024		4,017	
その他食品				2,100	3,190	70	—				5,360		14,020	
行動食品				2,500	22,333	16,740	5,210				46,783		55,065	
嗜好品				7,780	7,780	—	—				15,560		16,160	
お茶漬				3,040	6,680	1,590	640				11,950		1,820	
(合計)				55,919	93,348	41,175	14,600				205,042		191,036	
現地購入品														
主食				22,000	—	—	—				22,000		195.6	
野菜				36,050	17,250	—	—				53,300		98.8	
調味料				25,700	5,600	—	—				31,300		237.5	
乳製品				7,000	—	—	—				7,000		93.25	
お茶				2,700	1,200	—	—				3,900		130.0	
缶詰				20,700	—	—	—				20,700		192.7	

そ の 他				5,000 (60,000)	—	—			5,000 (60,000)	58.0	
合 計				119,150	24,050	—	—	—	143,200	1006.1	(= 30,183円)
(総 合 計)				175,069	117,398	41,175	14,600		348,242	221,219	

〔国内購入品〕

※ B—予備食及スペシャルBOXの品物の延食数

品 名	単 位	1 食単位	延食総数	配 置 数			量		総量	重 量(g)		金 額(円)	摘 要
				B, C	A, B, C	C ₁	C ₂			単量	総量	単 価	
ワンタッチライス	袋	120 ¹ / ₁₀₀	50 ^B	—	6,000	(g)	—	(g)	50袋	120	6,000	120	寄付 日高食品
インスタントラーメン	〃	100 ¹ / ₁₀₀	65+80 ^B	4,000	6,500	4,000	—	—	145〃	100	14,500	70	〃 日漬食品
モ チ	〃	50	40+36 ^B	900	900	4,000	—	—	13〃	450	5,800	250	〃 樋口商店
ワンタッチライス白飯	〃	120 ¹ / ₁₀₀	425	250 ^B 30,000	21,000	—	—	—	425〃	120	51,000	—	〃 日高食品
アルファ米	〃	140 ¹ / ₁₀₀	100	—	5,600	8,400 ⁶⁰ 2,000 ²⁰	5,600 ⁴⁰	—	19.6kg	—	19,600	561	11,000 アルファ食品
インスタントうどん	〃	100 ¹ / ₁₀₀	20	—	—	2,000	—	—	20〃	100	2,000	90	1,800 日清食品
マウンテンハウス	〃	68	40	—	—	—	2,750 ⁴⁰	—	2缶	1,375	2,750	1,850	3,700 O.F.D.H 社キャラバン
マウンテンハウスフルーツ	〃	10	50	—	—	10 ¹⁰ 100	400 ⁴⁰	—	10袋	50	500	646	6,460 〃
小 計				34,900	40,000	18,500	8,750				102,150		22,960
マーボー豆腐の素	箱	1 ¹ / ₄ 45	25	—	25 ²⁵ 1,125	—	—	—	7箱	160	1,125	170	1,190 理研
五目メシの素	〃	15	20	—	300 ²⁰	—	—	—	300g	—	300	2,750 ^{1K} 2,800 ^{2,800}	825 アルファ食品
ちらし寿の素	袋	24	20	—	—	20 ²⁰ 480	—	—	480〃	—	480	1,344	〃
シチュエーの素	箱	1 ¹ / ₆ 25	40+30 ^B	30 ³⁰ 750	—	1,000	—	—	12〃	145	1,750	140	1,680 グリコ
チャーハンの素	袋	1 ¹ / ₆ 6	40	40 ⁴⁰ 240	—	—	—	—	7〃	34	240	75 ^{1K} 2,700 ^{2,700}	525 アルファ食品
鳥そぼろ	〃	20	20	—	400	—	—	—	400〃	—	400	1,080	1,080 アルファ食品
小 計				990	1,825	1,480					4,295		6,644

(主 食)

納豆汁	袋	1/4	B. C	A. B. C	C ₁	C ₂	13袋	単価	総量	単価	総額	永谷園
ミソ汁		1/4	50	500	—	—	40	—	500	—	寄付	永谷園
吸物		1/4	75	750	—	—	18 "	—	750	—	"	"
とろろこんぶ		1/4	45	250	200	—	12 "	—	450	—	"	"
		1/6	50 ^B	250	—	—	8 "	30	250	90	720	
小計				1,750	200	—			1,950		720	
人参	g	5	200	400	600	—	1,000 g	8.7	1,000	8.7	6,560	日本フリーズ
ほうれん草	"	3	200	300	300	—	600 "	12	600	300	6,400	"
ネギ	"	3	200	240	360	—	600 "	12	600	300	4,800	"
ポテト	"	5	200	400	600	—	1,000 "	55.6	1,000	55.6	4,560	"
みつ葉	"	2	50	40	60	—	100 "	38.5	100	38.5	3,360	"
わかめ	"	5	100+100 ^B	500	—	—	3袋 330 ^A ×3 ^B	1,200	1,000	1,200	3,600	"
納豆	袋	30	50	1,000	—	—	13 "	500	1,560	500	4,000	"
きんぴらごぼう	"	5	50	200	—	—	9 "	500	270	500	1,920	"
大根おろし	"	3	50	120	—	—	6 "	500	150	500	1,600	"
鮭茶漬	g	10	20	200	—	—	200 g	4.94	200	4.94	1,120	"
たらこ茶漬	"	10	20	200	—	—	200 "	4.78	200	4.78	956	"
梅干	"	10	20	200	—	—	200 "	4.64	200	4.64	960	"
あさり	"	10	25	240	—	—	250 "	10.0	240	10.0	2,150	"
とり肉	"	8	40	—	325	—	325 "		325		3,120	"
小計				4,040	2,245	—			7,445		45,100	
朝鮮漬	g	10	75	500	250	—			750		10,200	日本フリーズ
シバ漬	"	10	75	200	—	—	5袋	200	750	200	1,000	"
紅生姜	"	5	20	—	100	—	2 "	150	100	150	300	"

					B.C	A.B.C	C ₁	C ₂	単量	総量	単価	総額
長茄子漬	g	10	25	—	25 125	—	—	—		125		880 日本フリードフーズ
梅 干	"	10	175	50 500	125 1,250	—	—	5袋	350	1,750	300	1,500 "
海苔佃煮	"	15	125	825	655	—	—	12 "		1,440	282	3,390 "
葉唐辛子	"	15	75	25 120	50 240	—	—	3 "		360	200	600 "
汐吹昆布	"	10	50	25 —	25 500	—	—	1 "	500	500	900	900 "
野沢菜漬	"	5	100	—	100 500	—	—	—		500		4,500 "
タクアン	"	10	25	—	25 250	—	—	—		250		1,260 "
漬物・佃煮	"											
小 計				1,995	4,180	350	—			6,525		24,530
乾燥醤油	g	5	175	250	250	—	—	500 g		500		545 日本フリードフーズ
乾燥白味噌	"	7	175	612	612	—	—	1,225 "		1,224		1,512 "
乾燥わさび	袋			20	20	—	—	2袋	20	40	60	120 "
七味唐辛子	"			25	25	—	—	1 "	50	50	200	200
洋辛子	"			20	20	—	—	2 "	20	40	60	120
味の素	"			120	120	—	—	4 "	60	240	130	520
コンソメの素	箱			222	333	—	—	5箱	111	555	200	1,000
かつをぶし	袋			35	40	—	—	15袋	5	75	—	寄付 だしはこれ
にぼし	"			150	150	—	—	5 "	60	300	—	" サカモトにぼし
小 計				1,454	1,570					3,024		4,017
マッシュポテト	箱			400	800	—	—	6箱	200	1,200	210	1,200 雪印
切干大根	袋			450	—	—	—	3袋	150	450	100	300
板のり	"	2	125	100	100	70	—	9 "	30	270	360	3,240
干しいたけ	"			160	—	—	—	4 "	40	160	400	1,600

	箱	1/2	B.C	A.B.C	C ₁	C ₂	単位	総額	単価	総額
本豆腐	箱	1/2	50	—	—	—	25箱	66	100	2,500
ふりかけ各種	〃	3	180	—	—	—	18〃	30	200	3,600
干えび	〃		60	—	—	—	3〃	20	300	900
ビーフン	〃		150	—	—	—	1〃	150	160	160
ふ	〃		80	—	—	—	2〃	40	70	140
きな粉	〃		400	400	—	—	8〃	100	40	320
小計			2,100	3,190	70					14,020
ベジダブル	箱	1/3	50	—	—	—	17箱	160	220	3,740
チェダーチーズ	〃	1/8	60	—	1,200	—	8〃	160	220	1,760
ジャファイ	〃	1/3	50	—	—	—	16〃	130	180	2,880
ビスコ	〃	1/4	50	—	—	—	13〃	60	45	585
野菜クラッカー	〃	1/100	50	—	—	—	50〃	100	90	4,500
ストロベリーサンド	〃	1/2	60	—	5,400	—	30〃	180	180	5,400
オールレーズン	袋	1/2	20	—	—	1,400	10袋	140	110	1,100
ウェハース	〃	1/35	20	—	—	700	20〃	35	50	1,000
ナッツチョコレート	枚	1/50	25	—	—	—	25枚	50	80	2,000
クランチチョコレート	〃	1/50	25	—	—	—	25〃	50	70	1,750
ストロベリーチョコレート	〃	1/50	20	—	—	1,000	20〃	50	110	2,200
レーズンチョコレート	袋	1/3	6	—	2,580	—	19袋	130	160	3,040
コーラあめ	〃	1/10	50	480	—	—	4〃	120	100	400
チャオ	〃	1/10	50	500	—	—	5〃	100	140	700
ソフトビガー	〃	2/10	60	—	600	—	5〃	120	130	650
チェルシー	〃	2/10	20	—	—	200	4〃	50	90	360

D. Fババナ	2本 26	60	B. C	A. B. C	C ₁ 1,560	C ₂	120本	単量 18	総量 1,560	単価 25	総額 3,000	やままさ
D. Fあんず	4ケ 20	60	—	—	1,200	—	240ケ	5	1,200	8	1,920	〃
D. Fパイ	1ケ 40	20	—	—	—	800	20〃	40	800	50	1,000	〃
D. Fりんご	3ケ 40.5	20	—	—	—	810	60〃	13.5	810	10	600	〃
一口ヨーカン	1/6 70	110	—	50 3,500	60 4,200	—	18袋	420	7,700	270	4,860	
スティックチーズ	1 12	100	—	1,200	—	—	100本	12	1,200	25	2,500	
酢昆布	1 11	50	—	528	—	—	16箱	33	528	45	720	都一
ミニサラミ	2ケ 15	20	—	—	—	300	40匁	7.5	300	25	1,000	プリマ
ツナピコ	5ケ 12.5	50	—	625	—	—	250ケ	2.5	625	10	2,500	ナトリ
甘納豆	1/2 60	50	—	3,000	—	—	25袋	120	3,000	100	2,500	
でんろく豆ミックス	1/3 40	50	—	1,920	—	—	16〃	120	1,920	150	2,400	でん夫
小 計			2,500	22,333	16,740	5,210			46,783		55,065	
プリンミックス	1/3 26		320	320	—	—	8箱	80	640	100	800	ハウス
ぜんざい缶			1,720	1,720	—	—	8缶	430	3,440	250	2,000	井村
ポテトチップス			500	500	—	—	8箱	125	1,000	180	1,440	ハウス
ソフトサダゲンべい			640	640	—	—	8袋	160	1,280	135	1,080	亀田
ゼリー			800	800	—	—	8〃	200	1,600	150	1,200	
ガム			240	240	—	—	16コ	30	480	50	800	ロッテ
するめ			200	200	—	—	8枚	50	400	300	2,400	
珍味各種			800	800	—	—	16袋	100	1,600	300	3,000	
吉原殿中			760	760	—	—	8〃	190	1,520	270	2,160	
ホットケーキミックス			1,800	1,800	—	—	8箱	450	3,600	160	1,280	
小 計			7,780	7,780					15,560		16,160	

緑 茶	袋		B. C	A. B. C	C ₁	C ₂	5 袋	単 量	總 量	単 価	總 額 寄 付
ほうじ茶	"		200	300	—	—	5 "	100	500	—	"
麦 茶	"		200	300	—	—	5 "	100	500	—	"
T. B 紅茶	"		130	200	—	—	2 箱	165	330	—	"
T. B コーヒー	箱	2	—	—	300	200	2 箱	250	500	—	"
ペットシュガー	"	12	—	—	720	240	40パック	24	960	—	寄付
1/18	袋	8	—	3,070	570	200	28 袋	144	3,840	—	"
粉末ジュース	"		1,600	1,600	—	—	24 缶	133	3,200	—	"
スキムミルク	箱		300	600	—	—	3 箱	300	900	300	900 雪印
ココア	"		250	250	—	—	2 缶	250	500	—	寄付 森永
昆布茶	缶		360	360	—	—	4 "	180	720	230	920
小 計			3,040	6,630	1,590	640			11,950		1,820

〔現地購入品〕

品 名	単 位	1 食単量	延食総数	配 置 数 量			重 量	金 額(円)	摘 要
				B.C	A.B.C	C ₁			
小麦粉 スパゲッティ ビスケット クラッカー	kg			(g) 12,000	(g) —	(g) —	12 kg	R.S 1.2 P.S 14.4	
	缶			3,000	—	—	10 缶	3.0 30.0	
	袋			3,500	—	—	18 袋	4.4 79.2	
	〃			3,500	—	—	18 袋	4.0 72.0	
小 計				22,000			22,000	195.6	
ジャガイモ	kg			10,000	7,000	—	17 kg	1.4 23.8	
タマネギ	〃			10,000	4,000	—	14 〃	2.0 28.0	
青 菜	〃			5,000	2,000	—	7 〃	2.0 14.0	
ニンニク	〃			500	—	—	0.5 〃	2.25 3.6	

チリ	kg				B.C	A.B.C	C ₁	C ₂	単位	総量	単価	総額
ニンジン	"				300	—	—	—	0.3 kg	300	12.0	3.6
キュウリ	"				6,000	2,000	—	—	8 "	8,000	2.0	16.0
大根	"				2,000	—	—	—	2 "	2,000	1.5	3.0
生姜	"				2,000	—	—	—	4 "	4,000	1.0	4.0
小計	"				250	250	—	—	0.5 "	500	3.8	1.9
小計					36,050	17,250				53,300		98.8
食用油	缶				3,500	700	—	—	6 缶	4,200	9.75	58.5
砂糖	kg				15,000	1,000	—	—	25 kg	16,000	4.4	110.0
塩	"				3,000	3,000	—	—	6 "	6,000	0.75	4.5
コショウ	匁				500	—	—	—	0.5 "	500	12.5	6.25
ソース	kg				1,000	—	—	—	1.0 "	1,000	7.5	7.5
ケチャップ	瓶				1,000	—	—	—	1.0 "	1,000	7.5	7.5
カレー粉	kg				500	—	—	—	0.5 "	500	43.0	21.5
酢	瓶				600	600	—	—	1.2 "	1,200	5.5	11.0
マヨネーズ	"				600	300	—	—	0.9 "	900	7.5	11.0
小計					25,700	5,600				31,300		237.75
バター	缶				3,000	—	—	—	3 缶	3,000	10.75	32.25
蜂蜜	瓶				1,000	—	—	—	1 瓶	1,000	19.0	19.0
チーズ	kg				1,000	—	—	—	1 kg	1,000	19.0	19.0
ママレード	缶				2,000	—	—	—	2 缶	2,000	11.5	23.0
小計					7,000					7,000		93.25
粉ミルク	缶				1,000	—	—	—	1 缶	1,000	11.7	11.7
紅茶	kg				1,000	1,000	—	—	2 kg	2,000	18.65	37.3

ココア	kg				B. C	A. B. C	C ₁	C ₂	0.5 kg	単量	総量	単価	総額	
コーヒ-	瓶				500 200	— 200	—	—	— 2瓶		500 400	90.0 18.0	45.0 36.0	
小計					2,700	1,200					3,900		130.0	
ハム缶	缶				1,000	—	—	—	2缶	500	1,000	9.5	19.0	
ベーコン缶	"				800	—	—	—	2 "	400	800	7.75	15.5	
パイ缶	"				6,000	—	—	—	5 "	1,200	6,000	9.56	47.8	
オレンジ缶	"				6,000	—	—	—	5 "	1,200	6,000	9.56	47.8	
ピーチ缶	"				6,000	—	—	—	5 "	1,200	6,000	9.56	47.8	
コンデンスミルク	"				900	—	—	—	2 "	450	900	7.4	14.8	
小計					20,700						20,700		192.7	
くだもの(リンゴ)	kg				5,000	—	—	—	5 kg		5,000	4.0	20.0	
羊	頭				60,000	—	—	—	2頭	30,000	60,000	19.0	38.0	荷上重量には含まない
小計					65,000						65,000		58.0	

嗜好品リスト

(1 BOX内容)

(4 BOX合計)

80. HAJ KEDARNATH

品名	量	重量(g)	配置数量		総量	重量(g)		金額(円)		摘要
			BC	ABC		単量	総量	単価	総額	
インスタントめん	20袋	2,000	4,000	4,000	80袋	100	8,000	70	5,600	日高食品
もち		450	900	900	4袋	450	1,800	250	1,000	
納豆		280	560	560	9袋	120	1,120	500		
きんぴらごぼう		35	70	70	5袋	30	140	500		
大根おろし	1/2袋	15	30	30	2袋	30	500	500		"
かつおぶし		18.7	37.5	37.5	15袋	5	75	60	900	
マッシュポテト	1箱	200	400	400	4箱	200	800	210	840	雪印
ホットケーキミックス	2箱	900	1,800	1,800	8箱	450	3,600	160	1,200	森永
プリンミックス	2箱	160	320	320	8箱	80	640	100	800	ハウス
きな粉	2袋	200	400	400	8袋	100	800	40	320	柳屋
板のり		25	50	50	3袋	30	100	360	1,080	
吉原殿中	2袋	380	760	760	8袋	190	1,520	270	2,160	
粉末ジュース	4袋	800	1,600	1,600	16袋	200	3,200	190	3,040	
昆布茶	1缶	180	360	360	4缶	180	720	230	920	亀田丸
ポテトチップ	2箱	250	500	500	8箱	125	1,000	180	1,440	
ソフトサラダせんべい	2袋	320	640	640	8袋	160	1,280	135	1,080	
ゼリーミックス	2袋	400	800	800	8袋	200	1,600	150	1,200	
ガム	4個	120	240	240	16個	30	480	50	800	ロッテ
するめ	2枚	100	200	200	8枚	50	400	300	2,400	
珍味各種	4袋	400	800	800	16袋	100	1,600	300	4,800	
ぜんざい缶	2缶	860	1,720	1,720	8缶	430	3,440	250	2,000	
果物缶					10缶	1,200				現地購入
パイナップル					10缶	1,200				
オレンジ					10缶	1,200				
コンデンスミルク					2缶	450				
合計		8,093.7					32,815			

嗜好食品について

※自由時間に気楽に食べられる。

(数) 1 BOX — 20人日分とし
(量) 4 BOX — 80人日分用意する。

(配置) B・C 2 BOX
A B C 2 BOX
計 4 BOX

※缶づめ類は現地購入とし別に荷上げする。

レーション一覧表

80 HAJ KEDARNATE

	品名	単位	1食単量g	延食総数	総量	重量(g)		摘要
						単量	総重	
レーションA (A・B・C)	野菜クラッカー	箱	100 (1)	50	50箱	100	5,000	20個在庫あり マグロくんせい
	ビスコ	〃	15 (1/4)	〃	13 〃	60	780	
	甘納豆	袋	60 (1/2)	〃	25袋	120	3,000	
	チョコレート	枚	50 (1)	25	25枚	50	1,250	
	ナッツ クランチ	〃	50 (1)	〃	25 〃	50	1,250	
	ツナピコ	乞	12.5 (5ケ)	50	250ケ	25	625	
	キャンディ	袋	10 (14ケ)	〃	4袋	120	480	
	スティックチーズ	本	12 (1)	〃	50本	12	600	
								レーションA 50食
レーションB (A・B・C)	ビスケットベジダブル	箱	53 (1/3)	50	17箱	160	2,720	12枚入 1袋6コ入り 1袋3箱入り
	チョコビスケット	〃	43 (1/3)	〃	16 〃	130	2,080	
	でんろく豆	袋	40 (1/3)	〃	16袋	120	1,920	
	一口ようかん	〃	70 (1/6)	〃	8 〃	420	3,360	
	酢昆布	〃	11 (1/3)	〃	16 〃	33	528	
	あめ(チャオ)	〃	10	〃	5 〃	100	500	
	スティックチーズ	本	12 (1)	〃	50本	12	600	
								レーションB 50食
レーションC (C ₁)	クラッカー	箱	90 (1/2)	72	36箱	180	6,480	1箱2袋入り
	ビスケット	〃	20 (1/4)	〃	9 〃	160	6,440	
	一口ヨーカン	袋	70 (1/6)	〃	12袋	420	5,040	
	レーズンチョコ	〃	70 (1/6)	〃	24 〃	130	3,120	
	ドライフルーツ	〃	26 (2本)	〃	144本	18	2,592	
	バナナ アズ	〃	26 (4ケ)	〃	288ケ	5	1,440	
	あめ	〃	10 (2ケ)	〃	6袋	120	720	
								レーションC 72食
アタック レーション (C ₂)	オールレーズン	袋	70 (1/2)	24	12袋	140	1,650	1袋16枚
	ウエハース	〃	35 (1)	〃	24 〃	35	840	
	ストロベリーチョコ	枚	50 (1)	〃	24枚	50	1,200	
	ミニサラミ	乞	15 (2ケ)	〃	48ケ	7.5	360	
	ドライフルーツ	〃	40 (1ケ)	〃	24 〃	40	960	
	パイ リング	〃	40.5(3ケ)	〃	72 〃	13.5	972	
	あめ	箱	10 (2ケ)	〃	5箱	50	250	
								アタックレーション 24食

B C 献 立

() 内人数

Date	9月 20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	10月 1	2	3	4
Break	キャ ラ バン	B1① (25)	B1② (25)	B2 (13)	B3 (5)	B5 (5)	B2 (5)	B3 (5)	B5 (5)	B2 (5)	B3 (5)	B5 (5)	B2 (13)	B3 (25)	B5 (25)
Lunch		L2 (25)	L2 (25)	L3 (13)	L1 (5)	L2 (5)	L3 (5)	L1 (5)	L2 (5)	L3 (5)	L1 (5)	L2 (5)	L3 (13)	L1 (25)	キャ ラ バン
Dinner		D2① (25)	D2② (25)	D3 (13)	D1 (5)	D2① (5)	D3 (5)	D1 (5)	D2① (5)	D3 (5)	D1 (5)	D2① (5)	D3 (13)	D2① (25)	D2③ (25)

基 本 献 立

Breakfast (1~5)	材	料 (1人当りの分量)	総 分 量 (g)
B 1 米 飯 みそ汁 副食①②	現地米 乾燥みそ だしの素 乾燥わかめ 青菜 漬物 佃煮	150 10 2 1 30 30 30 ①いわしみりん干し 20 焼海苔 2 梅干 10 ②切り干し大根 10 ニンジン 0 しょうゆ 5 さとう 10 油 10 生卵 50	現地米90食 13,500 小麦粉 5,400 ダル 1,800 スパゲッティ 3,200 チリ 228 じゃがいも 3,200 にんじん 750 玉ねぎ 1,600 青菜 1,500 バター 1,900 ジャム 1,900 ベーコン缶 600 さとう 500 塩 オイル 900 生卵 1,250 ケチャップ 1,800
B 2 チャパティ (chapati) ダ ル (dall)	小麦粉 バター ジャム 豆(ダル) 唐辛子(チリ) 塩	150 25 25 50 3 佃煮 30 漬物 30 梅干 10 (ティーセット)	バター 1,900 ジャム 1,900 ベーコン缶 600 さとう 500 塩 オイル 900 生卵 1,250 ケチャップ 1,800
B 3 雑 炊 (shyakpa)	現地米 ジャガイモ 唐辛子(チリ) バター 塩, 調味料	150 80 3 25 佃煮 30 漬物 30 梅干 10 (ティーセット)	乾燥みそ 500 だしの素 100 乾わかめ 90 切り干し大根 250 みりん干し 500 焼海苔 50 梅干 650 固型スープ 200 ふ 40 しょうゆ 250 ふりかけ 佃煮 3,780 漬物 3,780
B 5 スパゲッティ コンソメスープ	スパゲッティ 玉ねぎ ベーコン缶 ケチャップ 食用油 塩, コショウ	80 40 15 45 10 固型スープ 5 乾わかめ 1 ふ 1 塩, コショウ (ティーセット)	固型スープ 200 ふ 40 しょうゆ 250 ふりかけ 佃煮 3,780 漬物 3,780
B1×50 B2×36 B3×40 B5×40			

BC食 166人日分 (実数134~142人日分)

※ 材料はだいたい同じものを使い、味つけ、調理法をかえる。

※ 9/23(夜)~10/1(朝)の期間は5人分の献立を作った。 $\left(\begin{matrix} 2人+\alpha \\ \text{ドクター} \\ \text{リエゾン} \end{matrix} \right) = 5$ 予備

チャパティ……うすやきパン

ダル………豆スープ(豆+油脂+トウガラシ)

煮えやすい豆は砕いてある。

シャクパ………ありあわせの材料(米、ジャガイモ等)を細かく切って煮こみ、塩、ニンニク、ギー、トウガラシで味つけする。

Dinner (1~3)	材 料 (1人当りの分量)				総 分 量 (g)	
D 1 カレーor シチュー (1回) (2回)	現地米	150	(カレー粉	20	現地米 166 食	24,900
	肉	30	(ニンニク		小麦粉	1,000
	じゃがいも	80	(シチューの素	25	肉	2,700
	玉ねぎ	40	(塩		じゃがいも	13,280
	にんじん	30			にんじん	4,980
	食用油	10			玉ねぎ	6,640
D 2 米 飯 みそ汁 副食①~③ (①肉野菜いため ②すきやき風煮こみ ③天ぷら 佃煮 30 漬物 30	現地米	150	①肉	30	青菜	3,450
	乾燥みそ	10	玉ねぎ	40	ハム缶	540
	だしの素	2	にんじん	30	グリーンピース缶	180
	じゃがいも	80	青菜	30	さとう	125
	乾わかめ	1	食用油	10	オイル	1,660
	③青菜	30	塩, コショウ, ニンニク		揚げ油	1,000
	玉ねぎ	40	②肉	30	マヨネーズ	360
	にんじん	30	玉ねぎ	40	グリーンピース	180
	干しいたけ	2	青菜	30		
	干しエビ	2	干しいたけ	2	カレールー	300
	小麦粉	40	ビーフン	5	シチュールー	375
	揚げ油, しょうゆ	10	しょうゆ	10	乾燥みそ	1,150
			さとう	5	乾燥わかめ	151
			にんじん	30	乾燥しょうゆ	500
					干しいたけ	100
D 3 チャーハン コンソメスープ ポテトサラダ	現地米	150	固型スープの素	5	干しえび	50
	ニンジン	30	乾わかめ	1	ビーフン	125
	玉ねぎ	40	ふ	1	ふ	36
	ハム缶	15	塩, コショウ		コンソメの素	180
	チャーハンの素	5	じゃがいも	80	チャーハンの素	180
	食用油	10	グリーンピース	5	だしの素	230
	塩, コショウ		マヨネーズ	10	佃煮	4,530
	佃煮	30	塩		漬物	4,530
	漬物	30	きゅうり	20	マヨネーズ	360
D1×15 D2×115 D3×36						
Lanch (1~3)	材 料				総 分 量 (g)	
L 1 ゆでじゃがいも 野菜スープ	じゃがいも	80			じゃがいも	3,200
	塩				小麦粉	5,400
	調味料				バター	900
	玉ねぎ	40			ジャム	900
L 2 ビスケット クラッカー 果 物	ビスケット	50			玉ねぎ	1,600
	クラッカー	50			ビスケット	3,250
	チーズ	15			クラッカー	975
	くだもの	100			チーズ	6,550
L 3 チャパティ	小麦粉	150			くだもの	
	バター	25				
	ジャム	25				
L1×40 L2×65 L3×36						

装 備

宇佐美博康 村上豊子
山形正己 高瀬敏久
熊谷 洋

初めてのヒマラヤ遠征であり、計画したことがどの程度通用するのか不安であった。個人装備についてはできるだけ軽量化をはかった。隊としての比重は少ないし、必ずしも全装備で登降する訳でもないで、それ程問題ではないが、高所における消耗を軽減する意味でもできる限り機能を落とさず軽量化に心がけた。また7,000 mに近い山を短期間で登ることから、装備の不調はあってはならないが、7,000 m以下の山では中古品でも十分通用することが報告されており、比較的短期間ということもあって実際充分であった。

この地域の気温は、高度 5,000 m から 6,000 m で、夕方 -10°C から -15°C くらいに、湿度は50%以下であると報告されている。この程度の気温は日本の冬山と同じということから、個人装備は新品、中古品を問わず、日本で使用中のものを使ったが、別に問題はなかった。特に高所における消耗を軽減するためにできるだけ軽量化をはかった。

- ◇ピッケル……ルートが主に雪面であるので、やや長めの方が良いとした。実際その通りであったし、荷上げにはスキーストックが重宝であった。
- ◇アイゼン……雪面をとらえる意味で爪の本数が多い方が良い。また雪のつきにくいものを、バンドは着脱の便利な固定式が良いとしたが別に問題はなかった。
- ◇靴……種々の報告によればシングルでも保温を工夫すれば使えるとされているが、安全性をみて二重靴とした。天候が非常に良く風もなかったので二重靴の必要性は感じなかった。
- ◇オーバー・シューズ……靴との関係が大きいですが、消耗する点からも底と前面に革を張った方が良い。二重靴ならオーバー・ゲッターでも良いが、防寒防湿上からもオーバー・

シューズが良いとした。靴の中でも述べたが天候が良かったので、正確な良否は言えない。

- ◇ゴーグル……雪盲防止上必携。クライマー・ゴーグルよりもスキー用の方が視野が広く曇りにくい点が良いが、壊れ易い点も考える必要がある。サングラスも必要である。
- ◇シュラフ……保温、かさの点から羽毛が良いが、長時間使用の点かさは、濡れてもかさが減らず乾きが早くて羽毛同様コンパクトなダクロン製も勝るとも劣らない。EXPで長時間たち湿気をおびて来ると、ダクロンの奪い合いということである。タクティックス上からシュラフの移動は少ないので、パーティー全体として綿の多いダクロンのものがあれば、それを持参することとした。常に羽毛服との併用を考えれば1.2 kg ぐらいでよいが、単独で考えるとやはり1.5 kg 程度の重量のものが欲しいとした。実際は特別に考慮はしなかったし不自由もなかった。HAJ デポ品のダクロン製のものを7個使用した。
- ◇シュラフ・カバー……防水および保温から必要としたが使用状況は半々であった。
- ◇ヘッドランプ……単三4本使用の軽量のもの。低温のため電池寿命が短くなるので、コード付きのものが良いが、断線の点からはコードレスが良い。コードレスの場合、保温カバーを付けると効果は多少ある。使用時以外は通電しないようにしておく。BCまでの電池をあらかじめ用意した。BC以上はアルカリ電池を共同装備で用意した。また単三電池はトランシーバーでも使用したので使い古しを使用した。
- ◇テントシューズ……二重靴のインナーを使用し、それで充分であった。
- ◇羽毛服……アタック用で使用するとしたが、アタック時ほとんどが日本の冬山と同じように防風衣であった。
- ◇防風衣……ダブルとし、ゴアテックス兼用の場合はシングルなので他の補助を！ということであったが、ゴアテックス着用の隊員も何人かいたし、別に問題はなかった。
- ◇高所帽……ツバが大きく雪がつきにくいものが望ましい。通常の日出帽ならヤッケのフ

ードを加工するか、ツバのあるものを選び、
外にナイロンを張るなど加工するとよい。

◇手袋……厚手(2), 薄手, 軍手, オーバーミ
トン。薄手として絹手袋は細かい作業でも素
手にならずにすみ, 好評。街用薄手のもの
でもよい。

◇ネックチーフ……絹の大判のものが防寒にも

よいし, 利用価値も高い。

◇テルモス……スポーツ店で販売しているテル
モスを, 底のフタを外し断熱材をつめて補
強した。

以下, 個人および共同装備については表を参
考して下さい。

〔支給装備一覧表〕

△印 規則による支給品

No	品 名	規 格 品 質	支 給 数 (1 人 当)		
			L. O.	H. P.	C.
1	ビッケル	バンド付	△1	1	
2	アイゼン	バンド付	△1	1	
3	登 山 靴	シングル	△1	1	1
4	ルックザック		△1	1	1
5	防 寒 服	羽毛上衣	△1	1	
6	防 風 服	ダブル上下	△1	1	1
7	カッターシャツ	毛	1	1	1
8	セーター	毛)(厚)	1	1	1
9	ズ ボ ン	ニッカー (毛)	1	1	1
10	アンダーシャツ	毛	1	1	1
11	ズボン下	毛	1	1	1
12	パ ン ツ	毛	1	1	1
13	“	アクリル	2	2	2
14	手 袋	毛 (厚)	2	2	1
15	“	軍 手	1	1	1
16	オーバーミトン	ナイロン	1	1	
17	ストッキング	毛	1	1	1
18	靴 下	毛 (厚)	2	2	2
19	“	薄	2	2	2
20	オーバーシューズ		1	1	
21	ロングスパッツ		△1	1	1
22	シュラフ	羽 毛	△1	1	1
23	マ ッ ト		△1	1	1
24	安全ベルト		1	1	
25	帽 子	日 よ け	1	1	1
26	目 出 帽		1	1	
27	ヘッドランプ	単3, 4本入り	1	1	1
28	テルモス		1	1	
29	水 筒		1	1	1
30	サングラス		1	1	1
31	ナ イ フ	5 徳	1	1	1
32	雨 具		1	1	1
33	キャラバンシューズ		1	1	1
34	石 け ん		1	1	1
35	歯ブラシセット		1	1	1
36	タ オ ル		2	2	2
37	整 理 袋		1	1	1
38	夏用テント		1		
39	食 器		2	2	2

個人装備Ⅰ（登山用品）

単位(g)

No	品 名	品 質	規格その他備考	数量	計重量
1	ピッケル Pickel		バンド付	1	0.9
2	アイゼン Crampon		バンド付+予備	1	1.0
3	安全ベルト Climbing Belt		カラビナ付	1	
	テープシュリンゲ		1 m	2	
	ザイル "			5	0.5
4	ヘッドランプ Head Lamp		単3, 4本入り	1	0.24
5	登山靴 Climbing Shoes		ダブル	1	3.0
6	アタックザック			1	1.0
	Attack Sack				—
7	防寒服 Cold-Proof Clothes	羽 毛	上衣	1	0.8
8	防風服, 上・下 Wind-Proof Clothes		ダブルがよい	1	0.8
9	高所帽 High Altitude Cap	毛	目出帽もよい	1	0.12
10	スカーフ Scarf	絹, 他	大判	1	0.03
11	手 袋 Gloves	毛	厚手	2	0.28
12	"	毛, 絹	薄手	1	0.05
13	"	綿, 化繊	軍手	1	0.05
14	オーバーミトン Over Mitton	ナイロン		1	0.14
15	靴 下 Stockings	毛		1	0.18
16	" Socks	毛		2	0.24
17	オーバーシューズ			1	0.4
	Shoes Covered - Shoes	ナイロン			—
18	ロングスパッツ Long Spats	"	ゴムバンド予備含む	1	0.2
19	サングラス Sun-Glass		又はゴーグル, ホルダー	1	0.05
20	シュラフ Sleeping Bag	羽 毛		1	1.5
21	シュラフカバー			1	0.3
	Sleeping Bag Cover				—
22	テントシューズ Tent Shoes	羽 毛		1	0.25
23	セーター Sweater	毛	厚手	1	0.8
24	カッターシャツ	毛		1	0.5
25	下 着 Under Wear	毛		1	0.4
26	ズボン下 Drawers	毛		1	0.3
27	パ ン ツ Pants	毛		1	0.1
28	ニッカズボン Climbiug Trou Sers	毛		1	0.7
29	テルモス Thermos		1ℓ程度	1	0.55
30	断熱マット Mat		個人用サイズ	1	0.25
31	ナ イ フ Kuife		スプーン, フォーク含む	1	0.1
32	磁 石 Compass			1	0.08
33	小 物 袋 Camping Bag		私物入れ, 整理	1	0.05
34	リップクリーム Lip Cream			1	0.02
35	日焼止クリーム Cream			1	0.05
36	ルックザック Ruck Sack			1	1.5
37	ホイッスル Whistle			1	0.02
			小 計		17.45

個人装備Ⅱ（キャラバン用品，登山用品小物を含む）

No.	品 名	備 考	数量	計重量
1	アプローチシューズ Shoes (ジョギング，キャラバンシューズ等)		1	1.0
2	帽 子 Hat	日よけ	1	0.1
3	ボロシャツ Summer Wear	半 袖	2	0.5
4	アンダーシャツ，Tシャツ Under Shirts		2	0.3
5	パ ン ツ Pants		2	0.1
6	靴 下 Socks		2	0.2
7	アプローチパンツ Trousers	長ズボン，ジーパン	1	0.6
8	洋 傘 Umbrella	折たたみ	1	0.6
9	雨 具 Rain Coat	上，下，ゴアなら防風兼用	1	0.7
10	水 筒 Water Bottl	1 ℓ	1	0.15
11	ノート，手帳，ペン Note, Book, Ballpen		1	0.1
12	洗面用具 Washing Tool	歯ブラシ，櫛，石けん カミソリ，歯磨き粉	1	0.3
13	タ オ ル Towel		2	0.15
14	個人用薬品 Medicine	常備薬	1	0.1
15	時 計 Watch	防 水	1	0.1
16	カメラ，スケッチ用具 Camera Sketch Tool	フィルム含む	1	1.0
17	ハンカチ，鼻紙 Hankerchief, tissue		1	0.1
18	サイフ，ドル入れ，パスポートケース		1	0.2
19	写 真 Your photograph	パスポートと同じもの	2	—
20	マッチ，ライター，小物袋		1	0.15
21	地 図 Map		1	0.05
22	食 器 Tableware		2	0.1
23	機内持込用バッグ（身のまわり品用）Bag （その他必要とする日用品）	ザック代用可	1	0.65
24	洗たくバサミ Clathestin pin		5	0.15
		小 計		7.40
		合 計 I + II		24.85

留 意 点

- 1) シャツ，パンツ，ソックス等はホテルで洗えるので2組で十分だった。
- 2) 1は日本より着用できるもので，ジョギングシューズ，バスケットシューズやキャラバンシューズ，軽登山靴等。
- 3) アルコール，タバコ，嗜好品は各自好み，B，C以上は禁酒禁煙。
- 4) 各自装備に記名。

<登攀用具>

No.	品名	規格	数量	テポ 使用	イン 購入	持参	重量 kg	価格 (千円)	荷上数量			備考
									B・C	A・B・C	C ₂	
1	メインザイル		6	1		5	2.0	70.0	6	6	6	
2	フィックスザイル	8mm×50m×8	400m			400m	1.5	60.0	400m	350m	350m	ABC-C ₁ 50m, C ₂ ドーム 150mドーム-2-150m
3	補助ロープ	6mm×200m	200m			—	—	—	200m	200m	200m	Rope
4	アイスハンマー		4	1		3	0.75	—	4	4	4	借用 Ice Hammer
5	スノーバー		50	9		41	0.3~ 0.5	46.5	50	50	48	30 テントベジ用50cm30本
6	スクリュ-ハーケン	30cm, 25cm, 20cm 各5	12	12		—	0.15	—	12	12	12	Ice Pitton
7	アイスハーケン	平型 20cm	3			3	0.15	—	3	3	3	借用 Ice Pitton
8	"	チャンネルor V型25cm	4	2		2	0.15	—	4	4	4	"
9	ロックハーケン		8	8		—	0.05	—	8	8	8	Rock Pitton
10	カラビナ		9	9		—	0.15	—	9	9	9	Karabina
11	標識用竹		80		80	—	0.1	—	80	80	80	現地調査 Flag Pole
12	" 布	三角布	50			50	1.0	1.0	50	50	50	Red Flag
13	" テープ					1	0.5	1.0	1	1	1	tape
14	アイゼン (スベア)		1組			1	0.75	—	1	1		借用 予備バンド付 Crampon
15	背負子		5	5		—	1.0	—	5	5	5	Pack Frame
16	アイゼンバンド		2組			2	0.2	1.0	2	2		予備 Crampon Band
17	スキー用ストック		10組			10	0.5	—	10	10	10	借用 Ski Stock
	小計						87.1	179.5	87.1 kg	87.1	86.1	54.9

<露營用具>

1	ドームテント	4~5人用冬用フライ付	6	5		1	4.5	50.0	6	6	6	3	借用 Winter Tent
2	スリーシーズンテント	ライトエスパー " スフライ付	3	1		2	3.0	—	3	3			Tent

＜通信、記録、電池＞

No.	品名	規格	数量	テープ 使用	イン 購入	持参	単量 kg	総量 kg	価格 (千円)	B・C・A・B・C・C ₁		備考	
										荷上	数		
1	トランジスタバー	3 W	1			1		3.0	—	1		} 借用	
2	"	500 mm W	3			3	1.0	3.0	—	3	3		
3	ラジオカセ		1			1		3.0	—	1	1		
4	電池	単 1	30			30		3.0		30	10		
5	"	単 3	150			150		3.0	7.5	150	60		
6	カセットテープ	90分用										Cassett tape	
7	シネカメラ											Camera	
8	フィルム	8 mm										Film	
9	"	35mm										"	
10	三脚											Tripod	
	小計							15.0	7.5	15.0 kg	14.3	9.1	3.6

＜燃料、容器具＞

1	石油コンロ	ホエーブス 625	6	5		1	1.2	7.2	9.8	6	6	3	Kerosen Stove
2	ガスコンロ	EPI ガス用PS型	5	3		2	0.6	3.0	8.0	5	5	5	Gas Stove
3	石油		75ℓ		75ℓ	—		67.5	4.5	75ℓ	75ℓ	25ℓ	2個は予備 5時/日×211人(ABC及びC ₁ ÷4.5時/ℓ×130%=76 ² -ℓ
4	ガスカートリッジ	冬期用EPI ガス	15個	3		12		3.5	7.9	15	15	15	C ₂ のみで使用 2ヶ×3台×2日+予備3-15
5	ス Islamabad	1箱40個入	12			12		1.4	5.4	12	12	4	211人÷4人/台×8ヶ×110%=464ヶ コンロ1台1日8個で計算 Solid Alcohol
6	石油タンク	10ℓ用	7		7	—		7.0	7.0	7	7		Fuel Bottle
7	"	2ℓ用	6		6	—		1.8	2.4	6	6	6	"
8	ジョウゴ	コーマーフィルターファンネル	8			8		0.3	4.1	8	8	8	石油ろ過フィルター付 Funnel
9	石油ポンプ	手おし式	2			2		0.1	1.0	2	2		Warper Pump

	小	計						91.8	50.1	91.8	35.0	6.5	
＜修理用具＞													
1	針金		5 m					1.0	0.4	5	1.5		Were
2	工具セット		1					1.6	4.0	1	1		tool set
3	錐		3							3	3		Hand Drill
4	テント修理具		2					0.3	3.2	2	1		Tant repair tool
5	ビニールテープ		8					0.4	0.4	8	2		Vinyl tape
6	接着剤		1					0.15	0.4	1	1		Adhesive
7	カッターナイフ		1					0.3	0.3	1	1		Cutter Knife
8	コンロ部品						1式	0.3	9.8	1式			Stove parts
	小	計						4.1	18.5	4.1	4.1	2.2	
＜衛生用品＞													
1	ロールペーパー		40					4.4	1.8	40	25	9	Toilet paper
2	蚊とり線香		3					0.2	0.9	3	3		Mosavito incense - coil
3	殺虫剤		1					0.1	0.3	1	1		Insecticide
4	洗剤		1					0.5	0.5	1	1		Cleaning material
	小	計						5.3	3.5	5.2	3.1	1.5	
										kg		0.3	
＜雑品＞													
1	辞典		2					0.6	—	2			Dictionary
2	保革油		6					1.2	1.8	6	6		Lether Oil
3	歌曲集		3					0.5	—	3	3		Song Book
4	旗		9	2				0.5	6.0	9	6	6	作 成 B C, 第1次, 第2次 計3組
5	裁縫用具		2					0.15	1.0	2	1	1	Flag Sewing Set

6	鍵	ナンバーキー	2				2	0.2	0.6	1	1						Lock & Key
7	スチールケース		1				1	2.0	4.0	1	1						Steel Box
8	めざまし時計		2				2	0.8	6.0	2	2						Alarm-clock
	小	計						6.0	19.4	6.0 kg	5.0	2.5					

＜事務用品＞

											B・C		C ₁	C ₂			
1	電卓	小型	1				1	0.8	3.0	1					先発		Calcuater
2	現金出納帳	大学ノート 小	2				2	0.4	0.3	2	2				先発, 本隊各1		Cash book
3	ノート	グラフ用紙 ノート1	3				3	0.5	0.5	3	1				先発1, 本隊2		Note book
4	便箋	エアメー ル 100枚	2				2	0.3	1.0	2					?		Letter Paper
5	封筒	エアメー ル 10枚	3				3			3							Envelope
6	ビニールファイル	B5用	2				2	0.3	0.7	2	2						Vinyl fil
7	サインペン	赤・黒各10	6				6	0.2	1.0	6	6						Felt pen
8	マジックインキ		9				9	0.3	0.9	9	9						"
9	集計用紙		1				1	0.2	0.1	1	1						Graph paper
10	紙ばさみ		2				2	0.4	0.4	2	2						Clip
11	ダブルクリップ		20				20	0.2	0.6	20	20						Double clip
12	ホッチキス		2				2	0.4	0.6	2	2				先発, 本隊各1		Stapler
13	" 針		2				2	0.3	0.5	2	2				"		Staples
14	セロテープ	小	1				1	0.02	0.2	1	1						Cello tape
15	消ゴム		2				2	0.02	0.1	2	2				先発, 本隊各1		Eraser
16	定規	30cm	1				1	0.1	0.1	1	1						Scale
17	カーボン紙		5				5	0.1	0.1	5	5						Carbon paper

18	ビニール書類袋	B 5が入るもの	4			4	0.1	0.1	4	4		Vinyl Bag
	小計						4.6	10.1	4.6 kg	2.9 kg		

<梱包材料>

1	カートンボックス	430×470×270—	25			25	1.1	27.5	20.0	25	25	8	Carton Box
2	"	886×485×295	15			15	1.7	25.5	15.0	15	8		2ヶはアナカンに使用、他は現地調達品 " の梱包 ダム帰路キャパバン用
3	梱包布		2巻			2	}						Package Cloth
4	ポリエチレンヒルム		50			50							Polyethylene Film
5	ポリエチレン袋 (大)	厚 0.05 mm 40×55cm	150			150							Polyethylene Bag (large)
6	ポリエチレン袋 (中)	0.03 mm 30×40cm	1			1							Polyethylene Bag (middle)
7	ダンパバンド	15mm巾×500 m	350			350	}						Number Card
8	" 綿具		10巻			10							
9	番号札		1			1		60.0		60kg	47	10	Vinyl Band
10	ビニール紐												
11	ハッポウスチロール												
	小計												

<炊事用具>

1	コンロ台		12			12	0.2	—	—	12	12	12	3	作製	Plate
2	圧力鍋		5	3	2	—	7.5	8.0	5	5	5	5			Pressure Cooker
3	コップフェル		9	7		2	9.0	—	9	9	9	6	3	2組借用	Coffer
4	バケツ	布	4		4	—	4.0	8.0	4	4	4				Bucket
5	菜バシ		8組			8	0.8	1.6	8	8	8				Chop Sticks
6	フライ返し		1	1		—	0.1	0.3	1	1	1				Fry Upsetter
7	しゃもじ	木製	9			9	0.9	1.8	9	9	9				Large Wooden Spoon

8	お 玉 (大)		7					0.7	1.8	7	7	3	Serving Spoon
9	” (小)		5					0.5	1.0	5	5	3	”
10	包 丁		2					1.0	2.0	2	2		Kitchen Knife
11	缶 切		3					0.3	0.6	3	3		Can Opener
12	茶こし		6					0.6	0.6	6	6	6	Tea Filter
13	タワシ	ナイロン	7					0.7	1.4	7	7	7	Scrubbing Brush
14	マッチ	広告用中型	200箱					1.0	2.0	200	130	50	Match
15	サランラップ		2					0.2	0.2	2	2		Saran lap
16	クッキングオイル		1					0.2	0.3	1	1		Alumi Foil
17	ライター	100円ライター	10					1.0	1.0	10	10		Lighter
18	ポリ袋	(大) 黒	100					0.5	1.0	100	100	60	Poly Bag Vinyl Bag
19	ポリタン	ウォーターバブグ	2					2.5	5.0	2	2	2	Poly Tank
20	鍋		6	6				12.0	12.0	6	6		Cooker
	小 計							43.7	48.6	43.7 kg	43.7	18.9	
	総 計							394.3	394.1	(燃料費 17.8	43.7		各レシーションに入れる プレゼント用 水 用 Cooker

(注) 。酸素ボンベは医療品とみて共同装備には含まず
。リエゾン支給品は未確定のため上表には含まず

KEDARNATH DOME EXPEDITION 1980

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

By Yoko Kimura

The Himalayan Association of Japan(HAJ) was founded in 1967, and now has over 900 members throughout Japan sharing a common interest in the Himalayan region. The particular interests of HAJ members are varied, some are interested in mountain climbing others in Botany, Zoology, race, religion, history, and the geography of the Himalayan region.

The activities sponsored by HAJ cover a wide range of fields. In the area of climbing HAJ has sponsored over 10 expeditions, including climbs to the summit of Batura (7,710m), Nun (7,135m), and Trisul (7,120m) among others.

For the purpose of familiarizing beginning climbers with high altitude climbing techniques, HAJ sends one expedition each year to the Indian Himalayas. These expeditions are sponsored by a branch organization of HAJ, "The Himalayan Mountaineering Institute of HAJ", and are usually scheduled during the post monsoon season. These expeditions are usually conducted in the mountains between altitudes of 6500m and 7000m.

In 1980 The Himalayan Mountaineering Institute sponsored a climb to the top of the Kedarnath Dome (6831m) located at the head of the Kirti Bamak glacier in the Garhwal Himalaya. On October 3, 1980 3 members of the team reached the summit of the Kedarnath Dome. On the following day 16 members of the same party joined them in reaching the summit.

Our expedition consisted of a leader, 2 instructors, and 17 members. The following are the names of the participants in our expedition.

Yoshio Ogata (Leader 32), Noboru Yamada (Instructor 30)

Fuji Tsunoda (Instructor 28), Hiromi Ohno (37)

Nobuhiro Shingo (36), Noriharu Iida (37)

Kijuro Endo (33), Hiroyasu Usami (30)

Hisao Seki (29), Tosihisa Takase (29)

Harue Kikuchi (29, woman), Hiroyuki Nobata (27)

Masami Yamagata (25), Yoko Kimura (25, woman)

Seiiti Maru (25), Hiroshi Kumagaya (24)

Mitsuaki Saito (23), Toyoko Murakami (23, woman)

Akio Fujioka (23), Akihiro Kitade (22)

Our liaison officer, appointed by the Indian government, was Rajiv Raji (27).

The advance party made up of Ogata and Kitade left Japan on September 4th, and joined Seki who had already been in India on a previous expedition. They waited in Delhi for four days until they had arranged for the delivery of sufficient food and equipment by the agency of Cox and Kings.

On the 9th, the advance party traveled 15 hours by bus to Uttarkashi, arriving about 10p.m.



In Uttarkashi, they had expected to find their porters waiting for them, but due to a landslide between Gangani and Dabrani the porters had been delayed. The next day, September 10th, Ogata, Seki, Raji (liaison officer), and the porter's agent, Garhwal Mandal Vikas' Nigam, traveled by bus to Bukhi to investigate why the porters were late in arriving. On their way they encountered a group of porters and 2 other expeditions (Nehru Institute of Mountaineering, India, and Meguro Rozan, Japan) who were enroute to Uttarkashi. These groups verified that our porters were indeed on their way to Uttarkashi, and so the advance party returned to Uttarkashi to await the porter's arrival and to prepare for their departure the next day.

On September 12th, the advance party accompanied by the porters traveled by bus to Gangani where a hot spring was located. From Gangani they walked about an hour until arriving at Dabrani. In Dabrani they boarded a bus and traveled about 55km to Lanka. On the 13th, they were forced to walk from Lanka to Bhairon Ghatti because of damage caused to the road by a landslide. From Bhairon Ghatti they traveled about thirty minutes by bus to Gangotri, a Hindu holy place. They continued on from Gangotri until they reached Chirbas where they stopped for the night.

On the 14th, they proceeded 7km to the advance base camp of the Nehru Institute of Mountaineering in Gaumukh. They spent the night in the Nehru Institute's big tent. The next day they reached their own base camp which had previously been used by Tokyo University's Shivling Expedition, and deposited their equipment there.

On the 15th, they established an Advance Base Camp on the side of a moraine located on the left side of the Kirti Bamak glacier, and began to transport their equipment to the new Advance Base Camp. Between their Base and Advance Base camp they were frightened by the danger of falling rock while traversing the moraine. They shifted their Base camp in 40 minutes to a place across Tapovan.

On the 13th, the main party of our expedition left Japan and arrived at Bhojbas on the 18th. The main party spent the day after their arrival in Bhojbas, climbing to and from the Base Camp preparing themselves for more strenuous climbing at higher altitudes. On the following day, the 20th, all members were forced to remain in their tents by a heavy snowfall.

On the 22th, the main party began to ferry their loads from the Base to Advance Base Camp. These members experienced similar difficulties traversing the moraine, especially after the fresh snowfall. Two members, Ogata and Seki remained at the Advance Base Camp, while the others returned to the Base Camp for the night. Two members were forced to return to Bhojbas to recover from illness.

On the 23th, Ogata and Seki set out from the Advance Base Camp to find a suitable place for establishing our next camp, Camp I. Ogata and Seki crossed the Kirti Bamak glacier and



reached the ridge of the Kedarnath Dome. There they were forced to make their route through deep snow, climbing up to an altitude of 5415m. After depositing their loads at that point, they descended to the Advance Base Camp where they joined 10 other members of our party.

On the 24th, members set out from the Advance Base Camp and established Camp 1 at an altitude of 5550m. 11 of these members returned to the Advance Base Camp that night for rest and better acclimatization to the high altitude. On the 25th, Yamada, Shingo, Seki, Takase, Fujioka, remained at Camp 1.

On the next day, these five members who spent the night at Camp 1, Yamada, Shingo, Seki, Takase, and Fujioka left Camp 1 about 6:am to look for a suitable place for establishing Camp 2. They climbed slowly through deep snow up the gentle slopes of the Dome with the aid of a 100m rope attached to crevasses in the snow wall. They selected a spot for Camp 2 on the Dome at an altitude of about 6280m, and returned to Camp 1 where they were joined by 10 other members who had arrived from the Advance Base Camp the same day.

On the 27th, 5 members returned to the Advance Base Camp to rest for the attack on the summit. The 10 remaining members at Camp 1 ferried the rest of the equipment to Camp 2 and had their first experiences at altitudes of about 6330m and they returned to Camp 1 for the night. 5 other members who were not sufficiently acclimated climbed to Camp 1.

On the 28th, 9 members descended from Camp 1 to the Advance Base Camp for rest. The five other members who were late for acclimatization had a experience of an altitude of Camp 2 and descended to the Advance Base Camp.

It was the first time all the members had rested in over a week, and only the second time that all the members of our expedition had gathered to spend the night together in the same camp.

On the 29th, 5 of our members, Yamada, Shingo, Seki, Takase, and Fujioka, began their climb to the main peak of Kedarnath after spending the night at Camp 1. The other 15 members of our expedition remained at the Advance Base Camp resting for their attack on the summit. On the 30th, the 5 members who had spent the night at Camp 1 advanced to Camp 2 where they stayed overnight. The 15 members who had remained at the Advance Base Camp on the 29th, advanced to Camp 1 and spent the night there.

October 1 was scheduled as the attack day for the 5 members at Camp 2. Due to illness Fujioka was forced to give up his attack on the summit, and remained at Camp 2 with Yamada. The other 3 members, Shingo, Seki, and Takase set out from Camp 2 at 3-30a.m. for their attack on the summit, but were soon halted by extremely cold temperatures. In the cold temperatures Takase had become ill and had no choice but to return to Camp 2. After returning to Camp 2, Yamada set out to join Shingo and Seki. At about 9-10a.m. they reached the



summit of the Dome.

The route from the Dome to the main peak of Kedarnath, was especially long and treacherous. At one point there was a col in the path. Moreover, it was already too late to attempt an attack on the Kedarnath Peak and so with reluctance they decided to give up their attack on the main peak. Seki returned to Camp 1 on skis while Yamada and Shingo returned on foot.

In Camp 2 Seki, Yamada, and Shingo joined. Takase and Fujioka got along with the remaining 15 members who had climbed up from the Advance Base Camp to Camp 2 on the same day. On the way up to Camp 2 Iida had become ill and returned to the Advance Base Camp.

On October 2nd, we started for the Dome summit after spending a final night at Camp 2. Yamada remained alone in Camp 2 as a support member. Using crampons we continued climbing in at an altitude over 6000m. After about three and a half hours we reached the summit of the Dome. From the summit we were treated to a spectacular view of the landscape below. To the North West we could see the Bhagirathi group of peaks. In other directions we were able to see the peaks of Shivling and Sri Lailash. After finishing our ceremony on the summit, we returned immediately to Camp 2 and continued down to Camp 1. Seven members, exhausted from their climb to the summit, remained at Camp 1 for the night. The other members of our expedition returned to the Advance Base Camp.

On October 3th, we withdrew from Base Camp. The next day we began our return trip to Delhi. On October 8th we returned to the starting point of our trip, Delhi. We remained in Delhi for two days before returning to Japan on October 11th. A few other members of our group decided to remain, participating in other expedition into Nepal, and taking a trip in Pakistan, and India.

Our expedition lasted only 28 days, but it will never fade from our memories. We believe adventure has no end, for the end of one adventure only marks the beginning of another.

January, 1981

遠征を振り返って



ガンゴリ寺院

仲間たちへ！

角 田 不 二

春のカンチェンジュンガ偵察から帰国してしばらくしたある晩のこと、京都の内田氏から電話がかかってきた。「どうもケダルナートに行けそうもない」とのことであった。一瞬、ある予感があったが、翌朝協会事務局長の山森氏に事を告げると、すぐに忘れてしまった。正直なところ、その頃の私にとってケダルナートは意識の片隅にもなかった。カンチェンジュンガの装備集荷のための活動に奔走していた、加えて通常の協会事務、機関誌編集、年報編集をかかえてそれどころではなかったのである。山といえはカンチェンジュンガが意識の大半を占め、そのあとに自分が登攀隊長として計画しているガンガプルナがあるくらいであった。が、数日後に“ある一瞬の予感”は当たってしまった。

ケダルナート隊への参加が確定した時、すでに出発まで1カ月を切っていた。隊荷梱包の直前だったように思う。急遽尾形、山田両氏と打ち合せを行なったが、どうもあまり気分がのらなかった。正直云って行きたくなかった。私にとってはカンチェンジュンガのほうが大切だったのである。装備関係で世話になった岳界のある先輩に「今頃、日本を留守にするなんて、どういうこと?!」と云われたりもした。が、HAJという組織の運営側の末席を汚している身としては、勝手なことは云えなかった。

9月13日、義務感だけで成田をたった。飛行機の中で壇一雄の「夕日と拳銃」を読みふけていた。これがむやみやたらと痛快だったことだけが奇妙に印象に残っている。

1週間後の9月20日、私はガンゴトリ氷河左岸のベースキャンプにいた。たった1週間でまったく予想しなかった変化が起っていた。隊にはない。私の内部においてである。この登山が楽しいのである。こんなに和気あいあいとした登山隊が今までにあったらうか？ もちろん苦労もある。心配事も次から次へと起る。しかし、いつもそれを上まわる笑い声が絶えなかつ

た。隊の中には実にいろいろな人がいた。訳のわからぬデタラメ英語とゼスチャーでリエゾンをからかってばかりいる男、タイツの上に短パンツをはいて歩く妙なファッションセンスの男、左足にオーバーシューズ、右足にロングスパッツというさらに狂ったファッションの男、仕草が妙に女っぽくて、うしろにいたかと思うと知らないうちに前にいたりする変幻自在の魔女みたいな男（彼は後にラホールで男に追いまわされる）、暇さえあればスルメばかりかじっている男、4,300メートルでマラソン競争をする酔狂者、ウ○コなどと汚ない言葉を連発しては笑いころげている女の子、歩きながらハーモニカを吹く男、現地のダンスをすぐに真似しては評判をとる男、英語訛り(?)の妙な日本語を話し、5分前に別れたばかりでも顔が見えると必ず「元気ですかあー？」などと言うヘンな女の子……書き始めたらキリがない。こういうところではクソマジメな顔をしているほうがバカをみる。もともととりたててユーモアッ気のあるほうでもない私がいつの間にか巻き込まれていたのである。

「やはりヒマラヤっていいなあー」と、これはいつも感じることである。一般的な風土とは極端にかけ離れた厳しい自然環境の中で、長期間多勢の人間がひとつの目標のために力を合わせる。これがどんなにすばらしいことであるか。言葉にしてみるとまったくありふれてしまうが、現実にはそのような“場”というものが、ヒマラヤ以外のどこにあるのか？ 少なくとも一般社会人にとっては滅多にあることではない。だからこそ、私は飽きもせずヒマラヤに通いつづけているのである。しかし、今回だけは出かける時少しも楽しくなかった。にもかかわらず、終ってみるとやはり「来てよかった」とつくづく思った。帰りの飛行機の中ではもう本に読みふけることもなかった。帰国すればカンチェンジュンガの準備で多忙を極めることはわかりきっていた。でもケダルナートは間違いなく“ひとときの充実した楽しい時間”であった。単なる義務と割り切れるものでは決してない。

人間、あくせくするばかりが能ではあるまい。クソマジメに働けばかりが能でもあるまい。楽しく余裕をもって生きたいものである。そして豪気に構えていたいものである。少々のはころ

びくらいあってもいいではないか。そう、「夕日と拳銃」の主人公のように野太くロマンを追ってこそ人生であろう。

もうすぐ私はカンチェンジュンガへ出かけようとしている。すぐそのあとにガンガプルナがあるため、今度は長い旅になる。が、ケダルナートの楽しい仲間たちが壮行会に駆けつけてくれる。嬉しい限りである。すばらしい仲間たちに乾杯！

～1981年正月 甲州にて～

なんとなくうすい 酸素の体験

宇佐美 博 康

富士山に登った時のことである。顔が少しほてる様で頭の中では鐘が鳴っていた。2回共こんなであったから、高度に強いとは思えず、ヒマラヤへ行くにしても不安であった。

頭の痛いこと

登山活動中もし我が隊長が頭を痛めていたとするなら、その種はリエちゃん¹⁾がグブタ君²⁾にそそのかされて勝手に上へ上へと登って行くことであったと思う。しかし多くの隊員にとって頭痛の種はなんとなくうすい酸素であったと思う。その1人として頭の痛い日々であった。

インドへ来てから暑さには閉口したが、体調も良く、もの皆珍しい遠足気分の毎日であった。そしていよいよガンゴトリ氷河の番人、バギラティ連峰が姿を現わした日、3,500メートル³⁾位から急に頭痛が始まったのである。この日はボジュバサ⁴⁾に泊り、このあとBC→ABC→C₁→C₂と1回ずつ往復後順次上のキャンプで泊るというパターンであったが、初めての高度を経験する往復の日には例外なく頭痛が起き、次に登る時には大体消失していた。一步一步が頭に響くが、休んでいると気持が良くなって眠ってしまう。この心地良さときたら、1度やったらやめられない。

ABCではかぜ気味で熱が出てC₁往復を1日見合わせたか、翌日には熱も下がって行動がで

きた。いつもならかぜ熱では2、3日は熱が下がりず動きたくなくなることを考えると、これも高度の影響だったと言えよう。始めてC₂へ上がった時はチェンストーク呼吸となつて、下る準備がなかなかできず自分でも動作が極めて緩慢なのがわかった。6,000メートルというののは、一つの厳然たる壁だと痛感した。しかし2回目に登った時には頭痛もさ程感じなかった。登頂後の下山では、C₂→C₁と下るに従って楽になっていくのが感じられ、グリセードで下れたのも面白かった。登山期間中には、恐れていたおたふくダヌキ⁵⁾になってしまった。この外観上の腎臓病の症状は15年以上前だが1度経験しているので、行く前から不安の種であったが、結局は全く問題なくほっとしている。

夢

夢にまで見た（実際は見なかった）ヒマラヤの山々が現実のものとなったとき、日頃夢⁶⁾を見ることなど殆んどないのに、BC・ABCで2回も見たのである。その内容たるや極めてあと味の悪い、後ろ髪を引かれる様な、例えて言うなら登頂しての下山中に今のは頂上ではなかったと知らされる様なケースの夢である。いままで見た印象は、恐い夢、意味のわからない夢ばかりで、今回の様なあと味の悪い夢を見たのは全く希といえる。その原因には思い当たることがあるが、あまりのあと味の悪さにその時話してみると、2人程やはり良くない夢を見たと言っていた。加えて、インドでの活動を終えてからカラコルムに行くと、そこでも4,000メートル付近の高度で同様の夢を1度見たのである。4,000メートル～5,000メートルの間以外では夢は1度も見なかったことを考えると、この限られた高度において日頃全く見ない様な夢を見たことになる。この程度の高度による影響として、「夢」というのは見たことがない。しかし、同じキャンプで他のメンバーも見たことを考え合わせると、低酸素の影響がはっきり出てくるこの辺の高度では、不快な夢を見やすいのではないだろうか。

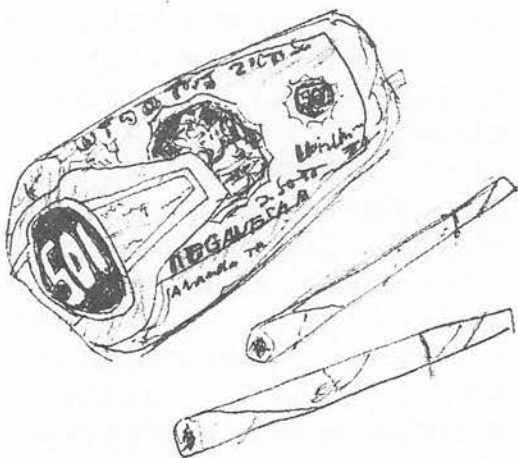
夢の原因として、外的あるいは内的刺激がある。例えば内臓への圧迫などが夢の原因となることである。高度順応できていない状態では、睡眠中枢⁷⁾が低酸素の影響を受けて不快な夢を

見やすくなるのではないか。データに乏しく推測の域を出ないが、同じ様な夢を見た人が意外とあるのではないかと考えてみた。

とここまで書いたとき、今まで目につかなかった『高所医学』⁸⁾を見たところ、夢については簡単ながら3箇所に見られ、「不快な夢」「悪夢にうなされる」「高所順応できていない間は、夢がどうしても幻想的で怪奇なものになりやすい」等の記述があった。これはうかつ、とは思ってみたものの、ここまできては紙数を満たせたことを喜ぶのみ。

山を前にして頭痛と悪夢というのはいただけない。今度はせめて日本で目標の山を夢見、楽しい夢を氷河にむすびたいと思う昨今である。

- 1) 我が隊のL・O, ラジーブ・ラジ。
- 2) BCまでのキャラバン世話を担当した旅行エージェントの社員。
- 3) ガンゴトリ参りの道には高度標識が建ててある。外気酸素分圧は地上の大体20%減。
- 4) 約3,900メートル。
- 5) 日焼けと浮腫の出た状態をいう。
- 6) 心理学的には睡眠中における思考などを中心とする心的活動を覚醒した後に想起したものを言う。
- 7) 夢と関係が深い。
- 8) マイクル・ウォード著、山と溪谷社刊。



「ピリー 501」インドの安タバコ

私のケダルナート遠征

遠 藤 喜重郎

1980年10月2日午前4時起床。

ここは6,280mの高度をもつC₂キャンプ。今日は、ケダルナートドームアタックの日です。寒いが風もなくアタックには絶好日になりそうだ。午前6時C₂キャンプを出発した。C₂よりの登りは冬富士登山と言った感じで、途中心配された高度障害も現われず、午前10時頃ゲタルナートドームに登頂した。ドームの高さは6,831mと私の登山歴では最高点の高さであった。

1980年某山岳雑誌を見ると、インドヒマラヤゲタルナート隊員募集の記事が目に入った。以前から機会があったらヒマラヤへ行ってみたくと単純な発想から、早速、日本ヒマラヤ協会へ連絡し、詳しい資料等を取りよせた。そして3月頃、ヒマラヤ協会の事務所へゲタルナート参加者が遠く北海道、九州その他から女性4人を含む20名近くが集まった。ここで遠征についての説明等があり、一応隊員の任務分担が決まった。私は記録、梱包係となる。5月に入り富士山で合宿を行ったが、20名の隊員なので、名前と顔が一致しなくて手まどった。私は正直なところ全員の名前を覚えたのが、成田出発間際であった。その後立川航空自衛隊での低圧実験、何度かの打合せ、梱包等も終え、1980年9月13日成田空港より一路ニューデリーに向けて出発した。ニューデリー空港には現地時間午前2時頃つく。初めてのインドは蒸し暑く、深夜でも空港の周りには人、人で異様な雰囲気であった。ホテルに着き、ほとんど眠ることもなく朝を迎えた。朝から日射しが強くおそらく30℃以上あったろうか。

ホテルよりCOX社のバスでウッタルカシ・ガンガニと3日間バスの旅となる(途中一部約14km歩く)。その間の印象は、人々は何となくのんびりしていて、日本とは対照的。牛が我が物顔で道路を歩いている。交通規制適当。年代物の車が多い事。極端に甘い食物等で目をみはるものばかりであった。

ガンガニからはいよいよ歩きの領域となり、ガンガニよりポータと一緒にいる。ポータはネパール人とかで、年配からまだ10代の少年もいた。彼らは25kgの荷物、私は小さなザック1つ。いろいろ複雑な気持ちになったが、これが遠征なのだとなりに割り切る。

ここでは何故か面白い事にポータ達はしゃがんで小便をする。ポータは当然男です。キャラバンの道のりは山道、柴道と言った感じで300m以上の所もあった。キャラバン中の食事は、COX社より配給された毎日同じメニューのパン、ゆでたジャガイモ、チーズの昼食弁当と、夜はチャパティー又はカレーライスといったところ。

9月20日になってBCキャンプ入りをする。BCは約4,350mの高さで、そろそろ高度障害が現われたか頭痛がしたが一晩で痛みはとれた。ABCキャンプ4,860mからC₁キャンプ5,550mの荷上げの時は倦怠期にみまわれ、膝までのラッセルも一歩進んでは休み、その繰り返しで我ながらイヤになった。ましてC₁からC₂までの高度経験の時などは倦怠と頭痛で、これが高所登山なのかと直接体で感じた。

C₂よりC₁まで、C₁よりABCと往復し、一応自分では高度順化した事と思い、再度10月2日ゲタルナートドームアタックの為C₂キャンプ入りし、明日の天気を気にしながらシュラフの中に入る。

ヒマラヤ登山の思い出

大野 廣 美

眩いばかりの星降るインドに降りたとき、とうとうここまでやってきたという実感が心の底から湧きあがり、思わず強く手を握りしめてしまった。そのためか、第1夜のインペリアル・ホテルでは興奮のあまり、よく寝つかれない一夜を過した。

思えば、よくここまで来たというのが実感であった。

高校時代にハイキング程度の山登りを始め、それから今までどれひとつとっても、先鋭的に

にほど遠い中味に乏しい登山の味わいかたであった。それがヒマラヤにまで足を運ぶとは……。

自分の今までの生き方を振り返ってみると、ひとつのことにしか夢になれない。またひとつの情熱を傾けるもの、ささえないと生きられない、とりとめた思想のない貧乏性の人間である。それゆえに、今まで10年ものあいだ組合の役員を全うし、さあこれから自由に自分の趣味を適当にエンジョイしながら気楽に生活ができると、組合時代の忙しさを否定的にみてホッとしたものである。しかし日一日と過ぎて行くと、何もする気のない無気力で安穩とした生活が自分の本分ではないことに気付いたのであった。

永き緊張感から解放され、またそのことから生きる充実感の一本の柱を失い、次なる生きる目標めいた糧が必要なのであった。そこで、「今、やっておかなければできないことをやろう」と決心し、学生時代に経験した登山を再び始めよう、そしてかねてから夢であったヨーロッパアルプスに行こうと決意し、その資料を調べはじめたのである。しかし進むにつれて、ヨーロッパならこれから先でもでかけられるし、これから先でも登ることができる。それなら思いきって、このチャンスを逃したらおそらく一生登れないだろうと判断したヒマラヤに行こうと思ったのである。

しかし、学生時代に平凡な登山に集中していた自分に、また、ヒマラヤを目指す知人のあてのない自分に、登山隊に参加する場もなく、さりとて、登山隊を組織する力量など皆無である。そこでヒマラヤ協会のケダルナート登山隊に応募したのである。

しかし、少しも障害や不安がなかったわけではない。38歳という年齢から、体力の衰えは常日頃自覚しているし、事実合同合宿の富士において、前夜の不摂生（飲みすぎ）がたたって8合5尺でバテバテになった。また一方、自信もないわけではなかった。多少なりともあったからチャレンジしてみようと思ったのである。職場では野球部に籍を置き、火木土に各2時間あまりの練習を行ない、20歳近くも年齢の違う部員に一歩もひけをとらないし、79年の職場運動会では1,500mに6位に入賞し、まだまだやれると自負していたのである。だが富士において

も情けないくらいにバテバテになり、それからトレーニングは、朝のマラソンに夕方もつけ加えた。

この私のヒマラヤ行きは、職場から職場に伝わり、逢う人ごとに、「大変な山に行くんですって」「カンパを集めるから」「壮行会を盛大にやろう」と声をかけられ、ヒョルことが安易に許されなくなり、だんだん窮地に追いこまれ、引くに引けなくなっていった。そして壮行会では、「登頂できなければ、ほとぼりが醒めるまで、2,3年日本に帰ってきませんので!!」と冗談であったが挨拶をした。また家では黙認しながら内心困った息子だと思っていた母に「あまり危険なことをするのではない。子供も2人いて一人身ではないんだから」と言われ、「わかっているよ! 前の方には行かず、さりとて落ちこぼれない位置にいるから!」と言って家をでた。そして今6,831mのピークにいる。

あの高山病で悩まされたことも、息苦しく夜も眠れず荷上げも満足にできず、常に隊でしんがりを務め、苦しくなりみんなから遅れ一人とり残されるたびに「登頂できなくても良いのだ。ここまで来たことで満足だ」と自分に言い聞かせたことも、全て6,831mのピークで集約なのだ。

今ヒマラヤ登山をふりかえて記録性はないものの、自分だけの問題であるが素晴らしい体験をしたと思っている。エベレストの頂上にはエベレストの素晴らしい喜びと充実感と満足感があるように、ケダルナートにはケダルナートの素晴らしい喜びと充実感と満足感がエベレストを初登頂したヒラリーと同じように私にもあった。山は他人のものではないし、登っているその人のものであり、その人がどう感じどう受けとめるかである。そしてそれをどう生かし生かしたことによりさらに充実感、満足感が増すかである。ヒマラヤ登山以前の自分と以後を比較してみて、いまだどんどん前進したい気持、何かをしたいという気持でいっぱいである。

母子草

菊池 春枝

私がケダルナート隊に参加したきっかけは母の死であったように思える。

それまではヒマラヤという存在に大きな憧れはいだいていたものの、現実には私のようなものが行けるとは思いも及ばなかった。

昭和51年の初夏、夏山合宿も真近いという矢先、バレーボールの試合中に左膝を怪我してしまった。ギブス固定され2カ月ほど松葉杖の生活を強いられた。ギブスがとれても左足の感覚が鋭く、一歩ふみ出してころんでしまった。もう山へは行けないのではないだろうか、そんな不安と焦燥の中でただ歩けることだけを願った。友の元気なリュック姿を涙ながらで見送ったものだった。訓練を続けながら数歩ずつ歩けるようになり、そしてかけ足ができた時、うれしくて涙が頬を伝った。

あの時の母の笑顔が今でも忘れられない。

職場へ復帰し寮生活に戻った。足もよくなり又山へ行き始めた私に、母は以前のように強硬に引き取めなくなった。「山へ行ってきます。」と伝えると、「気をつけてね。」とあっさり出してくれるようになった。なんとなく気抜けしてしまい妙なとまどいを感じたものだった。

実の親子でありながら共に同じ屋根の下で生活できたのは、この怪我した3カ月と私が就職して職場が水戸へ移ってからの1年にも満たない短い月日であった。永遠の別れが待っていようとは夢にも思わなかった。

母は生来文な身体ではなかった。幼少の頃リウマチ熱に罹り心臓を悪くしていた。そんな身体でありながら私達姉妹3人を生んだ。きっと命がけの出産であったにちがいない。(後日医師にこの話をして驚いていたことから察しても。)

家庭の事情により次女の私は母に引き取られ、伯母の家へ預けられることになった。別れの日伯母が迎えにきた。私はリヤカーに乗せられ生家を離れた。大人の悲しみをよそに、私は遊びに行くが如く無邪気にも喜んでいたのであった。

伯母に手を引かれ、見知らぬ家に置かれると、やはり幼心にも自分の身のおき所がちがうことを肌で感じとった。

農家でもあり兄弟の多い家族の中で、男の子と同じような生活をしながら、共に自由に野原をかけまわって遊んだ。はるか彼方の西の空には筑波嶺を望み、晴れた日には奥久慈山系や日光の山脈が見えた。

私にとってはもったいないくらいの人情味あふれる環境の中で、幼年時代を何なくすごしてこれたことはこの上もなく幸福なことであった。そして中学卒業するまでの生活の場となった。

その間母は住み込みで働いていた。私が学校卒業するまではと無理して働いた。高校も無事卒業できたころ、過労がたたって身体の症状は急激に悪化していった。掛かりつけの医師より安静を命じられ、病院通いの明け暮れで数年がすぎた。風邪を引いて入院した時、ある有名な大学の医師を紹介され、心臓の手術を是非受けるようにと進められた。レントゲン写真を見せられ、心臓は普通の人の3倍とも4倍とも言えるほどに肥大し周囲の内臓を圧迫していた。心臓弁膜症であることは以前から知ってはいたがこれほどになっているとは予想外であった。いかに危険な状態にあるかがわかった。精密検査を受け最終的な結果を待った。そして今の状態であるならば手術は可能だし、今までの実績から見ても90%の成功率であるとのことだった。手術の内容は弁を2ヵ所、人工弁と交換することだった。

私は迷った。何日も悩んだあげく母にその旨を言葉を濁して伝えた。最初ためらっていた母も、私に総てをまかせると言った。ふっきれない不安を抱いたまま手術にふみ切った。

手術までのひと月、病室で母は何を考え何を見つめたであろうか……

手術3日前、面会にいくと気分が良いようで陽気にはしゃいでいた。この日が母との最後の別れとなろうとは……

当日、早朝に水戸を出発したのに病院に着いた時にはすでに8時をまわってしまっていた。

母は手術室に運ばれたあとだった。すぐに追いかけても会うべきだった。

生涯悔いを残すこととなってしまった。

手術は長引いた。保存血液が足りなくなるな

どアクシデントが重なった。これほどの病院の設備でありながら血液が足りなくなるとは何事かと怒りを覚えた。私の血液を全部採ってでも母を助けたかった。悲しいかな血液型がちがう。結局私は母に何もしてあげられないのだ。妹は同型だったので輸血できた。

快復室に戻ってきて2昼夜、願いも空しく未明、意識の戻らぬまま眠るように逝ってしまった。呼べど叫べど最後まで眼を開いてはくれなかった。苛酷な手術に耐えぬいた母の顔にはあまりにも美しい笑みがうかんでいた。

唯一の救いだった。

あまりにもあっけない死の現実には私は打ちのめされた。結果が惨憺たるものであっただけに周囲の非難の眼は厳しかった。手術を受けさせたことが自然の理に背いた行為であったか否か……。私はそれらの非難に弁解の余地もなく只々首を深く垂れるのみであった。

人の世の無常を嘆き、地獄につきおとされたような苦しみを味わいながらも、己の生への執着は断ち切れないうでいた。自分だけが生きのびていることに罪の意識を深く感じながらも……

大自然の中で思う存分泣いた。誰にもわかってもらえぬ心の叫びをぶつけた。

泣き疲れ空を見上げると大きな空に雲がゆったりと流れていた。いつもと変わらぬ姿で山々は佇み、そして希望の光を投げかけてくれた。大きな懷に抱かれていて、心の重荷が少しずつ浄化されていくようだった。そして生きることへの勇気を与えてくれた。

自然に還るとあまりにも素直な心になれるのは何れ私自身も自然へ帰依していく朽ちる身であるからなのだろうか……

母は草花が好きであった。あまり外出することのない母にとって、草花の生命はこの上もなく愛しい語り友達であったのだ。山の写真を見せると、「ひとつづらい採ってきてちょうだい」と無心にせがんで私は私を困らせたものだった。

今年の6月で3回忌がめぐってくる。

月日の流れは記憶に留めておこうとする面影さえも押し流そうとする。今になって、母と共に生活できた1年数カ月の短い月日は、天が与え賜う深い摂理の由縁であったと思えるようになってきた。

今回のケダルナートドームに無事登頂できた

のも、靈魂となつてからも遠いガンゴトリの地まで我が身を案じ、夢枕に現われ見守ってくれたからだと思う。子を思う親のはかりしれぬ愛の深さをこの歳になつてしみじみと悟つた。

五体満足に生んでくれた今は己き母に感謝の気持ちでいっぱいである。

御霊よ安らかに眠りたまえや永遠に……

80'H A J ケダルナート エク スペディションに参加して

大阪勝山山岳会会員 北出 昭彦

私がこのEXPに参加するようになった背景は実に単純で、今から2年近く前にこの話を聞いた。しかし何と言ってもヒマラヤの話、全然本気にしなかったが、うちの南氏に言われるうちになんだか行ける気になって来て、つい話に乗ってしまった。最初にケダルナートをフォトで見た時、ボケーとした山で僕にも登れそうという気がした。

5月の合宿で、メンバーの皆さんと会った。その時は初めて事故現場に行き合わせた。アラスカへ行くはずだったと聞く彼らの胸中は、さぞ無念であつたと思う。同じEXPパーティとして、他人事とは思えなかった。

食料の調達や梱包作業を東のメンバーにまかしてしまつて申し訳ないと思つていると、内田隊長とうちの南とドクターが抜け、尾形氏が隊長になられ、山田氏、角田氏がピンチヒッターとなられたが、ドクター不在のまま、大いなる不安を抱き、あたふたとしているうちにテイクオフタイムがきて機上の人となつてしまった。出発するまでの隊長の多忙ぶりには本当に驚きで、機上で寝るよという言葉になるほどと思う。

デリー空港で関さんと女子雪永クラブの浅野さんに迎えられ市内のホテルへ、さすがにインドは暑い、とても日本の比ではないと思ひながらも、隊長、関さん御二方の足を引っ張りながら、先発業務もデリー分は終り、ウツタルカシへ。ここで食料調達と土砂崩れのため、2日とどまり、ヒマラヤの何たるかを知りはじめる。次の日からBCめざし、キャラバンを初めて経

験する。風邪と下痢と高度障害のための軽い頭痛を伴にしながらである。

BC—タポバン、そこは怪峰シブリンが目前に坐り、広く、小川が流れ環境バツグン、駅からバス1日半、徒歩5日という所である。

隊長と共に一度下り、本隊と共に再びBCへ入り、2週間の登山期間に入る。しかし悲しいかな体調は今ひとつというところ、他のメンバーも体調不良者が続出、隊は3つに分けられ、荷上げが続き、ABC、C₁、C₂と順調に作られ、一度ABCまで降りた。アタックに備え、休息を取るためである。第1アタック隊5名を見送りながら、日がな一日皆さん思い思いのことをすぞす。天気はよく、アタックへの不安を胸中に、一見のんびりした休息日を取り、上へ。

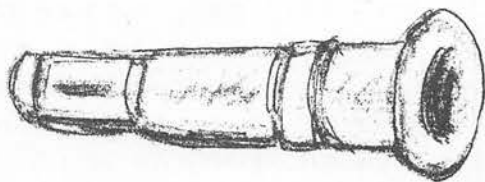
C₂へ上がる途中で、1次隊ケダルナートドーム峰アタック成功をトランシーバーが伝える。バンザイの声が上がり、次は我々だと思う。

翌日、クランポンをきかせ、アイスアックスを握り、最後の斜面をのぼり、隊長と一番あとからみんなの待つピークへと。広いところで、「ああ、来たんだな—」と思い、それまでの経過が一瞬よぎり、感激がこみ上げて来た。

こうして私のケダルナートは終わったが、反省点も多い。第1に体力がないこと、事務能力がないこと、体の管理がまずいこと、その他数えきれないぐらいある。

隊としても問題点が少しあるように思う。ドクターを用意できなかったこと、医薬品が適切でなかった、少し予算が高い、又、登山学校という性質上から、日程がたりない、EXPになりきらない等。

しかし、隊としては成功だと思うし、岳朋としての靱もできたし私は満足であつた。最後に尾形氏、山田氏、角田氏、そして隊員の方々、本当にありがとうございました。



チムロ

無限の可能性を求めて

木村陽子

今回の登山学校参加は、数年前から持ち続けた夢、“この目でヒマラヤの山を見たい”を実現させるためのものでした。私とヒマラヤとの出会いは、私が山を始めた頃に逆もどりします。一般には、日本の山を登りさらに高い山を求めてヒマラヤを目指すものなのでしょうが、私が山を始めた頃、周りには、ヒマラヤに登る人、登った人、登ろうとする人達がいる、私にとってヒマラヤはそう遠い存在でなく、いつか機会があれば登ってみたいという気持をすでにその時から持っていたのです。しかし参加するにあたって私はひどく悩みました。それは私の登山経験技術というものを私自身が良く知っており、とてもヒマラヤを登る事は無理だとわかっていたからです。無理と知りながらも実行してしまったのは、いつもの私の無鉄砲さの為です。しかし私は思います。何事も外からながめて判断できるものでなく、やはりそれに立ち向う気持を持ち、その中で自分自身のベストをつくせば必ず何か体得できるものがある、『登れる所まで登ろう』、想像の中でずっと描き続けたヒマラヤをこの体で感じることができればいいと気持を整理し、参加する事に決めたのです。

幸いにも隊長、インストラクター、仲間の方の理解と協力を得、一度も高度障害にかからず、天候も良く、すべての事に恵まれた登山であり、結果登頂する事ができました。その時の感激はとても言葉で言い表わすことのできないものでした。

そしてケダルナート登頂後、早くも4カ月が過ぎ、数々の思い出が過去の出来事となった現在、時折写して来た写真をながめると、その時その時の感動が思い出されます。日本で冬山の経験のない私には、水の作り方から始まるヒマラヤの登山活動すべてが初めての体験で、何度か苦しく辛い時がありました。最後のアタックの日などは、傾斜のきつい雪を一步一步踏みし

めて登り、途中立止っては呼吸を整え、また歩き出す。このくり返しの末やっと頂上に立つことができたのです。

期間中毎日の行動の疲れをいやしてくれたものは、コンロを囲んで食べる食事と仲間たちとの談話であり、また大自然の美しさでした。真っ青な空、澄んだ空気、目の前にはあの名高いシ布林、メルー、バキラッティの山々が広がっていた。夜まっ暗な中にこれらの山が白く映え、夜空には数え切れないほどの星が輝いて、まるで幻想のような世界でした。ヒマラヤでの28日間、大変短い期間でありましたが、とても充実したものでした。この登山に参加し私は登山技術だけでなく多くの事を学びました。そして素晴らしい仲間を得ました。人との出会いは山のもう一つの魅力でもあります。この登山を通じ学んだ事を今後の生活の中でどのように生かしていくかが、これからの私の課題だと思います。

これからも仲間を大切に、新たな夢の可能性に向けて生きたいと思います。

熊さんの感想文

熊谷洋

小学6年の時、初めて山に登りました。1,000mそこそこの山で、仙台の町から良く見えます。兄貴も山が好きで、その気持ちが、子供心になんとなくわかりました。

高校へ行ったら「山さ登っぺ」と思い、高校山岳部に入り山に登り始めました。それ以来、山とは縁が切れなくなり、ヒマラヤに1度は行ってみたいと思うようになりました。社会人になり、ヒマラヤの本を読み、よく山の友人にヒマラヤを語りかけました。そんな事をくりかえしている内に、絶対に行くという気持にかわり、いろいろ考え、悩み、H A Jの登山学校に参加しました。

最初のうちは高度障害にかかり、頭が痛くてとてもたいへんでしたが、2～3日すると快適になり、見るものがすべて新鮮でした。氷河を

歩き、7,000 mに近いピークに登り、十分満足してきました。

1カ月という期間、通常の生活から開放され、仙台へ帰ってみると、インドの世界がうそのように感じられます。インドではすべてがのんびりとゆっくり流れているのに対して、日本は、なんと忙しいのかと考えるのです。

帰国後、2日目から職場に復帰したけれど、最初の2、3日は、何日か前のインドの生活がまだ体から離れず、仕事が手につかない状況で、1日中ぼんやりしていました。ある人に言わせると、あの「ぼんやり」が「インド病」という話です。ぼくの場合、なかなかインド病がなおらず、酒が入るとかならず「インドは良いのしゃ」の連発らしいです。その時にはかなり酔っていて、次の日、高度障害にかかりながらの山歩きを何度かしました。友人が言うには、ぼくは「急性アルコールインド障害」ということです。この病気も何カ月か過ぎるとなおるらしいけれど、今だにぼくは完治していません。完治する前にもう1度、インドにいったみたい気も！

最近ほとんど寝ないのですが、帰国後2～3日たったところから、毎晩、遠征時の夢をみるようになったのです。それが1カ月ぐらい続きました。それほどインドの印象が強烈だったのかと思ったりして、そのうちに夢はみなくなり、職場にも完全に復帰でき、以前のような山行きがまた始まりました。

仕事の関係で連続してなかなか休めないので、日帰り、又は夜仕事を片づけてからといった具合に、ほとんど毎週行っています。それに、今までにがてだった岩も始めるようになり、山の視野が一段と広くなったようにも感じます。今は冬なのでほとんどスキー一本で通しています。そのうちあたたかくなったら、本格的に始めるでしょう。そして来年82年あたりにまた外国の山へと考えています。それまでに、オールラウンドの山登りを自分なりに追求し、ある程度はヒマラヤを意識した山もやりたいと思っています。

ケダルナートのC₁、C₂で吸ったたばこの味。アタックの時のあの心境、あの気持ちを大切に、今後、山、仕事とも両立させ、悔いのない青春を送っていきたいと思います。

ピーク 6,831 メートル

齊藤 光明

初めてのヒマラヤ登山なのになぜこんなに不調なのか、自分は汗くさくなったシュラフの中で昼間から横になっている。

みんなはBCに行ったというのに自分はボジュバスのテントの中にいる。

熱と高度障害でボケた頭の中で、こんなあせる事ばかり考えていた。昨日まであんなに元気だったのに、モレーンの上を走り回っていたのに、自分の体の弱さをつくづく感じる。又、ヒマラヤの高所登山のきびしさを感じた。

しかし自分は1日みんなより遅れをとっているが、ここで今日1日ゆっくり休み明日確実にBCに向う事が出来れば、なんとかみんなのタクティクスに戻れると思った。幸いにも9月24日には自分で歩いてBCに向う事が出来た。しかし足は重く少しの坂道もとても苦しい。BCに着いたものの誰も自分たちのメンバーはいなかった。

山形、菊池、自分の3人で、明日のトレーニングのつもりで小高い丘の上まで登る。

9月25日、天気快晴。BCから約4時間の所にABCはある。シブリンをトラバースして、キルティバマク氷河を少し登ったモレーンの上にある。病あがりの3人の足はかなりおそかった。自分もまださむ気がしていた。しかしモレーンの上のABCを見つけると、そんな重い足もわすれて足早になる。又ABCには遠藤、木村も見える。真っ黒に日焼けした笑顔で自分たちを迎えてくれた。この時自分は目の前に見えるケダルナートのピークに行けそうな気がした。やはり数日ぶりに友達の顔を見て安心したのかもしれない。

9月26日、順化の為、自分と山形、菊池、熊谷、大野でC₁に向う。キルティバマク氷河を渡り、ケダルナートの尾根に取付く。とても苦しい。そんな急な登りでもないのに苦しい。C₁はあと数十メートルなのに苦しくて頑張りがきかない。高所登山はあせるな、めげるな、休む

な、そんな気がした。こんなに苦労しているのにハンディーはまだ1日残っている。

9月27日、いよいよ5,200メートルのC₁にスティできる。体も快調になったし自分が遅れをとったタクティクスをこの2日でとり戻せそう。ABCからC₁スティ、次の日はC₁よりC₂そしてABCと、少しハードだったが完全にみんなと同じタクティクスに乗れた。これほどまでに自分の体が快復したのがとてもうれしかった。

9月29日、この日はABCでの休養日であった。みんなの顔がそろそろ青空の下で飲んだり食べたり歌ったり、今日まで頑張ってきたと思えば横になる。まるで不調だった自分がうそのように思えた。

9月30日、第2次アタック隊ABC出発。

10月1日、C₁よりC₂に向う自分はテントをかついで登った。苦しいが前ほどの苦しさは感じられない。目の前にドームがあるせいだろうか。C₂に着くと頭痛がしたが、明日アタックと思うとそう気にならない。

10月2日、アタックの日である。もうドームはすぐそこにある。息の苦しさも寒さもわすれてただひたすらステップを切る。ドームのスカイラインから太陽が出る。もうすぐだ、そう思うと、日本でやった準備、トレーニング、ボジュバスで熱を出した事が頭の中に浮かんでくる。とうとう稜線に出る。そこから左へ上がった所がピークである。6,831メートルまで自分の足で登ったと思うとうれしくてたまらない。次々とメンバーが登ってくる。みんなの顔を見るとなぜか涙が出てしまう。今まで山に登って涙なんか出たことがなかったのに、とても不思議な気持ちである。やはり来てよかった、くじけなくてよかった、そんな事ばかり頭の中で考えていた。

初めてヒマラヤ登山をして、6,831メートルに立ち、自分の力を知り、良き仲間を見つけた事、又新しい冒険をした事、もう海外登山は夢ではない事、たくさんの事を自分の中に取り入れたと思う。

これをきっかけにまた新しい冒険をする勇気が出てきた気がします。

感想

新 郷 信 廣

「本峰へのアタックは断念」と決定、ガスコンロの音がいやに大きく聞こえる。時折、強い風がテントを襲う。ポールは、おじぎをする様に曲がり、バタバタと騒ぐ。今迄私の目の前にあった本峰が急に手の届かない遠い頂きとなってしまった。

「しょうがないなあー」と誰かが自分に言い聞かせる様につぶやく。「そうだよなー、しょうがないさ」と私も念をおすようにつぶやく。気を取り直すように、ベンチレーターをいっばい to 開けると、冷たい風が飛びこんでくる。

テントを出ると目前にバギラティ、左にシブリン、足下にガンゴドリ氷河がいやに近くに見える。黒々とした峰々にふりそそぐ様に無数の星が冷たく光っている。今日は晴れそうだが、それにしても風が強い。山田、藤岡、両隊員に見送られ、関、高瀬隊員と共に出発する。横なぐりの風がホホをさす様に痛い、ヘッドランプの光の輪から見えかくれする高瀬隊員の靴をにらみながら登る。

どのくらい登っただろうか――。

高瀬隊員が不調を訴えC₂に下る。関隊員と2人きりになってしまった、非常に寒い、ルートを右に左にとりながら進む、クラストした雪面は小気味良くアイゼンがきく、やがてまわりが明るくなってきた、ふりむくとバギラティ、シブリンが真っ赤に染まっていた。なにげなく下を見ると、誰かが登ってくる、それは山田隊員であった。

今までの風もやみ、雪煙を上げていたドームも、今は静かな顔を見せている。追いついてきた山田隊員の馬力に引っぱられる様にドームに着く、グラーとした雪原になんとかシラけてくる。

右手前方に本峰が目前にあり複雑な気持ちで眺める、山田隊員は尾形隊長と交信を始める、雲一つ無かった青空にも、雲がでてきた。

インドの放浪芸

関 久 雄

ガンゴトリ山群がオープンになった1979年の夏、カシミールの踏査からデリーに戻った僕は、この“開かれた聖域”を目ざした。

オールドデリー駅から夜行列車に乗り、翌朝ハリドワで下車し、リシケシ行きの2等車に乗り換えた。

この車中でバウルと呼ばれる放浪芸の集団と出会ったのである。

ピーオーとカン高い汽笛を鳴らし汽車が動き始めると、やがて誰かが歌い始めた。汽車の窓に広がる風景をながめながらぼんやりと聞いていた。「田舎はのんびりしているなあ。いい気分で歌っているんだろう……。」などと、どんよりと曇った空と、あちこちにできた水たまりとそこで遊ぶ小牛の群れを眺めながら考えていると、その声が近づいてきた。少し様子が違うようだ。

インドの2等車のつくりは、日本の寝台車を木でこしらえたようなものと考えればよい。ベンチの様な長イスと通路をはさんで一人用のイスがある。長イスの上には荷物棚がある。

歌声はよく通る男の声でどこか哀調を帯びていた。男はやがて僕の座席の前に現われた。1人の盲人が、小銭の入った罐を手にシャンシャンと振りながら歌い、乗客から金をめぐんでもらっていた。男は乞食だった。目の前の罐にパラパラと小銭が投げ込まれ、1回りすると乞食は通路にすわり、次の駅で乗客に助けられながら隣の車輦に移っていった。インドの列車には通路が無い。

入れ替わりに、今度は夫婦らしい中年の男と女が乗り込んできた。男はやはり盲人で、手に胡弓を持ち、女は手にカスタネットを持って歌い始めた。それは素晴らしい歌だった。やるせない胡弓の音色と激しいカスタネットの響き、力強く、どこか哀しく、胸を揺さぶられるような歌声に僕は泣きたくなるほど感動した。こんな僕とうらはらに周りの乗客は、「又来たか、！」

といった感じで仕方なしに5パイサ、10パイサを罐にパラパラ入れてやっていた。

その光景に、ふと日本の瞽女さんの門付に似ていると思った。瞽女=盲目の旅芸人、三味線を背に越後や津軽の地を流れながら歌い生きた女たち。いや、目の前の彼らは昔、河原者とかが、河原乞食と呼ばれた芸人の姿そのものではあるまいか。街角、戸口、車中と、その場その場が真剣勝負であり、彼らの舞台なのだろう。彼らの歌はその背後にある日々の生活の重さを越えて僕の胸を打った。

こうして、次から次へと駅で停車する度に、この乞食であり、放浪の詩人で音楽家の集団が風のように現われ去っていった。この集団が西ベンガルから流れてきた、バウルと呼ばれる集団であることを知ったのは帰国後である。

日本の河原者と呼ばれていた者はやがて歌舞伎として昇華したとかいうが、彼らはバウルというカーストの一集団として無名のまま消えていく人々である。僕は去りがたい思いを残してリシケシに降りた。

ガンゴトリ山群へはモンスーンによる道路寸断でウツタルカシまでも入れなかった。やむなく予定を変更し、ケダルナートの聖地に向かった。翌年、再びガンゴトリに向かい、幸いにして、ケダルナートのドームに立つことができた。いつか機会があるならば、インドの放浪芸人と再び会い、あの音楽にもう一度酔ってみたいものだ。



ヒマラヤへの長い道

高瀬 敏久

私が外国の山に対して憧れをいだきだしたのは、5～6年前からである。丁度、ブルやボナッティなどの本を読みあさり、アルプスを目標にトレーニングを重ね、冬期登攀も行なうようになった頃のことである。しかし、しだいに興味はアルプスからヒマラヤへと移っていった。というのは「遊び」的要素の強いアルプスに対して、まだ人間の手で汚されていない大自然が残され、純朴な山村の民との交流が得られるヒマラヤの方により自分の求めているものがあるという気がしたからである。しかしヒマラヤとなると資金、休暇、仲間など障害は大きかった。そのうち資金については努力をすればなんとか目途はつくものの、後の2つは深刻な問題であった。

まず休暇の問題については、私の勤務していた会社では2週間以上休むことは困難で、どうしても行こうとすれば退職するしか方法がなかった。しかし世間からみれば半官半民で安定した職場とされている会社を辞めることは、オイルショック後の不況下に於ては容易なことではなかった。いろいろと思案した結果、以前から憧れていた自由業へと転職の夢をも併せて実現すべく、税理士試験に挑戦することを決意し、以後、山と試験の二兎を追う生活となった。科目合格制で5科目合格に達すれば資格が取得できるわけであるが、最初に2科目合格した時は、ヒマラヤへの夢が大きく前進したと感じたものである。ところが翌年は受験科目が全部不合格となり、仕事と山行の片手間に勉強するのでは資格取得は相当長期を要するというのを痛感したため、思い切って退職し、受験浪人として勉強に専念することになった。この時期は精神的にも苦しく、他のヒマラヤへ行く連中が左程苦勞もなく休暇を取ったりしているのに、何故、自分だけがこんなに苦しまなければならないのかとも思ったりしたが、自分にはこの方法しかないのだと言い聞かせて、背水の陣を敷いて頑

張ったことが功を奏して、合格に結びつくことができた。

次は仲間の問題であるが、名古屋から東京へ転勤して知り合いがいる山岳会へ入ったが、その会是一般的な山行に終始して、遠征の「え」の字の声も出てこない会であった。入会后、何度となく会員に呼びかけを行なったが、全く反応がなく、ついに会を見限り外部に仲間を求めざるを得なくなった。そして他の会の人と遠征の打合わせを行なったりしたが、それも結局御破算となってしまった。H A Jの登山学校のことを知ることになったのはその頃のことである。最初は、それが技術的困難性の少ない登山であることからあまり関心を示さなかったが、これといった登山実績のない私は他に参加できる遠征隊もなかったため、今が年齢的にもラストチャンスであり、7,000メートル近い高度を経験するだけでも意義があると考え、この遠征に参加することにした。それと同時に登山学校の隊員から希望者を募って、登山学校修了後ネパールで自分たちの手による登山を行なうことにし、技術的困難性に対する欲求不満を多少なりとも解消するよう努めた。

3月の第1回合宿以後、遠征の準備も日増しに忙しくなってきた。隊員が全国に散らばっている関係上、実際の活動は東京在住の隊員が中心とならざるを得ず、私も装備等の担当として不十分ながらも遠征進行の過程に参加させてもらった。丁度その時期は7月の税理試験が目前に迫っていて、一秒たりとも惜しかったが、遠征から得られるものの大きさは自分がそれに対していかに打込んだかにかかっていると考えて、必要最低限の仕事はしたつもりである。そして出発前1カ月は試験も終わったのはとんど山に入っていたが、勉強で弱った体力を回復するためと事故により参加できなくなることを虞れ、登攀はほとんどやらず、縦走中心にして本番に備えたものである。

遠征から帰って、早いものでもう2カ月近く過ぎてしまった。何年も前から憧れ、準備してきた割にはあっけなく終わってしまったというのが実感である。しかし今でも目を閉じれば、登山学校やその後に引続いて行なったネパール登山やインド旅行の思い出が彩かに蘇ってくる。

ヒマラヤにはもう二度と行けないかもしれない。しかしその思い出は、私のこれからの人生に於て珠玉のように輝き続けていくことだろう。

感想

藤岡明生

登山学校が終わって、まだ数カ月しか経っていないのに、もう何年も昔の出来事のような気がする。ボクにとって、ヒマラヤなんて机上の世界でしかなかったのが、ある山岳雑誌を見てH A Jの登山学校を知り、実際にヒマラヤの世界を経験することが出来たのである。

山岳会にも入っていない自分にとって、ヒマラヤに行けるチャンスなんて、そうざらにはなく、この登山学校は格好の良い機会だと思って参加を希望した。

ヒマラヤはもちろん、外国も初めてで、日本以外の国を見られていろいろ勉強になった。

キャラバンの1日目、リシケシに向うバスの車窓から見たスラム街、子供達は裸同然、ボロボロのテント生活、自分は本当に日本人に生れて良かったと思う。行く先々の、どの村もどの町も悲しいくらい貧しい。そしてそこに生きる人々は、その生活に満足しているのか、諦めているのか、昼間だというのに、大の男が木陰でゴロゴロしている姿を数多く見かけた。人が多すぎて仕事がないのかとか、あれや、これやかってに想像してしまう。変に自分の物差で見るから分らないのかもしれない。インドはインドの物差で見ないと、なにも理解できないと、かってに結論づけてしまった。

デリーを出てから7日目で、ようやくBC入りをした。バギラティ、シブリンとBCの回りの山々がすばらしい。

あくる日、朝日に輝くシブリンのスノー・キャップが美しく、シャッターを押すのも忘れて暫らく見いつてしまった。山々は、朝、昼、夕方、月夜等、その時々違ったすばらしい顔を見せてくれるのである。その度ごとに見いつてしまう。

ボクがドームを踏んだのは、2次アタック隊として、それも隊長の一言のおかげである。

それまで1次隊として登ってきたボクは、アタックの当日になって、頭痛、嘔吐等が激しく、自分から下山を申し立てた。1次隊は少なく見ても15時間の行動が予定されていたので、とてもついでに行けそうもなく、反対に足を引っぱり兼ねないと思ったのである。その時、関さんが「ここまでがんばって来たのに、どうしてもだめか?」とってくれたが、もう1次隊としてやっていく気力に欠けていた。C₁に下る途中でC₂に上る2次隊と合流した時、みんなから「ご苦労さん」といわれて、ボクは、自分が軟弱な為に、責任が果たせなかったのも、何となく合せる顔がないといった感じであった。この時、1次隊の「ドーム登頂」の知らせが入ったので救われた思いがした。やがて2次隊もC₂に向けて登り出した。その後姿を見送っていると、ラストの隊長がふいに振り返り、「もう1度上って見ないか。」とってくれた。1度しかないチャンスを2度くれたのである。こんどこそと思い、登り返した。

こうして、ボクも6,831mのドームを踏むことができた。

この登山学校でいろんな人達と知り合うことがき、とても良かった。このあと隊員どうし4人でネパールを回ったことも、良い思い出になった。

10月2日 登頂、 そして……

丸 誠一郎

頭の中がボーッとしている

「睨を開けているのがどうしてこんなにつらいのか。」

雪で何度、顔を洗っても目が醒めない。

今まで張っていた緊張感が、クモの糸を切ったようにしぼんでゆく。しっかり歩けと頭で命令しても、肝心の足がいうことをきかない。こんな体験は何年間か山歩きをしていても初めてのことだ。先頭の姿はかなり下に見える。抜け

るような青空、天気はバチが当たってもいいぐらい良すぎる。ふとトレースを振り返ると、我々をDomeの頂きまでしか踏ませなかったことをさも誇らしげに感じているかのように、Kedar nathはその巨漢な姿を私に反射させてくる。

雪がぐさぐさでステップをきいてもきかない。食糧の大袋がうまくザックにつかず、背中の荷が安定しない。得意のシリセードを試みてもうまく滑れないし、体の自由が妙な疲労感で増々きかなくなってくるのが自分でわかるのだ。自分の無様な姿が情けなくなった。

「今までいくつ山を登ってきたんだ。こんなことでシゴカレたらみっともないぞ。」と自分を叱咤する。

漸く6,200 m, Holland PartyのCampが見えてくる。もうろうとしていた意識が甦ってきた。「緊張して歩け…。」自分に言い聞かせて歩き続けた。水を飲んでも、ひっぱたいても、雪面に顔を漬けてもぬけなかった睡魔が、6,200 mまで降りると次第に消えていった。

尾形隊長が私を出迎えてくれた。

『だいじょうぶですか？ ザックをかして下さい。』

サイボーグの前に完全に臥した格好だった。その時やっと高度障害に犯された自分に気がついた。体内の酸素量は下界の1/3。このことが、高さに弱い人間に与える影響がこんなにもはっきりと素直に出てくるものかと、ただ驚くばかりだった。

「下りれば治る」この病気、会社員が土日を使って富士山へ何度か登っても防ぐことは出きないようだ。日本の3,000 mの低山だけでは、完璧だと思える練磨を積んでも、7,000, 8,000 mには通じにくい。日本の3,000 mとヒマラヤの7,000 mとは、その次元を全く異にしているということの証しの一つなのだろう。

10月2日の午後は、そんな意味で私にとってこの山のMain Eventであった。そしてまた、次の8,000 mへの炎が熾りだしたことも確かかなようだ。

感想

山形正巳

記憶が薄らいでゆく中で、特に印象に残ったことや、その時を今振り返ってみると、自分の力を充分に把握できなかったことを反省させられる。というのは、BCに入った時から体調を崩してしまったことで、幸いにも2日後から回復したが、短い登山の場合最も注意すべきことだろう。原因としては、BC入前日に雨に濡れたことと、次の朝の降雪による気温の低下等、根本は高度に順応できていないことによるのだろう。それと、私の場合、出発間に仕事上でのトラブルが発生し、その為の精神的不安があったことにもよるだろう。

回復後は順調に進み、それほど影響は出なかった。新しい高度を最初に体験する時はやはり辛かったが、2度目のときは快調である。順応が出来たのだろう。技術的困難な山ではなかったが、それでも登頂出来たことは嬉しい。

本峰には行けなかったが、ヒマラヤ登山の最初のステップとして活動して行きたい。

又、登山以外にも、その地域や人との交流を通じて私個人の心も豊かになりたいと思うようになったのは、参加し見聞して来た為であろうか。インドを後にする間際に、ひとりオールドデリーの下町に入った。いろいろな商いの店や、小さな工場が軒を並べる前の道は、人、牛、車、輪タク等でごった返し、そこは恐ろしく活気のある所であり、又路地裏での織物商の膝談判の交渉なども懐かしく思い出される。

山行をふり返って、私なりに最善を尽くしたが、不備な点や体調を崩した時にお世話になった隊員各位にお礼申し上げます。

次の機会にはぜひ切り立った壁を攀じりたいと、ドームから見た岩壁群を思い出しながら考えております。

お世話になった方々（敬称略・順不同）

インド登山財団
在日インド大使館
在印日本大使館
(株)日本山岳協会
立川航空医学実験隊
神奈川大学Ⅱ部WV部海外登山委員会
飛騨山岳会インド・ガンゴトリ登山隊
群馬女子ガンゴトリ登山隊
(株)東 食

樋口商店
日清食品(株)
日本アルファ食品(株)
(株)キャラバン
エアー・インディア
J・シン
西郡光昭
田辺忠宇
細貝 栄

編 集
後 記

遠征以来1年以上を経過しての、報告書発刊となった。そのため内容的に多少チグハグな点がいくつかでてしまった。

当初、報告書の性格について、記録性や学術性が薄いので各隊員の体験感を中心としたものでまとめようとしたが、進行するにつれて少しでも中身のあるものという色気がでてきた。その色気も完成が近づくにつれて高揚していったが、時すでに遅しというところである。とにかく20名の隊員が一つの目標に向かって一致協

力し、そのための努力を一枚岩にして成し遂げた成果を、素直に盛り込めればと思った。そういった意味では若干内向的であったかも知れないが、登山学校という性格上やむを得ないものと思う。

最後にこの遠征隊にいろいろとご援助くださいました方々に厚く御礼申し上げます。

1982年5月

大野 廣美

ヒマラヤ、そして仲間達へ！

HAJ 登山学校 1980 年の記録
ガンゴトリ山群ケダルナート (6,940 m)

発 行 1982 年 5 月 5 日

発行所 日本ヒマラヤ協会

(The Himalaya Association of Japan)

〒160 東京都新宿区高田馬場 3-23-1 淀橋食糧ビル
TEL 03-367-8521 506 号

振替 東京 0-48954「日本ヒマラヤ協会」

編 集 1980 年日本ヒマラヤ協会インドヒマラヤ登山隊

編集長 大野 廣美

印刷所 いしくら印刷

